

ふたたび  
トリアッチ同志と  
われわれとの  
意見の相違について

レーニン主義の現代における  
いくつかの重要問題

外文出版社  
北京

ふたたび  
トリアッチ同志と  
われわれとの  
意見の相違について

レーニン主義の現代における  
いくつかの重要問題

『紅旗』雑誌編集部

外文出版社

北京

## 目次

一、序言	七
二、今回の各国共産主義者の大論争はどういう性質のものか	一一
三、現代世界の矛盾	二〇
トリアッチ同志の新概念	二〇
自分さえ信じられぬ世界改造の処方箋	二四
世界の矛盾にたいする二つの根本的にちがった見方	二六
第二次大戦後の世界の矛盾の焦点	二四
世界の矛盾の焦点はいま変わったかどうか	二四
万国のプロレタリアと被抑圧民族は団結しよう	二五
要約	二六
四、戦争と平和	二九
問題は主観的な想定にあるのではなく、社会発展の法則そのものにある	二九

「戦争は他の手段による政策の継続である」という原理は時代おくれになったか……………七  
歴史と現実はいわれわれになにを教えているか……………八

史的唯物論か、それとも唯武器論か……………六

奇怪しごくな命題……………七

戦争と平和の問題についての中国共産主義者の基本的論点……………九

### 五、国家と革命……………二二

トリアッチ同志のいわゆる「構造改革論」の「積極的貢献」とはなにか……………二二

レーニン主義との比較……………二六

奇妙きつな憲法……………二六

現代の「議会主義的クレチン病」……………二四

国家独占資本は「独占資本の発展に反対するいっそう効果的な手段」になりうるか……………二四

偉大なレーニンの教えを銘記せよ……………二七

### 六、戦略のうえでは敵を蔑視し、戦術のうえでは敵を重視する……………二六

歴史の分析……………二六

革命派と改良派との分水嶺……………二七

偉大な典範……………二〇

中国の共産主義者の戦略思想と戦術思想……………一九〇

ひとつの鏡……………一九五

### 七、二つの戦線における闘争……………一九九

現代修正主義は国際労働運動の主要な危険である……………一九九

「われわれの学説は教条ではなくて、行動の指針である」……………二〇八

マルクス・レーニン主義の普遍的真理と自国の革命の具体的実践をむすびつける……………二二五

原則性と融通性……………二三四

### 八、万国のプロレタリアは団結しよう……………二三四

## 一、序言

トリアッチ同志は、イタリア共産党第十回大会で中国共産党を公然と攻撃し、公然たる論争をひきおこした。多年らい、トリアッチ同志とイタリア共産党の一部の同志は、国際共産主義運動の一連の重大な原則問題で、マルクス・レーニン主義の根本原理にそむく多くの誤った言論を發表した。こうした誤った言論に、われわれは一貫して異なつた意見をもっている。だが、われわれは、これまでトリアッチ同志らと公然たる論争をまじえなかつたし、論争するつもりもなかつた。われわれは、ゆらい、国際共産主義運動の団結をつよめることを主張している。われわれは、ゆらい、モスクワ宣言とモスクワ声明に規定された独立と平等の原則、話しあいで見解を統一する原則にもとづいて兄弟党のあいだの関係を処理することを主張している。われわれは、ゆらい、兄弟党のあいだに生まれる意見の相違を内部の話しあいのルートをつうじて解決し、二つの党またはそれ以上の党のあいだの会談、あるいは兄弟党の会議の方法で解決すべきことを主張

している。われわれは、ゆらい、いかなる党も他の兄弟党にたいして公然たる一方的な非難をおこなってはならず、他の兄弟党にたいする中傷や攻撃はなおさらおこなってはならない、と考えている。われわれは、このように断固かわることなく団結を主張してきたのである。われわれは、トリアッチ同志らがこのたびの自党の大会を利用して中国共産党に公然たる攻撃をくわえるとは、かつて思いもよらなかつた。かれらがこのように直接われわれに公然たる論争をもちかけてきた以上、われわれとしてはどんな方法があるだろうか？ まだこれまでのように口をつぐんでいることができるだろうか？ 「ただ州官の放火を許し、庶民の点灯を許さず」（役人は火を放つてもかまわないが、民衆はあかりをとすことも許されない——訳注）とでもいうののだろうか？ いな、いな、いな、それでは道理がとおらない。われわれはどうしても回答しなければならぬ。われわれは、他に道のないところまで追いつめられた。われわれとしては、かれらに公然と回答するほかはない。このため、われわれの『人民日報』は、一九六二年十二月三十一日、「トリアッチ同志とわれわれとの意見の相違」という社説を発表したのである。

トリアッチ同志とイタリア共産党の一部の同志はこの社説に非常に不満であり、またもや矢つぎばやにいく編かの文章を発表して、われわれを攻撃した。かれらは、われわれの文章が「しばしばはつきりした明確性に欠けており」、「きわめて抽象的、公式的で」、「現実的な感覚に欠

けている」①といい、またわれわれがイタリア共産党の活動を「よく理解していない」①といい、われわれのイタリア共産党にたいする観点は「あまりかになつ造されたものである」②といい、われわれは「教条主義者、セクト主義者であり、過激な革命的な語句で自己の日和見主義をおおいかくしている」②などといっている。トリアッチ同志らは、執拗にも公然たる論争をつづけようとしている。それならそれで結構である、論争をつづけよう。

いま、この文章は、トリアッチ同志らが多年らい発表してきた誤つた言論にたいして、いつそう詳細に分析と批判をくわえ、かれらのたえまない攻撃にたいするわれわれの回答としようとするものである。われわれとしてはトリアッチ同志らがわれわれのこの回答を読んでのち、はたしてどのような態度をとるかを見ることとしよう——かれらはなおわれわれを「しばしばはつきりした明確性に欠けている」というかどうか、かれらはなおわれわれを「きわめて抽象的、公式的で」、「現実的な感覚に欠けている」というかどうか？ かれらはなおわれわれがイタリアの情勢とイタリア共産党の活動を「よく理解しておらず」、イタリア共産党にたいする観点は「あまりかになつ造されたものである」というかどうか？ かれらはなおわれわれが「教条主義者、セクト主義者であり、過激な革命的な語句で自己の日和見主義をおおいかくしている」というかどうか？ いちおう様子を見ることとしよう。

要するに、ただ州官の放火を許し、庶民の点灯を許さず、というのでは道理が通らない。古来、民衆から認められたこのような不公平な道理があつた例はない。いわんや、われわれ共産主義者のあいだの意見の相違にたいしては、事実をあげ、道理を説くという態度をとりうるだけであつて、主人が下男にたいするような態度を断じてとつてはならない。万国のプロレタリアと共産主義者とはかならず団結しなければならない、だが、モスクワ宣言とモスクワ声明の基礎のうえに立ち、事実をあげ、道理を説くという基礎のうえに立ち、平等な話し合いとやりとりの基礎のうえに立ち、マルクス・レーニン主義の基礎のうえに立つてこそ、はじめて団結することができるのである。もし主人が下男にむかつて指揮棒をふるることだけを許し、口先で「団結、団結」となえるだけなら、実際は「分裂、分裂」と言っているのである。国際プロレタリアートはこうした分裂主義をうけいれることはできない。われわれの必要とするのは団結であつて、ひとにぎりの人びとが分裂をつくりだすのは断じて許さない。

① 一九六三年一月十日イタリア共産党機関紙「ウニタ」のトリアンチの文章「討論を真実の限度にもどそう」参照

② 一九六三年一月十六日の「ウニタ」のルイジ・ロンゴの「権力の問題」参照

## 二、 今回の各国共産主義者の大論争はどういう性質のものか

現代修正主義者がマルクス・レーニン主義者に挑戦しているため、いま、国際共産主義運動では、理論の問題、根本路線の問題、政策の問題で大がかりな論戦がくりひろげられている。この論戦は、全世界のプロレタリアートと勤労人民の全事業の勝敗、全人類の運命にかかわるものである。

論戦中の思潮は、究極のところ、ひとつは真のプロレタリア思潮、つまり革命的マルクス・レーニン主義の思潮であり、ひとつは労働者の陣列内にまぎれこんだブルジョア思潮、つまり反マルクス・レーニン主義の思潮である。世界に労働運動がうまれていらい、ブルジョアジーはつねに思想の面から極力労働者階級をむしばみ、労働運動をブルジョアジーの根本利益にしたがわせ、各国人民の革命闘争をよわめ、各国人民をわき道にそらせようとくわだててきた。これらの目的をとげるため、ブルジョア思潮はときにはこの形であらわれ、ときにはあの形であらわれ

る、またときには右よりの形であられ、ときには「左」よりの形であられる。マルクス・レーニン主義の発展の歴史は、このような右の面から、あるいは「左」の面からのブルジョア思潮とのたたかひの歴史にはかならない。マルクス・レーニン主義者の任務は、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンのように、種々さまざまなブルジョア思潮の挑戦を回避せず、いついかなるときも理論の問題、根本路線の問題、政策の問題の面でかれらの攻撃を粉碎し、プロレタリアート、被抑圧人民、被抑圧民族に勝利への闘争の道を正しくさししめすことである。

マルクス主義が労働運動のなかで支配的な地位をしめていらい、マルクス主義者は修正主義者、日和見主義者とたびたび闘争してきたが、そのうち、もつとも歴史的な意義のある大論戦は二回あつた、いまは第三回目の大論戦がくりひろげられているのである。第一回目は、レーニンが第二インターナショナルのカウツキー、ベルンシュタインらの修正主義者、日和見主義者とのあいだにおこなつた大論戦である。この論戦はマルクス主義をあらたな発展段階——レーニン主義の段階とプロレタリア革命の時代におけるマルクス主義のあらたな発展段階——レーニン主義の段階へとおしすすめた。第二回目は、スターリンを先頭とするソ連の共産主義者と国際共産主義者へトロッキー、ブハーリンらの「左」翼冒險主義者、右翼日和見主義者とのあいだにおこなつた大論戦である。この論戦はレーニン主義をまもり、プロレタリア革命、プロレタリアート独裁、被

抑圧民族の革命、社会主義建設についてのレーニンの理論と戦術をあくまかにした。この論戦といりまじりながら、わが中国共産党の内部でも、かなり長いあいだ、毛沢東同志がマルクス・レーニン主義の普遍的な真理を中国革命の具体的な実践と密接に結びつけるため、「左」翼冒險主義者、右翼日和見主義者とはげしい論戦をかわした。

目下あらわれている第三回目の大論戦は、まずユーゴスラビアのチトー一味が公然とマルクス・レーニン主義を裏切つたところからひきおこされたものである。

チトー一味は早くから修正主義の道にふみこんだ。一九五六年の冬、チトー一味は帝国主義がおこした反ソ反共の波に乗じて、一方ではマルクス・レーニン主義に反対する宣伝をすすめるとともに、いま一方では帝国主義の陰謀に呼応し、社会主義国内部で転覆活動をおこなつた。かれらのこうした宣伝と破壊活動は、ハンガリーの反革命反乱事件で最高潮にたつした。当時チトーはプーラで悪名たかい演説をおこなつた。チトー一味は極力社会主義制度をこきおろし、ハンガリーは「根本から政治制度をかえなければならぬ」①と要求し、ハンガリーの同志たちは「共産党再建にむだ骨折りをする必要がない」①といつた。各国の共産主義者はチトー一味のこのような反逆的な攻撃にたいして厳粛な闘争をおこなつた。一九五六年四月、われわれは「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」という論文を発表したが、チトー一味のこの攻撃にたいし



て、われわれは一九五六年の十二月末、また、「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」を発表した。一九五七年の社会主義国共産党・労働者党代表者会議は有名なモスクワ宣言を採択した。この宣言は、修正主義が現在の国際共産主義運動の主要な危険であるとはつきり指摘し、現代修正主義者が「マルクス・レーニン主義の偉大な学説を中傷しようとし、これを『時代おくれのもの』、いまでは社会発展にとつて意義を失つたようだと宣告している」②のを非難している。チトー一味はこの宣言に署名することをこぼみ、一九五八年に徹底した修正主義の綱領を発表して、モスクワ宣言に対抗した。この綱領は、国際共産主義者から一致して批判された。ところが、そのご、とりわけ一九五九年らしい、いちぶ共産党の指導者はこともあろうに、じぶんが署名して同意した共同のとりきめにそむき、チトーに似かよつたことばを口にするようになった。のちに、これらのひとびとはますます自制できなくなり、かれらのことばもますますチトー同様になり、できるだけアメリカ帝国主義者を美化するようになった。かれらは、闘争のはこ先をマルクス・レーニン主義を堅持し、モスクワ宣言の革命的原則を堅持する一部の兄弟党にむけ、これらの兄弟党にかつて気ままな攻撃をくわえた。一九六〇年の各国共産党・労働者党代表者会議は、兄弟党のあいだにうまれたいくたの意見の相違について、平等な話しあいを経たとりきめをおこなつた。この会議が発表したモスクワ声明は、ユーゴスラビア共産主義者同盟

の指導者がマルクス・レーニン主義を裏切つたことをきびしく非難した。われわれは、この会議で兄弟党がとりきめをおこなつたことをひじょうに喜び、われわれ自身の行動のなかで厳格にこれらのとりきめにしたがらない、これらのとりきめをまもつてきた。ところが、まもなく、一部の兄弟党の指導者はこともあろうに、またしてもじぶんが署名して同意した共同のとりきめにそむき、自党の大会で公然と他の兄弟党を攻撃し、国際共産主義運動の意見の相違を敵の面前にさらけだした。かれらは一方では兄弟党を攻撃するとともに、他方では大いにチトー一味をもちあげ、意地にも我にも、チトー一味と野合している。

事態の発展は、現代修正主義の思潮が新しい条件のもとにおける帝国主義の政策の産物であることを物語っている。したがつて、現代修正主義の思潮は必然的に国際的な性格をおびたものであり、マルクス・レーニン主義者と現代修正主義者の論戦も、これまでと同様、必然的に国際的な規模をもつ論戦に発展することとなる。

マルクス・レーニン主義者と修正主義者、日和見主義者との第一回目の大論戦は、偉大な十月社会主義革命の勝利をかちとり、世界的な範囲でプロレタリアートの新しい型の革命的政党をうちたてた。第二回目の大論戦は、ソ連における社会主義建設の勝利と、偉大なソ連を主力軍とする世界反ファシスト戦争の勝利をかちとり、ヨーロッパとアジアの一連の国家における社会主

義革命の勝利をかちとり、偉大な中国人民の革命の勝利をかちとつた。目下のこの大論戦は、帝國主義陣営が崩壊しつつある時代、社会主義勢力が発展し、強大となりつつある時代、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの偉大な革命運動が澎湃とわきあがりつつある時代、ヨーロッパとアメリカの偉大な労働者階級があらたに目ざめつつある時代におこなわれている。現代修正主義者がこの論戦をひきおこしたのは、マルクス・レーニン主義を一拳に抹消し、各国の被抑圧人民と被抑圧民族の解放闘争を解消し、帝國主義者と各国反動派の滅亡の運命を救おうと妄想しているのである。だが、マルクス・レーニン主義は抹消することができないし、各国人民の解放闘争は解消することができない、また、帝國主義者と反動派の必然的に滅亡する運命は救うことができない。現代修正主義者の願いに反して、かれらの恥ずべきくわだてはかならず失敗するにきまつている。

いま、世界の労働運動がすべてのマルクス・レーニン主義者に提起している任務は、現代修正主義者がマルクス・レーニン主義にたいしてくわえている全面的な修正に回答をあたえることである。かれらのこのような修正は、いまの國際帝國主義、各国反動派あるいは自国のブルジョアジーの必要に応じて、マルクス・レーニン主義の革命的な魂を奪いさり、マルクス・レーニン主義のイロハともいふべき階級闘争の原則をきれいさっぱり捨てさろうとするものであつて、かれ

らがとめておこうとするのはマルクス・レーニン主義の虚名だけである。

現代修正主義者は、國際問題やさまざまな社会問題を論ずるにあつて、ブルジョアジーのまつたく虚偽的な「超階級」の観点をマルクス・レーニン主義の階級分析の観点におきかえている。かれらはすこしも事実にもとづかない、まつたく主観的なおびただしい憶測と「仮設」を社会の實際状況にたいするマルクス・レーニン主義の科学的な探究におきかえている。かれらはブルジョアジーの實用主義を弁証法的唯物論と史的唯物論におきかえている。ひと言でいえば、かれらは、じぶん自身もわかりにくく、信じにくい多くのたわごとをわめきたてて、労働者階級、被抑圧人民、被抑圧民族を愚弄しているのである。

数年らい、國際的な多くのできごとは、現代修正主義者の「理論」とかれらの政策の破産をたえず立証してきた。だが、かれらの「理論」と政策が全世界人民のまえに醜態をさらすごとに、かれらはきまつて、レーニンのいうように「自分の恥を自慢して」③、手段をえらばず、さきのこと考えず、その闘争のほこ先をもつばら革命的なマルクス・レーニン主義者にむけ、そのような幻想を持つな、そのような妄動をするなとあらかじめかれらに警告した國際的な兄弟にむけてきた。かれらは内部にうつぶんをはらす方法で自己の「勝利」を証拠だて、革命的なマルクス・レーニン主義者を孤立させ、革命の原則をまもるすべての國際的な兄弟を孤立させようと夢

みている。

こうした状況のもとで、すべて真の革命的なマルクス・レーニン主義者たるものは、どうして現代修正主義者の挑戦に応じないでいることができよう？ 原則的な問題のうえで生じた意見の相違や論争にたいしては、マルクス・レーニン主義者は是非をあきらかにし、問題をはつきりさせる責任がある。団結して敵にあたる共同の利益のため、われわれはゆらい内部の話しあいをつうじて解決することを主張し、意見の相違を敵の面前にさらけだすことに反対してきた。だが、一部の人がびとがしいて論争を表面化しようとする以上、われわれはどうしてかれらのこのような挑戦に公然と回答しないことができるか？

さいきん、中国共産党はまことに途方もない攻撃をうけた。それらの攻撃者はさかんにわめきたて、事実を無視して、多くの罪名をデッチあげ、それをわれわれにかぶせている。これらの攻撃はどこからきたのか、またどのようにして生じたのか、これを理解するのは決してむずかしいことではない。こうした攻撃をくわだて、すすめているひとは、いつたいその身をどこにおいているのか、また誰とともにいるのか、これもまた白日のようにあきらかである。

ここ数年らしいのトリアッチ同志その他イタリア共産党の一部の同志の言論を読んだひとなら、すぐ理解できるだろう、トリアッチ同志らがイタリア共産党の今回の大会で中国共産党のマルク

ス・レーニン主義的観点への攻撃に付和雷同したのは、けっして偶然なことではない。イタリア共産党のこの大会のテーゼ、トリアッチ同志が大会でおこなった報告と結語のなかには、マルクス・レーニン主義とまつたくあいれない思想の脈絡がうかがわれている。この脈絡によれば、国際的な問題にせよ、イタリアの国内の問題にせよ、かれらはすべて社会民主党、現代修正主義者と共通のことはをもっている。もしイタリア共産党のテーゼとイタリア共産党のその他の文書とをくわしく見るなら、そのなかの多くの命題、多くの観点は、なんら新味のあるものではなく、基本的には古い修正主義者ももっていたものであり、ユーゴスラビアのチトー一味の修正主義者がずっと宣伝してきたものであることがわかる。

では、つぎにイタリア共産党のテーゼその他の関係文書を分析し、トリアッチ同志らがマルクス・レーニン主義からどれほど遠く離れてしまっているかをはつきりと見とどけることにしよう。

① 一九五六年十二月八日付のユーゴスラビアの『ボルバ』紙、ユーゴスラビア連邦人民議会におけるカルデリの演説参照

② 「共産党・労働者党のモスクワ会議の宣言」

③ 「ドイツの労働運動のなごをまねてはならないか」。『レーニン全集』第二〇巻

### 三、現代世界の矛盾

#### トリアッチ同志の新概念

トリアッチ同志とイタリア共産党の他のいちぶの同志は、国際情勢にたいするかれらの評価をすべての問題提起の基本的な出発点としている。

トリアッチ同志らは、その評価にもとづいて、国際問題でもイタリアの問題でも、かれら自身がさぶる得意としている新概念をつくりあげた。

一、「平和と共存をめざす世界的闘争の範囲で、国際的経済協力の政策を実現するために闘争する必要がある。この政策は、社会進歩に転換するいつ、そう早い経済発展を今日さまたげている諸矛盾の克服を可能にするものでなければならぬ」①

二、「とくにヨーロッパでは、社会構造のことなる国ぐにのあいだにさえもヨーロッパの経済

協力の基礎をおくため、すすんで統一の措置を講ずることが必要である。こうした協力は、国連の経済、政治機構の範囲内で貿易を促進し、関税障壁を撤廃あるいは減少し、低開発地域の進歩を促進するために共同の介入を可能にするようなものでなければならぬ」①

三、「ヨーロッパと世界の若干ブロックへの分裂を克服する系統的な行動をとるとともに、こうした分裂を維持している政治的、軍事的障害を打破し」①、「統一した世界市場を再建すべきである」①

四、現代の軍事技術の諸条件のもとでは、「戦争は以前と質のちがうものになった。戦争の性質のこうした変化を前にして、われわれの学説そのものについても若干あらたな考慮をくわえることが必要である」②

五、「平和と共存をめざす闘争のなかで、われわれは新しい世界をつくりたいと思う。この世界のおもな特徴は戦争のない世界ということである」①

六、「植民地主義制度はほとんど完全に崩壊した」②、「世界にはもはや帝国主義のためにのこされた勢力範囲はない。」③

七、「じじつ、今日の資本主義世界には構造改革と社会主義的な改革にむかう一種の推進力があって、それが経済的進歩と生産力のあらたな拡張にむすびついている」②

八、「プロレタリアート独裁」というこの術語は、資本主義に包囲されたひとつの国で内戦をすすめ、はじめて社会主義建設をすすめたあの困難な時期にもつていた意味内容とはちがうものをもつてよい」④

九、資本主義国の「いまの政治、経済構造のつつこんだ改革を実現する」面で、「議會制度はおもな機能をになうことができる」①

十、資本主義国イタリアでは、「全人民を国家の指導にくわらせる」②ことができる。イタリアでは、民主勢力は「憲法を完全にうけいれ、これを守るといふ状況のもとで、国家の階級的な本質と階級的な目的に反対することができる」④

十一、「国有化」、「企画化」と、経済にたいする「国家の介入」は、「大資本の権力に反対して、大独占グループの支配を打撃し、制限し、粉碎する闘争の手段」②となることができる。

十二、ブルジョアジーの指導グループは、いまでは、「かつて社会主義に特有なものと見なされた経済の計画化と企画化の概念」をうけいれることができる、「これは資本主義から社会主義への移行の客観的条件が熟したことをものがたる一つの標識とみとめられる」②

要するに、トリアッチ同志らの提起したこれらの新概念は、かれらの脳裏につくりあげられた現代世界の図式をわれわれのために描いたものである。トリアッチ同志らは、そのテーゼや文章

のなかでも、若干のマルクス・レーニン主義的語句や、どういう意味にもとれる多くの似非命題をつかつかざりたてているが、それにもかかわらず、かれらの新概念の実質をおおいかくすとはどうしてもできない。つまり、かれらは階級協力を階級闘争におきかえ、「構造改革」をプロレタリア革命におきかえ、いわゆる「共同の介入」を民族解放運動におきかえようとしているのである。

トリアッチ同志らが提起したこれらの新概念は、全世界にわたって各種の対抗的な社会矛盾が姿をけし、たがいに衝突しあう各種の社会勢力が一つに融合しつつかあるということを意味している。たとえば、社会主義制度と資本主義制度、社会主義陣営と帝国主義陣営、帝国主義国と帝国主義国、帝国主義国内部の各独占資本グループその他たがいに衝突しあう勢力、こうしたものがみな一つに融合しつつかあるか、あるいはやがて一つに融合するだろうというのである。

トリアッチ同志らのこれらの新概念は、チトー一味がああ臭名をかちえた綱領のなかで提起した一連の反マルクス・レーニン主義的な途方もない観点と一体どれほどちがっているのか、われわれにとつてこれを見きわめることはひじょうにむずかしい。

トリアッチ同志らのこれらの新概念がマルクス・レーニン主義の学説にたいする最も重大な挑

戦であり、マルクス・レーニン主義の学説を根底からくつがえそうとするものであることは、いささかの疑いもない。ここでわれわれが思いうかべるのは、エンゲルスがデューリングと論戦をかわした一書を『デューリングの科学的変革』と題したことである。いま、トリアッチ同志はデューリングの後塵を拝して、またしてもマルクス・レーニン主義の学説にあらたな「変革」をこころみようとするのはないだろうか？

#### 自分さえ信じられぬ世界改造の処方箋

「社会進歩に転換するいつそう早い経済発展を今日さまたげている諸矛盾の克服を可能にする」①にはどうすればよいか？ いいかえれば、国際、国内の対抗的な社会勢力を融合するにはどうすればよいか？ トリアッチ同志らのつぎのことばは、この問題にこたえるものである。つまり、「社会主義国、まずソ連が自由、福祉、独立、個人の全面的な発展、人格の十分な尊重、各国間の平和協力など、こうしたものに行いたい人びとや各国人民のいつさいのねがいを満たしうるような、経済と社会の秩序をうちたてるうえで、資本主義国の支配階級に平和競争をいどむことである」①というのがそれである。トリアッチ同志らのこのことばは、社会主義国と資本主義国との平和競争をおこないさえすれば、人民革命をやらなくても、資本主義国で社会主義国と

おなじような「経済と社会の秩序」をうちたてるといふことにならないだろうか？ もしそうだとすると、資本主義はもはや資本主義でなくなり、帝国主義はもはや帝国主義でなくなる、また、ブルジョアジーはもはや利潤や超過利潤を追求するために国内外で食うか食われるかの争奪をするものではなくなり、かれらは人びとのいつさいのねがいを満たし、すべての人と「平和的に協力」し、すべての国と「平和的に協力」することができる、まあこういうことになるのではないか？

これがトリアッチ同志の考えた世界改造の処方箋である。だが、こうした万病治療の処方箋はイタリアの実際運動のなかでも効能のあることが立証されていない。それなのに、マルクス・レーニン主義者はどうしてそのような処方箋を軽々しく信じていることができるだろうか？

十月革命ののち、レーニンが社会主義国と資本主義国の平和共存の政策を提起し、社会主義国と資本主義国の経済競争を主張したことは、人びとがよく知っており、マルクス・レーニン主義者はなおさらによくおぼえてはいるはずである。社会主義ソ連が成立してから四十余年のうち、大部分の期間は基本的に資本主義国と平和共存の状態にあった。われわれは、レーニンとスターリンのおしすすめた平和共存の政策はまったく正しく、まったく必要だったと考えている。この平和共存の政策は、社会主義国が国と国とのあいだの紛争を武力で解決することを望まないし、また

その必要もないということの意味している。社会主義国で、社会主義制度がしめす優越性は、各国の被抑圧人民と被抑圧民族にこのうえない大きなはげましをあたえている。レーニンは十月革命いご、ソ連の社会主義建設は、全世界の二本となるだろう、と何回も語ったことがある。レーニンは、勝利を勝ちとつたプロレタリアートは共産主義制度をうちたてることができる、「この任務は世界的な意義をもっている」⑤とのべた。一九二一年、国内戦争が基本的に終わりをつげ、ソビエト国家が平和建設の軌道へ移りはじめると、レーニンは国内の社会主義経済建設をソビエト国家の主な任務とした。レーニンは、「現在、われわれはおもに自分の経済政策によつて、国際革命に影響をあたえている」⑥とのべた。レーニンの意見は正しい。それだからこそ、社会主義の力は国際情勢にますます大きな影響をあたえているのである。だが、レーニンは、ソビエト国家の建設が世界各国人民の自己の解放をめざす闘争にとつてかわることができるとは言わなかつた。ソ連の四十余年来の歴史的事実も証明しているように、いかなる国の革命や制度の改革もすべてその国の人民じしんのことがらであり、社会主義国が平和共存と平和競争の政策をおしすすめたからといって他国の社会制度をかえることは決してできない。トリアッチ同志らは、社会主義国が平和共存と平和競争の政策をとれば、世界各国の社会制度ぜんたいの姿をかえ、人びとのいつさいのねがいを満たしうる「経済と社会の秩序」をうちたてることができる

と考えている、これには一体どのような根拠があるのだろうか？

たしかに、トリアッチ同志らも自分の処方箋をそれほど信じてはいない、だから、そのテーゼのなかで、「しかし、帝国主義国の指導グループは決して全世界にたいする支配を放棄しようとしなない」とつづけている。

だが、トリアッチ同志らは、帝国主義国の指導グループがなぜ「全世界にたいする支配を放棄しようとしなない」のかを社会の発展法則から理解しようとしていない。かれらは、これを帝国主義国の指導グループの世界情勢にたいする認識、あるいは「理解」が誤っているのだと考え、帝国主義国の指導グループにこのような認識の誤りと「理解」の誤りがあるため、「国際情勢の不安定が生まれるのだ」①と考えているのである。

マルクス・レーニン主義者にとつて、帝国主義が自己の支配の維持につとめているとか、国際情勢が不安定であるとかといった問題を資本主義的帝国主義の法則が作用する問題と見ず、帝国主義国の指導グループの認識の問題に帰するようなことがどうしてできるだろうか？ 帝国主義国の支配グループがいったん「正しい認識」をもち、帝国主義国の支配者がいったん「賢明派」になれば、各国人民の階級闘争を経ず、各国人民の革命を経なくても、世界各国の社会制度は根本的にかわるなどと仮定することがどうしてできるだろうか？

## 世界の矛盾にたいする二つの根本的にちがった見方

マルクス・レーニン主義者たるものは当面の国際情勢を分析するにあたって、かならず世界の政治、経済のすべての資料をにぎり、つぎのようなおもな矛盾を理解しなければならぬ。すなわち、社会主義陣営と帝国主義陣営との矛盾、帝国主義国と帝国主義国との矛盾、帝国主義国と被抑圧民族との矛盾、資本主義国内部のブルジョアジーとプロレタリアートその他の勤労者との矛盾、資本主義国内部のある独占グループと他の独占グループとの矛盾、さらに資本主義国内部の独占ブルジョアジーと中小ブルジョアジーとの矛盾などがそれである。これらの矛盾を理解し、これらの矛盾とそれぞれの時期における変化を分析し、当面の具体的な矛盾の焦点がなにであるかを指摘したとき、このときはじめて各国の労働者階級の政党は正しく国際情勢と国内情勢を評価し、自己の政策をしつかりとした理論陣地の上におくことができるということ、これはきわめてあきらかである。残念ながら、トリアッチ同志らはそのテーゼで、まさにこれらの矛盾を厳肅に正視していない、このため、かれらの綱領は必然的にまったくマルクス・レーニン主義の軌道からはずれてしまっている。

もちろん、トリアッチ同志らもそのテーゼで多くの矛盾にふれている。だが、奇怪しごくなのは、「マルクス・レーニン主義者」と自称するトリアッチ同志がかならぬこれらのおもな矛盾を回避していることである。

イタリア共産党第十回大会のテーゼはヨーロッパ共同市場の問題にふれたさい、国際情勢についてつぎのような矛盾をならべている。

「大資本主義国のあいだの経済競争がつよまるにともない、各独占資本のあいだで国際協定をむすぶばかりでなく、国家ブロックのあいだでも経済、貿易の有機的な同盟をうちたてる傾向がしだいにつよまってきた。そのうち、ある同盟（すなわちヨーロッパ共同市場）は西ヨーロッパ市場の拡大をうながし、いくつかの国ぐに（イタリア、ドイツ連邦共和国）の経済発展に刺激をあたえた。だが、大独占資本グループの指導のもとにある、北大西洋ブロックの軍備拡張、競争準備政策と結びついた経済の一体化は、国際的な範囲と一国の範囲内で、つぎのような新しい矛盾をひきおこしている。つまり、工業の発達している一部の地域の進展と、その他の地域の恒久的な、相対的に激化さえしつつある落後と没落とのあいだの矛盾、工業生産の成長速度と、いたるところ重大な困難と危機におちいつている農業の発達速度とのあいだの矛盾、消費水準の高い、わりに広いつたかな地域と、賃金水準や消費水準のかなり低い、もつとも広い貧しい地域とのあいだの矛盾、大量の富が軍備拡張と非生産的支出に消耗されていることとどまるところを



知らぬ奢侈と、人民大衆の生活や進歩の必要としているいろいろな問題（住宅、学校、社会保障など）がどうにも解決できないでいるというこの両者のあいだの矛盾がそれである」

ここには、いわゆる矛盾、あるいはいわゆる「新しい矛盾」をおびただしくあげているが、階級の矛盾にだけはふれていないし、帝国主義およびその手先と全世界人民との矛盾等々にはふれていない。かれらは「国際的な範囲と一国の範囲内」の矛盾を、工業の発達した地域と工業の発達していない地域との矛盾、豊かな地域と貧しい地域との矛盾といっている。

かれらは資本主義諸国のあいだの経済競争をみとめ、大独占資本グループの存在をみとめ、また国家ブロックの存在もみとめている。だが、かれらがみちびきだした結論は、非階級的、超階級的な矛盾である。かれらは、「各大独占資本のあいだで国際協定をむすび」、「国家ブロックのあいだで経済、貿易の有機的な同盟をうちたてる」ことによって、帝国主義諸国のあいだの矛盾を調和させることができ、さらにはこれをとりのぞくことさえできると考えている。このような観点は、実際には、旧い修正主義者の「超帝国主義論」を踏襲剽窃したものであって、レーニンのいう「超階級のナンセンス」である。

周知のとおり、レーニンは、帝国主義の時代に「経済的および政治的發展の不均等性は資本主義の無条件的な法則である」⑦という重要な論点を提起した。帝国主義時代における資本主義諸

国の不均等な發展は跳躍的なものであって、もともとどうしろにたちおくれた国が前にとび出したり、もともと前をすすんでいた国がうしろにたちおくれたりしてしまつたりする。資本主義のこうした不均等發展の無条件的な法則は、第二次世界大戦ののちも依然として作用している。アメリカ帝国主義者や修正主義者、日和見主義者は一貫してアメリカ資本主義の發展がこの無条件的な法則のそとにあると宣伝しているが、それにもかかわらず、第二次大戦ののち、日本、西ドイツ、イタリア、フランス、その他いづれの資本主義国の多年らしい經濟發展速度はいずれもアメリカをしのいでいる。世界資本主義經濟ぜんたいにおけるアメリカ經濟の比重は低下した。一九四八年、アメリカの工業生産は資本主義世界の工業生産の五三・四パーセントをしめていたが、一九六〇年には四四・一パーセントにさがり、一九六一年にはさらに四三パーセントにさがっている。

アメリカの資本主義經濟は、その發展速度が一連の資本主義国にたちおけているにもかかわらず、いまなお資本主義世界における独占的地位を完全には失っていない。このため、つぎのような状況がうまれている。つまり、一方ではアメリカが資本主義世界におけるその独占的地位と支配的地位を保持し、拡大しようとしており、他方では他のいづれの帝国主義国と資本主義国がアメリカ帝国主義の支配からぬけ出そうとしており、これは、資本主義世界の政治、経

済体制における、ひとつのきわだった、日ましに尖鋭化しつつある現実的な矛盾である。アメリカ帝国主義とその他の帝国主義とのあいだのこうした矛盾のほか、いちぶの帝国主義国相互のあいだ、いちぶの資本主義国相互のあいだにも矛盾がある。帝国主義諸国間の矛盾は、必然的に市場の争奪、投資地域の争奪、原料産地の争奪をめぐる闘争の尖鋭化をひきおこさずにはいないし、事実すでにひきおこしている。ここでは新植民地主義者と旧植民地主義者の闘争が錯綜しており、戦敗帝国主義国と戦勝帝国主義国の闘争も錯綜している。コンゴ事件、最近のヨーロッパ共同市場の問題をめぐるいさかい、アメリカの日本商品輸入規制によつてひきおこされたいさかいはこのような闘争のきわだった実例にほかならない。

イタリア共産党第十回大会のテーゼは、「資本主義と帝国主義に固有な、不均等で跳躍的な発展過程のために、アメリカ資本主義の絶対的な経済的優位はすでに姿を消しはじめている」ことを指摘しているが、しかし、トリアッチ同志らは、このような新しい現象から資本主義世界じしんの矛盾の拡大と矛盾の激化を見てとっていない、また、このような新しい現象が帝国主義国相互のあいだの食うか食われるかの激烈な闘争という新しい局面をもたらし、帝国主義国内部の各独占グループ相互間の激烈な闘争という新しい局面をもたらし、資本主義国内部のプロレタリアート、勤労者と独占ブルジョアジーとのあいだの激烈な闘争という新しい局面をもたらしている

ことを見てとっていない。とりわけ、一連の国ぐにの社会主義革命が勝利したため、帝国主義の支配する世界市場の広さは大いにせばまった。このほか、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカに多くの民族独立国が生まれたため、これらの地域における帝国主義の経済的独占は揺らいできた。このような情勢のもとで、資本主義世界の激烈な闘争はこれまでよりやわらいだのではなく、これまでよりいつそうはげしくなっている。

いま、社会主義体制と資本主義体制という性質の異なつた二つの世界経済体制が存在し、社会主義陣営と帝国主義陣営というたがいに対立した二つの世界陣営が存在している。そして、情勢の発展は、社会主義の力が帝国主義の力をしのいでいるのである。社会主義国の力に、世界各国の革命的人民の力、民族解放運動の力、平和運動の力がくわわれれば、このような連合した力が帝国主義者とその手先の力をはるかにしのいでいること懷疑ない。つまり、全世界の力関係で優位にたっているのは、社会主義と革命的人民の側であり、帝国主義の側ではない、優位にたっているのは、世界平和をまもる力の側であり、帝国主義の戦争勢力の側ではない。中国の共産主義者のことでは、「東風が西風を圧倒している」のである。第二次大戦後の世界の力関係における大きな変化を評価しないのは、まったく誤りである。だが、このような力関係の変化があるからといって、資本主義世界に固有な各種の矛盾はなくなっていないし、資本主義社会の「弱

肉強食」の生存競争の法則は変わっていない、また、帝国主義國がたがい利益をうばいあつて、ことなるブロックに分裂し、さまざまの衝突をひきおこすという可能性ものぞかれていないのである。

資本主義と社会主義といふ二つのことなる社会制度のけじめは、世界の力関係が変化したため自然に消えさつてしまふなど、自然に消えさつてしまふなどと、どうしていえるだろうか？

資本主義世界に内在する諸矛盾は、世界の力関係が変化したため自然に消えさつてしまふなどと、どうしていえるだろうか？

資本主義諸國の支配勢力は、世界の力関係が変化したため自発的に歴史の舞台からひきさがるところが、トリアッチ同志らの綱領は、ほかならぬこのような見方をしているのである。

### 第二次大戦後の世界の矛盾の焦点

トリアッチ同志らは、身は資本主義世界のなかにありながら、心は雲をつかむような夢境のなかにある。

資本主義世界に生活している共產主義者は、マルクス・レーニン主義の階級分析の観点にもとづき、世界の全局から出発して、社会主義陣営と帝国主義陣営との矛盾を分析するほか、主として帝国主義國相互間の矛盾、帝国主義國と被抑圧民族との矛盾、帝国主義國内部のブルジョアとプロレタリアートその他の勤労者との矛盾を分析し、そこから自國のプロレタリアートとすべての被抑圧人民、被抑圧民族に正しい進路をさし示すべきである。ところが、われわれが遺憾にたえないのは、トリアッチ同志らがそうしていかないことである。かれらは、こうした矛盾についてただとりとめもなく痛くもかゆくもない無駄話をするだけであり、実際には、これらの矛盾をおおいかくして、自國のプロレタリアートとすべての被抑圧人民、被抑圧民族を迷路にひきずりこもうとしているのである。

トリアッチ同志は、チトーとおなじように、帝国主義陣営と社会主義陣営との矛盾を「二大軍事ブロックの存在と対立」②であるなどといい、「この局面を転換し」さえすれば、「戦争のない」、「平和協力の」新しい世界②をつくることができる、そうなれば、世界の二つの大きな社会体制の矛盾も姿を消すだろう、と言っている。

トリアッチ同志のこのような考え方は、あまりにも無邪氣すぎるようである。かれじしんはまいにち帝国主義國の支配者が「賢明」になるのをねがっているとしても、帝国主義者の方では、トリアッチ同志ののぞみどおり、みずから武装を解除し、みずから社会制度をあらためるなどと

いうことを絶対にするはずがない。こんな考え方は、実質的には、社会主義国に自国の防衛力を放棄または撤廃させようとするものにはかならない。それはまた、帝国主義者が従来からのぞんでる資本主義的自由化への「平和的進化」あるいは「自然進化」というものを社会主義制度におこさせようとするものにはかならない。

帝国主義陣営と社会主義陣営との矛盾は、二つの社会制度の矛盾であつて、世界の基本的な矛盾である。このような矛盾が鋭いものであることは、いさかも疑いが無い。マルクス・レーニン主義者たるものは、帝国主義陣営と社会主義陣営との矛盾を二つの社会制度の矛盾とみないで、これを二つの軍事ブロックの矛盾とみなすようなことがどうしてできるだろうか？

もちろん、マルクス・レーニン主義者は、世界的な範囲の矛盾をただ単に帝国主義陣営と社会主義陣営との矛盾だけと見なすこともできない。

社会主義国はその社会の性質からいって、対外的に拡張主義をおしすすめる必要もなければ、その可能性もない、また、それをおこなうべきでもないし、許されもしないということを知つておかねばならぬ。社会主義国には自国の国内市場があり、とりわけ中ノ両国にはもつとも広い国内市場がある。社会主義国は平等互恵の原則にもとづいて国際貿易もおこなっているが、帝国主義国とのあいだに市場の争奪や勢力範囲の争奪をする必要がない。社会主義国はそのために

帝国主義国とのあいだに衝突、とくに武力衝突をひきおこす必要がまったくないのである。

だが、帝国主義国ではまったく事情がことなる。

資本主義的帝国主義の制度が存在するかぎり、そこには、資本主義的帝国主義の法則が作用しつづけるだろう。帝国主義者は、国内ではつねに人民を抑圧し、搾取し、対外的にはつねに他民族や他国を侵略し、抑圧し、搾取する。帝国主義者はつねに植民地、半植民地や各種の勢力範囲を富の源泉とする。これら帝国主義の「文明的」な狼は、ゆらいアジア、アフリカ、ラテン・アメリカを「あぶらののつた肉」のように奪いあい、むさぼり食つてきた。かれらは、あらゆる手段をつくして、たえず植民地や各種勢力範囲の人民の闘争と蜂起を弾圧してきた。資本主義的帝国主義がどのような政策をとるにせよ、旧植民地主義の政策をとるにしても新植民地主義の政策をとるにしても、帝国主義と被抑圧民族との矛盾は必然的に存在する。このような矛盾は妥協の余地のないものであり、きわめて激烈なものであり、どうにもおおいにかくすことのできないものである。

同時にまた、帝国主義国相互のあいだには市場の争奪、原料産地の争奪、勢力範囲の争奪、軍需利潤の争奪をめぐる闘争がつねにおこなわれる。こうした闘争はときにはいくらかやわらざ、ときにはある種の妥協がまつまり、ときには「国家ブロックの同盟」というものさえできること

もあるが、このような緩和、このような妥協、このような同盟は、つねにかれら相互間のいつそう尖鋭な、いつそう激烈な、いつそう広はんな矛盾と闘争をはらむものである。

第二次世界大戦後、アメリカ帝国主義者は、日独伊ファシストにとつてかわり、ずっと全世界で拡張政策をすすめてきた。アメリカ帝国主義者は、反ソの名のもとに、まずイギリス、フランス、ドイツ、日本、イタリアのものと植民地、勢力範囲を侵略、併呑、支配するとともに、同時にまた、反ソの名のもとに、第二次大戦後の条件を利用して、イギリス、フランス、西ドイツ、日本、イタリア、ベルギー、カナダ、オーストラリアなど多くの資本主義国をアメリカ独占資本の直接の支配のもとにおいた。この支配は、軍事的、政治的、経済的のものである。

つまり、アメリカ帝国主義者は、資本主義世界に空前の大帝国をつくらうとくわだてている。アメリカ帝国主義者の追求しているこの大帝国は、西ドイツ、イタリア、日本などの敗戦国と、これらの国ぐにのものと植民地、勢力範囲を直接に隷属させるばかりでなく、イギリス、フランス、ベルギーなど戦時中の同盟国と、これらの国ぐにのものと植民地、勢力範囲をも直接に隷属させようとするものである。

つまり、アメリカ帝国主義者はこの空前の大帝国をうちたてようとして、なによりもまずアメリカと社会主義国のあいだにあるきわめてひろい中間地帯を奪い取るための実際行動をおこして

いる。アメリカ帝国主義者は同時にまた、あらゆる手段をつくして、社会主義国にたいする転覆、破壊、侵略活動をくわだてている。

ここで、われわれは、一九四六年八月の毛沢東同志の有名な談話を思い出してみよう。毛沢東同志は、当時、アメリカ帝国主義者のわめきたてた反ソの煙幕をバクロし、世界情勢についてつぎのような概括的な説明をおこなった。

「アメリカとソ連のあいだは、きわめてひろい地帯でへだてられていて、そこにはヨーロッパ、アジア、アフリカの三つの州の、多くの資本主義国と植民地・半植民地国があります。アメリカの反動派は、これらの国ぐにを屈服させてからでなければ、ソ連への攻撃などできるものではありません。現在アメリカは、太平洋で、イギリスが昔もっていた全勢力範囲よりもっと大きな地域を支配し、日本、国民党支配下の中国、朝鮮の半分、南太平洋を支配しています。また、アメリカはやくから中南米を支配しています。そのうえ、さらに大英帝国と西ヨーロッパの全部を支配しようと考えています。アメリカはいろいろな口実のもとに、多くの国ぐにで、大がかりな軍事配置をおこない、軍事基地を設けています。アメリカの反動派は、かれらが世界の各地にすでに設け、あるいはこれから設けようとしているすべての軍事基地を、みなソ連に反対するためのものだといっています。たしかにそのとおりで、これらの軍事基地はソ連を目標にし

ています。だが、現に、まっさきにアメリカの侵略をうけているのは、ソ連ではなくて、軍事基地の設けられているこれらの国々にです。これらの国々にが、ほんとうに自分たちを圧迫しているのはだれか、ソ連なのか、それともアメリカなのか、ということを知るようになるのは、そんなに遠いことではないと、わたしは信じています。アメリカの反動派は、いつかはきつと、かれら自身が全世界の人民の反対のただなかに立っているのを発見するでしょう。

「もちろん、わたしは、アメリカの反動派がソ連にたいする攻撃を考えていないといっているのではありません。ソ連は、世界平和のまもり手であり、アメリカの反動派の世界制覇をはばむ強大な要素で、ソ連があるかぎり、アメリカと世界の反動派の野心はぜつたいに実現できません。したがって、アメリカの反動派は、ソ連をひじょうにくんでおり、たしかに、この社会主義国を消滅しようと夢想しています。だが、いまだき、第二次世界大戦がおわって間もないこのとき、アメリカの反動派があのように、鳴り物いりで米ソ戦争を強調し、険悪な空気をかきたてているのでは、だれでも、かれらの実際の目的を見きわめずにはいられません。ほんとうは、かれらが、反ソのスローガンのもとで、アメリカの労働者と民主的な人びとに気違いじみた攻撃をくわえ、また、アメリカの対外拡張の対象となつていてるすべての国々をアメリカの従属物に変えようとしているのです。アメリカの人民と、アメリカの侵略の脅威をうけているすべての国々に

の人民は、団結して、アメリカの反動派と各国におけるその手先の攻撃に反対すべきであると、わたしは考えます。このたたかいが勝利したときだけ、第三次世界大戦はさけることができるので、そうでなければ、さけることはできません。」⑧

十六年まえ、毛沢東同志は、アメリカ帝国主義者がなんとかして世界大帝国をうちたてようとしていたことをもつともはつきりしたことばでバクロするとともに、また、アメリカ帝国主義者の気ちがいじみた世界奴隸化計画をいかに打ちやぶるべきか、人類を第三次世界大戦からいかにまぬがれさせるべきかということをもつともはつきりしたことばで人びとに教えたのであった。

毛沢東同志のこのことばは、一方のアメリカ帝国主義者と他方の社会主義国のあいだにきわめてひろい中間地帯があることを説明している。この中間地帯の範囲は、アメリカをのぞく資本主義世界ぜんたいである。アメリカ帝国主義者が社会主義陣営に反対して、戦争をわめきたてているのは、一方ではかれらがたしかに社会主義国にたいする侵略戦争を準備し、社会主義国を消滅しようとして夢みていることをしめすものであるが、他方、アメリカ帝国主義者のこうしたわめき声はまた、中間地帯を侵略し、隷属させようとするかれらの現実的なねらいをおおいかくす一種の煙幕でもある。

野心まんまん世界制覇をたくらむアメリカ帝国主義者のこうした侵略と奴隷化の政策は、なによりもまず中間地帯、とりわけアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族と被抑圧人民の反抗につきあたっている。アメリカ帝国主義者のこうした反動政策は、実際には、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族と被抑圧人民の革命の導火線となり、これらの地域に十数年らいたえることのない革命の炎をもえあがらせてきた。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの革命の炎は、帝国主義の支配の土台をいちだんとゆりうごかしている。この炎は、いまさかんにえひろがりつつあり、今後いつそうひろい範囲にもえひろがりつつけるであろう。

同時に、アメリカ帝国主義者の世界制覇の政策は、また、必然的に帝国主義国相互のあいだ、新旧植民地主義者相互のあいだの植民地、勢力範囲をめぐる争奪を激化させ、アメリカ帝国主義者との帝国主義者のあいだの支配と支配反対の闘争を激化させる。この闘争は帝国主義の切実な利害にかかわるものであり、こうした闘争で、一方の帝国主義は他方の帝国主義にたいしていささかも容赦するところがない。かれらのうちの一方はつねに相手をしめ殺そうとねらっている。

アメリカ帝国主義者とその相棒は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの被抑圧民族と被抑圧人民の解放闘争にたいし、きわめて反動的な弾圧と欺瞞の政策をとっている。社会主義国がこ

れらの地域の民族民主革命闘争にたいして同情と支持の政策をとるのは、義理のうえからいっても、道理のうえからいっても当然のことである。これは根本的に異なる二つの政策である。この二つの政策の矛盾は、これらの地域にはつきりとあらわれないわけではない。これらの地域にたいする現代修正主義者の政策は、実際には、帝国主義の政策に奉仕するものである。だから、マルクス・レーニン主義の政策と現代修正主義の政策との矛盾も、これらの地域ではつきりとあらわれないわけではない。

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどこれらの地域の人口は、資本主義世界の総人口の三分の二以上を占めている。これらの地域の革命の波がたえずたかまつているという事実、帝国主義国や新旧植民地主義者がたがいにくれらの地域を争奪しているという事実は、これらの地域が資本主義世界のさまざまな矛盾の焦点、いいかえれば世界の矛盾の焦点であることをはつきりと反映している。これらの地域は帝国主義の鎖のもつとも弱い一環であり、さしあたって世界革命のあらしの主な源である。

十六年らしい経験は、第二次大戦後、世界の矛盾の焦点がどこにあるかという毛沢東同志の論点が多つた正しきことを立証している。

## 世界の矛盾の焦点はいま変わったかどうか

十六年らしい、世界には、きわめて大きな変化がおきた。これらの変化のおもなものは、つぎのとおりである。

第一、ヨーロッパとアジアに一連の社会主義国が生まれ、中国の人民革命が勝利し、これらの国々にはソ連とともに社会主義陣営をかたちづつた。この社会主義陣営は、アルバニア、ブルガリア、ハンガリー、ベトナム、ドイツ民主共和国、中国、朝鮮、モンゴル、ポーランド、ルーマニア、ソ連、チェコスロバキアの十二ヶ国からなるもので、一〇億の人口を擁している。これによつて世界の力関係は根本的に変わった。

第二、ソ連と社会主義世界ぜんたいの力が大いにつよまり、その影響も大いにひろがった。

第三、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの民族解放運動と人民革命運動が万雷の一時にとどろくようなすさまじい勢いで、広はんな地域でアメリカ帝国主義者とその相棒の陣地をすでに粉碎し、またひきつづき粉碎しつつある。英雄的なキューバ人民はアメリカ帝国主義の手先の反動支配をくつがえして、偉大な革命の勝利をおさめ、社会主義の道をすすんでいる。

第四、欧米資本主義国の労働者階級その他の勤労者の民主主義的権利と社会主義をかちとるた

たかいが、あらたに活気を呈し、あらたに発展をみせている。

第五、資本主義国の不均等な発展がさらに激化している。フランスの資本主義勢力はあらたな発展をとげ、どしどしアメリカに手むかいはじめた。イギリスとアメリカの矛盾もいちだんと深まった。第二次大戦の敗戦国である西ドイツ、イタリア、日本は、アメリカに育成されてふたたび頭をもたげ、程度の差こそあれ、それぞれアメリカの支配からぬけだそうとしている。西ドイツと日本の軍国主義はいま復活しつつあり、これら両国はふたたび戦争の危険な策源地となっている。第二次大戦前のドイツと日本はアメリカ帝国主義者のおもな競争相手であったが、いま西ドイツはまたもおもな競争相手としての姿勢で世界資本主義市場にあらわれ、アメリカ帝国主義とせまい道でにらみあつている。日本とアメリカの競争も日ましにはげしくなつてきている。

第六、資本主義諸国の経済・政治の不均等な発展がいつそうはげしくなるとともに、資本主義国内部の各独占資本グループ間の競争もいつそう激化してきた。

これらの変化は、われわれに教えている。各国人民が目ざめ、団結しさえすれば、アメリカ帝国主義者とその手先をうちやぶることができ、各国人民はかならず自分の自由と解放をかちとることができると。

45  
これらの変化は、また、われわれに教えている。社会主義諸国の力がいよいよ発展し、社会主



義陣營の団結がいよいよ強まり、被抑圧民族の解放運動がいよいよ広はんものとなり、資本主義国内部のプロレタリアートと被抑圧人民のたたかいがいよいよ発展すればするほど、帝国主義者の手足をしばって、かれらが天下の大不義をおかしえないようにする可能性はいよいよ大きくなり、新しい世界大戦を防いで、世界平和をまもりぬく可能性はいよいよ大きくなる、と。

これらの変化はさらに、われわれに教えている。アメリカ帝国主義者と他の帝国主義国とのあいだの矛盾は、いよいよ深刻な、ますます尖鋭なものとなり、かれら相互のあいだにはいまや新しい闘争が発展しつつある、と。

中国の人民革命の勝利、社会主義諸国の建設の勝利、多くの国ぐにの民族民主革命の勝利、キューバの人民革命の勝利によつて、アメリカ帝国主義者の気ちがいじみた世界奴隸化計画はきわめて大きな打撃をうけた。アメリカ帝国主義者は、侵略政策をおしすすめるために、反ソ宣伝のほか、近年とくに反中国宣伝に力をいれている。アメリカ帝国主義者の反中国宣伝のねらいは、いうまでもなく、わが国の領土台湾を長期にわたつて占領することにあり、わが国を破壊し、わが国をおびやかすさまざまな犯罪的活動をおこなうことにある。同時に、アメリカ帝国主義者はまた、反中国宣伝を利用して日本、南朝鮮ひいては東南アジアぜんたいを支配し、隸属させようとするもうひとつの重要な実地的なねらいをもっていることも、人びとはきわめてはつきりと見て

とることができる。いわゆる「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」やいわゆる「東南アジア集団防衛条約機構」などはすべて、アメリカがこれらの地域の一連の国ぐにを支配し、隸属させるための手段にほかならない。

多年らい、アメリカ帝国主義者は、ときにはあからさまに、ときにはこつそりとインドの反動派を支持し、ネール政府を支持してきたが、その真のねらいはどこにあるのだろうか？ かれらは、梁を柱とすりかえる手口をつかつて、かつては大英帝国の植民地であり、いまも英連邦の構成国であるインドをアメリカの支配する勢力範囲に変え、かつては大英帝国の王冠を飾っていた宝石をドル帝国の王冠を飾る宝石に変えようとしている。アメリカ帝国主義者は、この目的を實現するためには、まずインド人民と世界人民のまえで、「反中国」とか、「中国の侵略」——

「中国の侵略」など自分じしんも信じていないにかかわらず——に反対するとかといった一種の口実、一種の煙幕をでつちあげる必要がある。アメリカ帝国主義者は、ネール政府のこのたびの反中国の軍事行動を、アメリカがインドを支配するための絶好の機会と考えている。ネールが中印辺境の衝突をひきおこしていら、アメリカ帝国主義者は「反中国」に名をかりて、大いばりでインドにはいりこみ、軍事、政治、経済の面からインドにおけるかれらの勢力を拡大している。

このたびアメリカ帝国主義者がインドへ大がかりにはいりこんできたのは、アメリカの反動派

がインドで新植民地主義計画をおしすすめる重大な段どりであり、且下帝国主義諸国が市場と勢力範囲の争奪、世界の再分割をめざしてたがい公然または隠然たる闘争をすすめている重大な事件である。アメリカ帝国主義者のこの行動は不可避免的にインド人民の新しい覚醒をうながすとともに、また必然的に英米二つの帝国主義のインドにおける矛盾の発展をうながすことになる。

旧植民地の喪失、民族革命運動の発展、世界資本主義市場の縮小によつて、帝国主義国相互間の争奪は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ、オーストララシアの多くの地域にひきつづきあらわれているほか、資本主義の古い発源地である西ヨーロッパにもあらわれている。史上、平和な時期における帝国主義諸国の争いが、今日ほど広く西ヨーロッパのすみずみにまでおよんだことはないし、また、帝国主義諸国が今日ほどはげしく西ヨーロッパのこの工業の発達した地域を争奪したこともない。西ドイツ、フランス、イタリアなど六カ国からなるヨーロッパ共同市場、イギリスをかしらとする七カ国からなる欧州自由貿易連合、そしてまたアメリカがやつきになつて策動している「大西洋共同体」は、帝国主義諸国の西欧市場争奪がいよいよ尖鋭化してきたことをもがたるものである。トリアッチ同志らが「四方八方へイタリアの貿易を発展させよ」①などといっているのは、実際には、イタリア独占ブルジョアジイの市場争奪の要求を反映したものにほかならない。

西ヨーロッパのほか、さいきんアメリカの日本綿製品輸入規制によつてひきおこされた公然たるいさかきも、アメリカと日本の市場争奪闘争が日ましば表面化しつつあることを物語っている。

トリアッチ同志その他のいちぶの同志は「植民地主義制度はほとんど完全に崩壊した」②とか、「世界にはもはや帝国主義のためにのこされた勢力範囲はない」③とかと言っている。あるものはまた、「地球上では、もはや五〇〇〇万の人びとが植民地主義の支配のもとにうめいているにすぎず」、植民地主義制度は残渣しかのこつていない、とも言っている。かれらの目からみれば、帝国主義に反対する闘争はもはやアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ各国人民の重大な任務ではなくなつたのである。かれらのこうした言いかたは、まったく事実無根である。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの大多数の国々には、いまなお帝国主義者の侵略と圧迫をうけ、いまなお新旧植民地主義の奴隷化のもとにおかれている。ここ数年らい、一連の国々にが独立したが、しかし、これらの国々にの経済はいまなお外国独占資本の支配をうけている。いちぶの国々にで、旧植民地主義者は追いだされてしまつたが、しかし、いっそう大きな、いっそう危険な新植民地主義者がまたあばれこんできて、これらの地域の多くの民族の生存に重大な脅威をあたえている。これらの地域の人民の反帝闘争の任務はまだまだ完遂されてはいない。わが

中国のようにすでに民族民主革命をなしとげ、社会主義革命の勝利をかちとつた国でも、やはりまだアメリカ帝国主義者の侵略に反対する闘争の任務がある。われわれの神聖な領土である台湾はまだアメリカ帝国主義者に侵略占領されており、多くの帝国主義国はいまなお、偉大な中華人民共和国が地球上に存在するのをみとめない。国連における中国の合法的地位はいまなお理不尽にも奪われている。帝国主義に反対する闘争、新旧植民地主義に反対する闘争は、いまなおアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの広はんな地域の被抑圧民族、被抑圧人民の第一義的な、もつともさしせまつた任務である。

十六年らしい世界の変化がひきつづき立証しているように、アメリカ帝国主義者の奴隷化政策と世界各国人民との矛盾、アメリカ帝国主義者の全世界への拡張政策と他の帝国主義諸国との矛盾は、第二次大戦後における世界の矛盾の焦点である。こうした矛盾は、とりわけ、アメリカ帝国主義者およびその手先とテジヤ、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族、被抑圧人民との矛盾としてあらわれ、これらの地域を争奪する新旧植民地主義者の矛盾としてあらわれている。

### 万国のプロレタリアと被抑圧民族は団結しよう

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカは、長いあいだずっと欧米植民地主義者の略奪と抑圧をうけてきた。欧米の植民地主義者は、これらの広大な地域から大量の富を略奪して自己のふところをこやしてきた。かれらは、これらの地域の人民の血と汗を「資本主義的文化と文明の肥料」<sup>⑨</sup>とし、これらの地域の人民を極度の貧困におとし入れ、かれらを経済的にも文化的にも非常に立ちおくれた状態におとし入れてきた。けれども、ものごとは極度にたつすれば、かならず反対のがわに転ずるものである。これら外来の抑圧者、植民地主義者、帝国主義者が長期にわたつてすすめてきた奴隷化政策は、かれらにたいするこれら地域の人民の恨みを不可避的にひきおこし、これら地域の人民を深い眠りから呼びさまして、いやおうなしに立ちあがらせ、自己の生存をかちとり、自民族の生存をたもつためにたえず闘争をおこなわせ、ついには武力反抗と武力蜂起までおこなわせるにいたつた。これらの地域の奴隷化にあまじくない人びとはきわめて広はんであつて、労働者、農民、手工業者、小ブルジョア、知識人だけでなく、愛国的な民族ブルジョア、アジアをもふくみ、さらには一部の愛国的な王公貴族をもふくんでいる。

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ各国人民の植民地主義、帝国主義にたいする反抗は、たえず残酷な弾圧をうけ、何回も失敗をなめてきた。しかし、失敗しても、かれらはかならずまた闘争に立ちあがつた。毛沢東同志はかつて中国にたいする帝国主義の侵略と、こうした侵略がど

のようにしてその反対側にまわったかを概括的に説明したことがある。一九四九年、偉大な中国人民の革命が基本的な勝利をかちとつたとき、毛沢東同志は「幻想をすてて、闘争を準備せよ」という論文でつぎのようにかいてゐる。

「これらすべての侵略戦争に政治的、経済的、文化的侵略と圧迫がくわつて、中国人の帝国主義にたいする憎しみが生まれ、中国人はこれはいつたことかと思ふようになり、中国人の革命精神がふるいたち、闘争のなかで団結するようになった。闘争、失敗、ふたたび闘争、ふたたび失敗、ふたたび闘争というようにして、百九十年にわたる経験をつみ、何百回にわたる大小の闘争の経験をつみ、軍事と政治のうえの、経済と文化のうえの、流血的な、また非流血的な経験をつんで、やつと今日のこのような基本的な成功をかちとつた。」⑩

中国人民の闘争の経験は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの多くの国ぐにと地域の人民の解放闘争にとつて、現実的な意義をもっている。偉大な十月革命は、プロレタリアートの革命闘争を被抑圧民族の解放運動とむすびつけ、被抑圧民族の解放闘争に新しい道をきりひらいた。中国の人民革命の成功は、被抑圧民族に勝利の偉大な手本をしめした。

ロシアの十月革命につづいて、また中国革命につづいて、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの広大な地域の人民の革命闘争はこれまでにない雄大な規模をもつものになった。これらの地

域の闘争はいくらかの挫折をみることもあるとしても、いずれにせよ、帝国主義者とその手先はこうした闘争の奔流をはばむことはできない、経験はそのことをくりかえしてうらがきしてゐる。

いま、欧米の帝国主義諸国はアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ各国人民の解放闘争に包囲されている。こうした闘争は西ヨーロッパや北アメリカの労働者階級の闘争にとつて、きわめて大きな支援である。

マルクス、エンゲルス、レーニン、ゆらい、資本主義国の自国の農民の闘争と植民地、従属国の人民の闘争を資本主義国のプロレタリア革命の二つの偉大な直接の同盟軍であると見なしてゐる。

周知のように、マルクスは一八五六年、「ドイツにおける全事態は、農民戦争の第二版ともいふべきもので、プロレタリア革命を支持することができるかどうかにかかつてゐる」⑪という希望をのべた。レーニンは、第二インターナショナルの英雄たちがマルクスのこの直接の指示を回避したことを痛烈に非難した。レーニンはかれらを痛烈に非難して、「マルクスが革命的情勢をつくりだすかもしれないドイツの農民戦争と労働運動との結合に期待をよせて、たしか一八五六年の往復書簡のなかで述べたことに、かれらは気づいてさえない——かれらはこのように直截

に述べていることさえ回避し、猫が熱い粥のまわりをぐるぐるまわるように、そのまわりをぐるぐるまわっている」<sup>⑭</sup>とのべている。レーニンは、農民という同盟軍の問題がプロレタリアートの解放にたいしてもつ重要性にふれたとき、こういつている。「全人類がさきごろの帝国主義的殺戮のようなものからまぬかれ、われわれがいま資本主義世界で見ている激しい矛盾からまぬかれる道は、もつぱら労働者と農民の同盟を打ちかためることにある」<sup>⑮</sup>とのべた。スターリンも「農民問題のように重大な問題に無関心であるということは、プロレタリア革命の前夜では、プロレタリアートの独裁の否定の裏面であり、マルクス主義にたいする公然たる裏切りの、うたがいない兆候だからである」<sup>⑯</sup>といっている。

また、周知のように、マルクスとエンゲルスには、「他の民族を抑圧する民族は自由になりえない」という名言がある。一八七〇年、マルクスは当時の状況に着眼して、「わたしは、永年アイルランド問題を研究したのち、つぎのような結論に達した。すなわち、イギリスの支配階級にたいする決定的な打撃は、イギリスにおいてではなく、アイルランドにおいてのみあたらえらる、と」<sup>⑰</sup>と想定したことがある。一八五三年、ちょうど中国の太平天国の革命のころ、マルクスは「中国とヨーロッパにおける革命」という有名な論文を書き、そのなかで「中国革命が現在の産業組織の火薬桶の中へ火の粉をなげいれ、かなり前から準備されている一般的危機、外国に

蔓延し近い将来に大陸の政治的革命をともなうと思われる一般的危機の端をひらくであろうといふことを、確信をもつて予言することができ」<sup>⑱</sup>といっている。

レーニンはマルクス、エンゲルスのこのような論点をひきつづき発展させて、資本主義国のプロレタリアートが被抑圧民族と団結することはプロレタリア革命の勝利にとつて偉大な意義をもつことを強調した。レーニンは、「万国のプロレタリアと被抑圧諸民族、団結せよ」というこのスローガンはわれわれの時代には正しいと考へた<sup>⑲</sup>。レーニンは、「ヨーロッパとアメリカの資本に抑圧されている何億といふ『植民地』奴隷をも、この資本にたいする労働者の闘争のなかで、完全に、もつとも緊密に統合しないならば、先進国の革命運動は実際にまったくの欺瞞となるであろう」<sup>⑳</sup>と指摘したことがある。

スターリンは民族問題にかんするマルクス、エンゲルス、レーニンの理論をひきつづき発展させ、民族問題は世界社会主義革命の全般的問題の一部であるというレーニンの論点を発展させた。スターリンは、『レーニン主義の基礎について』のなかでつぎのように指摘している。

レーニン主義は、「白人と黒人、ヨーロッパ人とアジア人、帝国主義の『文明的』奴隷と『非文明的』奴隷のあいだの壁を打ちこわし、こうして、民族問題を植民地問題と結びつけた。これによつて民族問題は、部分的な一国内の問題から一般的な国際的な問題に、すなわち帝国主義の

抑圧から従属国と植民地の被圧迫民族を解放するという世界的な問題に転化させられたのである。」<sup>(19)</sup>

スターリンは「十月革命と民族問題」と題する論文のなかで、十月革命の世界的意義にふれたさい、こういつている。十月革命は、「社会主義的西欧と奴隸的東洋とのあいだに橋をかけ、世界帝国主義にたいする、西欧のプロレタリアからロシア革命をへて、東洋の被圧迫諸民族にいたる新しい革命戦線をうちたてた。」<sup>(20)</sup>

マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンは、欧米のプロレタリアートが解放をかちとり、勝利をかちとるうえで二つの基本的な条件をこのようにハッキリと指摘したのである。外部の条件についていえば、かれらは、民族解放闘争の発展が資本主義宗主国の支配階級にたいする決定的な打撃になるだろうと考えた。

周知のように、毛沢東同志はプロレタリアートの解放闘争における二つの偉大な同盟軍についてのマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの理論を大いに闡明し、中国革命を指導する実践のなかで農民問題と民族解放問題を具体的にみごとに解決し、偉大な中国革命の勝利を保証した。

すべて被抑圧民族の生存をかちとる闘争は、つねにマルクス、エンゲルス、レーニンの熱烈な

共鳴と賞賛をよびおこした。マルクス、エンゲルスはもとより、レーニンじしんでさえも、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの各国でいますさまじい勢いですすめられている民族解放闘争と人民革命闘争を目にすることができず、その一連の勝利を目にすることができなかった。だが、かれらが当時の民族解放闘争の経験にもとづいてあきらかにした法則は、日をふるごとにいよいよ生活によつて立証されてきている。第二次大戦のあとアジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおこった一連の大きな変化は、ある人びとがいうように民族解放運動とプロレタリア革命運動の相互関係に関するマルクス・レーニン主義の上述の原理がすでに時代おくれになったというようなものでは絶対になく、それとは正反対に、こうした原理こそ偉大な生命力をもっていることをいつそうはつきりと立証している。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ各国人民の革命闘争の実践は、こうした原理をいつそう豊かなものにしたのである。

このような情勢は、国際共産主義運動にたいして、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族と被抑圧人民の革命闘争を支援するという現代の基本任務を提起している。なぜなら、こうした闘争は国際プロレタリアートぜんたいの事業に決定的な役割をもっているからである。ある意味からいうと、国際プロレタリアートぜんたいの革命事業の成否は、究極のところ、世界の人口の圧倒的多数をしめるこれら地域の人民の闘争がどうなるかにかかつており、これら

地域の革命闘争から支援をえられるかどうかにかかっているのである。

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ各国の革命闘争はおさえつけることができず、闘争はかならずおこるものである。これらの地域のプロレタリア政党は、これを指導しないなら、かならず人民からうきあがり、人民の信頼をうることができない。これらの地域の反帝闘争で、プロレタリアートはきわめて広はん同盟者をもっている。したがって、これらの地域の各国のプロレタリアートとその前衛はかならず闘争の最前線に立ち、帝国主義反対と民族独立のはたしるしを高くかかげ、自分の同盟者をりっぱに組織し、反帝反封建の広はん統一戦線を組織し、帝国主義者、反動派、現代修正主義者のさまざまの欺瞞をあばき、闘争を正しい方向にみちびき、闘争を一步一步と勝利させ、さまざまの闘争の勝利にたしかな裏づけをあたえるようにしなければならぬ。もしもそうしないなら、革命闘争の勝利をおさめることは不可能である。また、たとえ勝利をおさめたとしても、しつかりしたものではなく、勝利の成果が反動派の手に落ち、自己の国家と民族をふたたび帝国主義の奴隸化のもとにおくようになる可能性もある。革命闘争のなかで人民が売りわたされた実例は、歴史のうえでも、现实生活のうえでもすくなくない。中国の一九二七年の革命の失敗はその重要な一例である。

欧米資本主義諸国のプロレタリアートも、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧

民族と被抑圧人民の革命闘争を支援する最前線に立たなければならぬ。こうした支援は、実際には、同時にまた欧米諸国のプロレタリアート自身の解放事業をたすけることにもなる。欧米資本主義諸国のプロレタリアートと人民大衆は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族、被抑圧人民の革命闘争による支援をうけないなら、資本に抑圧される災禍からぬけ出し、帝国主義戦争におびやかされる災禍からぬけ出そうとしても、それは不可能である。だから、帝国主義宗主国のプロレタリア政党は、これらの地域の革命的人民の声に耳をかたむけ、これらの経験を研究し、これらの革命的な気持ち尊重し、これらの革命闘争に呼応する義務があるのであって、かれらのまえで年の功を鼻にかけ、先輩風をふかせ、且那然とかまえ、あれこれあらさがしをしたり、あのフランスのトレーズ同志のように高慢ちきな態度でかれらを見くだし、あいつらは「青二才で経験がない」⑩などといったりする権利はまったくない。ましてや、社会排外主義の態度でこれらの地域の人民の革命闘争をそしったり、ののしったり、おどかしたり、さまたげたりする権利はおさらないのである。マルクス・レーニン主義の教えによると、帝国主義宗主国の労働者政党は、もしもアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の民族解放運動と人民の革命運動にたいして正しくない立場、方針、政策をとるなら、自国の労働者階級と人民大衆の闘争の事業にたいする立場、方針、政策も正しいものではありえないということを理解

すべきである。

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の民族解放運動と人民の革命運動は社会主義諸国にたいする大きな支援であり、社会主義諸国を帝国主義の侵略からまもるきわめて重要な力である。社会主義諸国は、これらの地域の各国の民族解放運動と人民の革命運動にたいして熱烈な同情をよせ、積極的な支援をあたえるべきであつて、いいかげんな態度や民族の利益だけを考える利己的な態度、大國シヨビーニズムの態度をぜつたにとるべきでなく、ましてや、おしとどめたり、さまたげたり、あざむいたり、ぶちこわしたりするような態度をとることは許されない、これはいささかも疑いのないところである。社会主義の勝利をえた国々には、かならず各国の民族解放闘争と人民革命闘争への支援を自分の神聖な国際主義的責務としなければならぬ。ある人は、このような支援を社会主義国にたいする一方的な「負担」にすぎぬとみなしているが、これはたいへん誤つた観点であり、反マルクス・レーニン主義的な観点である。支援とは、双方の側からの相互的なものであつて、社会主義国が各国人民の革命闘争を支援すれば、ひるがえつてまた各国人民の闘争も社会主義国を支援し、これを守ることになるといふことを知つておかなければならない。この問題について、スターリンはいみじくもつぎのようにいつている。「勝利した国の側からのこの援助の特質は、それが他の国々のプロレタリアの勝利をはやめるといふことだ

けでなく、この勝利を容易にしつつ、この援助が、最初に勝利した国の社会主義の最終的な勝利を、それによつて保証するということにもある」<sup>②</sup>と。

ある人は、いま帝国主義に反対するもつとも主要な現実的手段は、社会主義国の資本主義国にたいする平和な経済競争だけである、と考へている。民族解放闘争とか、人民の革命闘争とか、帝国主義をバクロするとかということとは、どれも「もつとも安あがりの闘争方法」であり、「まじない師ややぶ医者ややり方」にすぎないといふのである。かれらは、これらの地域の人民にたししまるで金持ちの慈善家の旦那みたいな態度で、「空威張り」をするとか、「火」をたきつけるとか、「壮烈な死」を追いもとめるなとかと言つてゐる。また、諸君は「平和な経済競争で資本主義制度にうち勝てるという可能性に自信をもたない」のはよくない、社会主義国が生産力の発展水準の面で徹底的に資本主義をうちまかすようになれば、諸君は自然になんでもつことのできるようになり、帝国主義も自然に倒れてしまふ、などといつてゐる。奇怪しごくなこととは、これらの人がいつもこれらの地域の人民の革命闘争をまるで厄病神のように恐れることである。こうした態度は、けつしてマルクス・レーニン主義者の態度ではなく、すべての被抑圧人民と被抑圧民族の利益にまづたくそむき、自国のプロレタリアートその他の勤労者の利益にまづたくそむき、社会主義国ししんの利益にもまづたくそむくものである。



要するに、いま世界各国の人民は絶好の情勢のなかにある。この情勢は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族と被抑圧人民にとつても、資本主義諸国のプロレタリアートと勤労者にとつても、社会主義諸国にとつても、また世界平和を守る事業にとつても、すべてひじょうに有利であり、ただ、帝国主義者と各国の反動派、侵略勢力と戦争勢力にだけ不利なものである。こうした情勢のもとで、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族と被抑圧人民の革命闘争にどういう態度をとるかは、革命をするかしないかを区別する重要な標識であり、国際主義と社会排外主義を区別する重要な標識であり、マルクス・レーニン主義と現代修正主義を区別する重要な標識であり、同時にまた、たれが真に世界平和をまもるか、たれが侵略勢力、戦争勢力を助けるかを区別する重要な標識でもある。

### 要約

ここで、国際情勢にかんする以上の論点をもう一度まとめよう。

第一、アメリカ帝国主義は全世界各国人民の共同の敵であり、各国人民の正義の闘争を弾圧する國際的憲兵であり、現代植民地主義のおもなとりである。戦後、アメリカ帝国主義は、アメリカと社会主義諸国のあいだにあるひろびろとした中間地帯をほしのままに奪いつつている。

アメリカ帝国主義は、敗戦国とこれらの国々にもとの植民地、勢力範囲を自己に隷屬させているばかりでなく、また大戦中の同盟国をも自己の支配のもとにおき、さまざまの手法をつかつて、これらの国々にのこの植民地、勢力範囲を自己の掌中におさめようとくわだてている。だが、アメリカ帝国主義はいま全世界の人民に包囲されており、その気がいじみた野心のために帝国主義諸国のなかでもますます孤立している。アメリカ帝国主義の力は実際にはたえまなく弱まっております、アメリカをかしらとする帝国主義に反対する世界各国人民の統一戦線はたえまなく拡大している。アメリカ人民、世界各国の被抑圧人民、被抑圧民族は、闘争のなかでかならずアメリカ帝国主義をうちやぶることができる。情勢はアメリカをかしらとする帝国主義と各國の反動派にとつてかんばしくなく、各国人民の力は日に日に大きくなりつつある。

第二、帝国主義諸国のあいだには、いまアジア、アフリカ、ラテン・アメリカから西ヨーロッパにいたるまで、市場の争奪と勢力範囲の争奪をめぐって、あらたな分化と結合がみられる。帝国主義国相互間の矛盾と衝突は客観的に存在するものであり、帝国主義制度の本性によつて決定されるものである。帝国主義国相互間のこのような矛盾と衝突は、かれらの実際の利益からいえば、かれらと社会主義国とのあいだの矛盾よりもさらに緊迫した、さらに直接的な、さらに現実的なものである。この点をもてとらなければ、帝国主義の段階における資本主義の不均等な発展

がもたらす矛盾の尖鋭化を否定するのとおなじであつて、帝国主義の具体的な政策を理解することができなくなる。これでは、共産主義者も帝国主義に反対する正しい方針と政策をたてることのできなくなる。

第三、社会主義陣営は、世界平和をまもり正義の事業をまもるもつとも確固としたとりである。このとりでをひきつづき強固にし、ひきつづき強大にするなら、帝国主義者はこれを軽々しくおかすことがいよいよできなくなるだろう。なぜなら、このとりでをおかすことはかれらにとつてきわめて大きな冒険であり、たんに最大の苦しみなめるばかりでなく、直接じぶんの生死存亡にもかかわるということをや、かれらしんよく知っているからである。

第四、ある人は、現代世界の矛盾をただ単に社会主義陣営と帝国主義陣営との矛盾と見なすだけであつて、帝国主義者、新旧植民地主義者およびその手先とアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の被抑圧民族、被抑圧人民との矛盾をみないか、あるいは事実上これをおおいかくしており、帝国主義国相互間の矛盾をみないか、あるいは事実上これをおおいかくしており、現代世界の矛盾の焦点をみないか、あるいは事実上これをおおいかくしている。われわれは、このような観点に同意することはできない。

第五、ある人は、社会主義陣営と帝国主義陣営のあいだに矛盾があることを認めているが、し

かし、かれらのいわゆる「二大軍事ブロックの存在と対立」②をとりのぞきさえすれば、また社会主義国が「資本主義国の支配階級に平和競争をいどみ」①さえすれば、このような矛盾は事実上、姿をけし、社会主義制度と資本主義制度が一つに融合することができると考えている。われわれは、このような観点に同意することはできない。

第六、帝国主義国における国家独占資本主義の発展は、独占ブルジョアが自国におけるその支配的地位と対外的競争力を強めるためのものであつて、かれらのこうした地位や力を弱めるためのものではない。また、帝国主義者が軍事機構を狂気のように強化しつつあるのは、他の民族を略奪したり、国外の競争者を排斥したりするためだけでなく、国内の人民にたいする弾圧に拍車をかけるためでもある。帝国主義国でブルジョア民主主義といわれているものは、賃金奴隷と広はん人民にたいするひとにぎりの独占寡頭の暴虐きわまりない独裁にはかならないことが、いよいよ露骨にさらけだされている。帝国主義国における国家独占資本主義はしだいに社会主義に移行しつつあるとか、その勤労者は国家の指導に参加でき、あるいは現に参加しつつあるとかと考え、そこから、「じじつ、今日の資本主義世界には構造改革と社会主義的な改革にかかう一種の推進力がある」②などと考えるのは、純然たる主観主義のたわごとでなくてなんであらうか？

歴史はアメリカをかしらとする帝国主義者と各国反動派のものではなく、世界各国人民のものである。帝国主義者は絶望のなかで活路をさがしもとめようとしている。かれらは奇想天外にもそのぞみを「中ソの衝突」なるものによせている。帝国主義者とその評論家たちは、はやくからこうした考えをもちあわせた。現代修正主義者とその追隨者がさいきん、中国共産党にたいして途方もない攻撃と中傷をおこなったため、かれらのこうした考え方はいよいよ助長された。かれらには有頂天になり、けんめいに離間のサル芝居を打とうとしている。だが、これらの反動的な幻想家は、中ソ両国人民の友情の偉大な力をあまりにも低く見くびりすぎ、プロレタリア国際主義にもとづく団結の偉大な力をあまりにも低く見くびりすぎ、現代修正主義者とその追隨者がはたしうる役割をあまりにも高く買いかぶりすぎているようである。歴史的事実は、いずれかれらの幻想をあとかたもなくついえさらせてしまおう。いずれにせよ、うき目をみるのはこれらの反動的な幻想家たちである。

トリアッチ同志らの誤りは、かれらのテーゼ、報告、結語が国際情勢をめぐる問題でマルクス・レーニン主義の科学的な分析から根本的にはなれ、階級的分析から根本的にはなれていることにある。

レーニンはナロードニキをあざわらつて、「彼らの全哲学は闘争と搾取は存在するけれども、

もし……もし搾取者がいなかったなら、それらは存在しなくなる」「かもしれない」、という題目についての泣きごとに帰着する」といったことがある。この連中は、「この『もし……なら』、『もし……とすれば』で、その一生涯をすぐすのだ！」<sup>②</sup>と、レーニンはのべている。

マルクス・レーニン主義者たるものは、まさかナロードニキのようであつてはならぬだろう。

ところが、トリアッチ同志らのテーゼや報告の出発点と立脚点は、ほかでもなくこの「もし……なら」とか、「もし……とすれば」といった仮定のうえにおかれているのである。したがって、かれらがつくりだした新しい概念はひじょうにでたらめな概念のゴツタマゼ以外のなにものでもない。

① 「イタリア共産党第十回大会テーゼ」

② 一九六二年十二月二日、イタリア共産党第十回大会でのトリアッチの報告「勤労者階級は団結して、民主主義と平和のなかで社会主義にむかつて前進しよう」

③ 一九六〇年七月二十一日、イタリア共産党中央委員会総会でのトリアッチの演説「今日では戦争をさけることができる」

④ 「イタリア共産党第十回大会テーゼ」。「ウニタ」一九六二年九月十三日増刊参照

- ⑤ 「わが国の内外情勢と党の任務」。『レーニン全集』第三一巻
- ⑥ 「ロシア共産党(ボ)第十回全国協議会」。『レーニン全集』第三二巻
- ⑦ 「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」。『レーニン全集』第二二巻
- ⑧ 「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話」。『毛沢東選集』第四巻
- ⑨ 「東方諸民族共産主義組織の第二回全ロシア大会での報告」。『レーニン全集』第三〇巻
- ⑩ 『毛沢東選集』第四巻
- ⑪ 「マルクスからエンゲルスへ」。『マルクスⅡエンゲルス二巻選集』第二巻
- ⑫ 「わが革命について」。『レーニン全集』第三三巻
- ⑬ 「第九回ロシア・ソヴェト大会」。『レーニン全集』第三三巻
- ⑭ 「レーニン主義の基礎について」。『スターリン全集』第六巻
- ⑮ 「マルクスからマイヤーとフォークトへ」。『マルクスⅡエンゲルス往復書簡集』
- ⑯ 『マルクス・エンゲルス全集』第九巻
- ⑰ 「ロシア共産党(ボ)モスクワ組織の活動分子の会合での演説」。『レーニン全集』第三二巻
- ⑱ 「共産主義インターナショナル第二回大会」。『レーニン全集』第三二巻
- ⑲ 『スターリン全集』第六巻
- ⑳ 『スターリン全集』第四巻

- ㉑ 一九六〇年十二月十五日、フランス共産党中央委員会総会でのトレゾフの報告
  - ㉒ 「十月革命とロシア共産主義者の戦術」。『スターリン全集』第六巻
  - ㉓ 「『人民の友』とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか?」。
- 『レーニン全集』第一巻

#### 四、戦争と平和

問題は主観的な想定にあるのではなく、社会発展の法則そのものにある

ここ数年らい、いちぶのいわゆる「マルクス・レーニン主義者」は、戦争と平和の問題について、ひっきりなしにくどくどと多くの演説をぶち、多くの文章を書き、大小さまざまなおびただしい書物を市場に投げだしているが、しかし、戦争の根源はどこにあるのか、どのような性質の戦争があるのか、戦争を絶滅させる道はどういうものかといった点については真剣に研究しよう

としていない。

無政府主義者は、かつて、ある晴れた朝とつぜん国家を廃止することを要求したが、いま、「マルクス・レーニン主義者」と自任するいちぶのものも、資本主義制度がお存在し、搾取制度がお存在する条件のもとで、ある晴れた朝とつぜん「武器もなく、軍隊もなく、戦争もない世界」があらわれることを要求している。かれらは高慢にも、これを「画期的な偉大な発見」とか、「人類の意識の革命的変化」とか、マルクス・レーニン主義への「創造的貢献」とかと考え、かれらのこの科学的なおくりものをうけいれないのは「教条主義者」の罪のひとつであると考えている。

見うけるところ、トリアッチ同志とイタリア共産党のいちぶの同志は、やつきになつてこのおくりものを売りさばいているようである。かれらは、「戦争のない」新しい世界をつくるには、かれら自身の解釈する「平和共存の戦略」が唯一の戦略であるとのべている。しかし、かれらのこうした「平和共存の戦略」というものの内容は、レーニンが十月革命ののちに提起した、すべてのマルクス・レーニン主義者の擁護する平和共存の政策とは根本的に異なるものである。独占ブルジョアジーの支配するイタリアでは、当面の平和な時期でさえ、人民を弾圧する常備軍四〇余万人、警察約二〇万人、憲兵約八万人という武装力をもつほか、ミサイルをもつアメリカ

の軍事基地が設けられている。こうした国で、トリアッチ同志らの要求する「平和と平和共存」は、いったい、どのような意味をもつだろうか？ もしイタリア政府にたいして、平和・中立の政策をとり、社会主義国と平和に共存するよう要求するのであれば、それはもちろん正しい。だが、このほかに諸君はまた、イタリアの労働者階級その他の抑圧されている大衆に、独占ブルジョアジーとの「平和と平和共存」を實行せよと要求しているのではないだろうか？ 諸君のいう「平和と平和共存」は、アメリカ帝国主義者がみずからすすんでイタリアにおける軍事基地を撤去し、イタリアの独占ブルジョアジーがみずからすすんで武器をすて、軍隊を解散するということを意味しているのではないだろうか？ もしもそうしたことが実現できなければ、イタリアで抑圧階級と被抑圧階級との「平和と平和共存」を実現することがどうしてできるだろうか？ さらに、「戦争のない世界」をつくりだすことがどうしてできるだろうか？

もちろん、「武器もなく、軍隊もなく、戦争もない世界」が出現するものなら、まことに結構なことではないか。われわれはどうして諸手をあげて賛成しないことがあろう？

マルクス・レーニン主義者から見れば、あきらかに、問題は主観的な想定にあるのではなく、社会発展の法則そのものにある。

毛沢東同志は一九三六年に書いた「中国革命戦争の戦略問題」のなかで、「戦争——人類がた

がい殺しあう戦争という怪物は、人類社会の発展が、ついにはこれを消滅させるであろう」①とのべている。

一九三八年の抗日戦争の時期に、毛沢東同志は『持久戦論』のなかでふたたびこの理想を説明した。毛沢東同志は「ファシズムと帝国主義とは戦争を無期限に延ばそうとしているが、われわれは戦争をあまり遠くない将来に終わらせようとしている」②とのべている。

毛沢東同志は『持久戦論』のなかで、中華民族のみずからの解放をもとめる戦争は永久平和のための戦いであるとのべ、「われわれの抗日戦争は永久平和のための戦いという性質をふくんでいる」③とのべている。

毛沢東同志は、この書物のなかで、戦争は「階級の出現によつて」④うまれるものであるとのべている。同時に、毛沢東同志はまた、「人類がたゞ資本主義を消滅させさえすれば、永久平和の時代に到達する。そのときには、もはや戦争は不必要になり、そのときには、軍隊の必要もなく、軍艦の必要もなく、軍用機の必要もなく、毒ガスの必要もない。それからのちは、人類は幾億万年も戦争に遭遇することはないであろう」⑤とのべている。

毛沢東同志の以上のような論点は、レーニンがくりがえしのべた戦争と平和についての論点にまったく合致するものである。

一九〇五年、ちょうどロシア第一次革命の年に、レーニンはつぎのように書いている。

「社会民主党は、戦争をセンチメンタルな見地から見たことはかつてなかったし、またいまも見ていない。社会民主党は、戦争を人類の紛争解決の残忍な方法としてあくまで非難するが、社会が階級にわかれ、人による人の搾取が存在するかぎり、戦争は不可避であることを知っている。そして、この搾取を絶滅するためには、われわれは、戦争なしには済まさないであろう。この戦争をはじめるのは、つねに、どこでも、搾取し、支配し、抑圧する階級自身なのである。」⑥

一九一五年、ちょうど第一次の帝国主義世界大戦のころ、レーニンはつぎのように書いている。

マルクス主義者は、「諸民族間の戦争を野蛮で残忍なものとして、いつも非難してきた。しかし、戦争に対するわれわれの態度は、ブルジョア平和主義者（平和の擁護者、平和の鼓吹者）や無政府主義者の態度とは原則的にちがっている。われわれがブルジョア平和主義者たちがつとめるは、戦争が国内での階級闘争と不可避的な関連をもっていること、階級をなくし社会主義を打ちたてずには戦争をなくすことはできないことを、われわれが理解している点であり、さらに、国内戦争、つまり抑圧階級に対する被抑圧階級の戦争、奴隷所有者に対する奴隷の戦争、地主に

対する農奴的農民の戦争、ブルジョアジーに対する賃金労働者の戦争の正当性、進歩性、必然性を、われわれが完全にみとめる点である。われわれマルクス主義者が平和主義者とも、また無政府主義者ともちがうところは、それぞれの戦争を個別的に歴史的に（マルクスの弁証法的唯物論の見地から）研究する必要を、われわれがみとめる点である。」④

高度の嚴肅性をもつマルクス主義者としてのレーニンは、第一次世界大戦の時期に、最大の力をついやして戦争の問題を研究し、多くの嚴密な科学的分析をおこなった。レーニンはカウツキらの日和見主義者、修正主義者が戦争と平和についてのべたてた多くの謬論をきびしく批判し、戦争を絶滅する正しい道を人類にさししめした。

ところが、いま、「レーニン主義者」と自任するいちぶの人びとは、戦争と平和の問題について口から出まかせにしゃべりまくるだけで、レーニンがどのような方法で戦争の問題を研究したかを考えようとせず、レーニンが戦争と平和の問題についてひきだしたどのような科学的結論も考慮にいれようとしない。それにもかかわらず、かれらは口々にわめきたてて、他人がレーニンにそむき、自分たちだけが「レーニンの化身」であるといっているのである。

「戦争は他の手段による政策の継続である」という原理は時代おくれになったか

あるものは、こういうかも知れない——諸君にくどくどいわれなくても、われわれは戦争と平和の問題についてのレーニンの論点をよく知っている、だが、いまは条件が変わった、レーニンのこれらの論点はもはや時代おくれになった、と。

戦争と平和についてのレーニンの基本原理をまつ先に、しかも公然と時代おくれのものと思なしたのは、チトー一味である。かれらは、レーニンの強調した「戦争は他の手段による政策の継続である」という、各種の戦争を考察し、異なった戦争の性質を判断するこの理論的基礎は、原子兵器が出現して以来もはや適用できなくなった、と考えている。かれらの見るところによると、戦争はもはやあれこれの階級の政策の継続ではなくなった、戦争にはもはやなんらの階級的内容もなくなり、正義と非正義の区別もなくなったという。現代の軍事技術の諸条件のもとでは戦争の性質がすでにかわつたというトリアツチ同志らの論法は、その実、チトー一味がはやくから口にしていたのである。

帝国主義者と各国の反動派は、現代修正主義者が「戦争は他の手段による政策の継続である」という原理を否定したからといって、自分たちの武装を解除して、被抑圧人民と被抑圧民族にたいする弾圧を放棄するようなことはないし、社会主義国にたいする侵略と破壊活動を放棄するよなことはない、また、かれらがたがいに超過利潤をうばいあうためにひきおこす衝突を放棄す

るようなこともない、これはきわめて明らかである。現代修正主義者のこうした論法は、その実、被抑圧人民と被抑圧民族に影響をあたえて、帝国主義者が被抑圧人民と被抑圧民族を弾圧する戦争や、帝国主義者がすすめている軍備拡張と戦争準備、帝国主義者が市場と勢力範囲の争奪をめぐるひきおこす直接あるいは間接の武力衝突がすべて、帝国主義政策の継続でないかのような錯覚をおこさせようとするものにはかならない。たとえば、アメリカ帝国主義者が南ベトナム人民を弾圧している戦争も、新旧植民地主義者がコンゴで策動している戦争も、すべて帝国主義政策の継続でないという錯覚をおこさせようとしている。

いったい、アメリカ帝国主義者が南ベトナムですすめている戦争や、新旧植民地主義者がコンゴでひきおこしている武力衝突は、戦争のうちにはいるのか、はいらぬのか？ もし戦争のうちにはいらぬとすれば、それはなんであるか？ もし戦争のうちにはいるとすれば、これらの戦争はアメリカ帝国主義の制度やその政策と関係があるのかないのか？ また、それはどんな関係があるのか？

トリアッチ同志とイタリア共産党のいちぶの同志は、「地方的な小規模の戦争をさけることができる」⑤と考え、また、「社会主義が各地でまだ勝利をおさめていなくても、人類社会のなかで、戦争はおこせなくなる」⑤と考えている。これは、おそらくトリアッチ同志らが「われわれ

の学説そのもの」に「新たな考慮をくわえた」のち得た結論であろう。トリアッチ同志らのこうしたことばは、一九六〇年十一月にのべられたものである。一九六〇年いぜんのできごととはさておき、一九六〇年だけでも、世界各地につきのようなきさまの型の軍事衝突や武力干渉がおこった。そのうちの多くはトリアッチ同志らが「地方的な小規模の戦争」というものであった。

この年は、フランス植民地主義者の軍隊がアルジェリア民族解放運動を弾圧する戦争をおこしてから六年目にあたる。

この年、アメリカ帝国主義者とその手先ゴ・シンジエムがひきつづき南ベトナム人民を残酷に抑圧し、南ベトナム人民のいっそう大きな武力反抗をもえあがらせた。

一月から二月にかけて、アメリカの支持するイスラエルとシリアとのあいだに武力衝突がおこった。

二月五日、アメリカの海軍陸戦隊四千名がラテン・アメリカのドミニカに上陸し、武力で同国の内政に干渉した。

五月一日、アメリカのU-2型機がソ連の上空を侵犯し、ソ連のロケット部隊に撃墜された。

七月十日、ベルギーがコンゴに武力干渉した。十三日、国連の安全保障理事会が決議を採択し、「国連軍」をコンゴへ派遣して、コンゴの民族解放運動を弾圧した。

八月、アメリカはラオスのサバナケット一味を支持して、内戦をひきおこした。



一九六〇年におこつたできごとは、あるいはトリアッチ同志らのいう範囲にはいらぬのかも  
しれない。それなら、一九六一年、一九六二年の世界のできごとは、トリアッチ同志らの預言を  
立証できるだろうか？

事実を見ることとしよう。

フランス植民地主義者の軍隊はアルジェリアの民族解放運動を弾圧するためにひきつづき犯罪的な戦  
争をおこない、一九六二年三月にはじめて停戦のやむなきにいたつた。それまで、この戦争は七年以上  
もつづいた。アメリカ帝国主義者が南ベトナムですすめている反人民的な「特殊戦争」は、いまなおつづ  
いている。

アメリカ新植民地主義に奉仕する「国連軍」(インド軍がおもである)は依然としてコンゴ人民を弾  
圧している。一九六一年のはじめ、アメリカ帝国主義者とベルギー帝国主義者がその手先をそのかし  
てコンゴの民族英雄ルムンバを殺害した。一九六一年の九月から一九六二年の末まで、アメリカの牛耳  
る「国連軍」がイギリス、フランス、ベルギーなど旧植民地主義者の支配のもとにあつたカタンガ州に  
三回も武力攻撃をくわえた。

一九六一年三月、ポルトガル植民地主義者がアメリカ帝国主義の支持のもとに軍隊を集集し、民族独  
立を要求するアンゴラ人民にたいして大規模な弾圧と殺りくをおこなつた。この血なまぐさい犯罪行為

は、いまなおつづいている。

一九六一年四月十七日、キューバに武力侵入したアメリカの雇い兵が七十二時間たらずで英雄的なキ  
ューバの軍民のためヒロシ海岸で全滅された。

一九六一年七月一日、イギリス軍がクエートに上陸した。十九日、フランス軍がチュニジアのビゼル  
ト港を襲撃した。

一九六一年十一月十九日、二十日、アメリカが軍艦や飛行機を出動させて、ふたたびドミニカに武力干  
渉した。

一九六二年一月十五日、オランダ植民地主義者の海軍が西イリアン付近の海上でインドネシア海軍を  
襲撃した。

一九六二年四月、インドネシア人民が西イリアンでオランダ植民地主義者に反撃するゲリラ戦を展開  
した。

一九六二年五月、アメリカはラオス内戦の拡大をたくらみ、直接出兵してそれに干渉しようとした。  
十七日、アメリカ軍がタイに進駐した。二十四日、イギリスも一個中隊の空軍をタイに派遣するむね発  
表した。アメリカとイギリスのこうした軍事行動は、東南アジア地域の平和に直接脅威をあたえた。ラ  
オス人民の断固たる闘争と、社会主義国および中立国の共同した努力によって、一九六二年七月二十三  
日、ラオス問題の平和的解決のための拡大ジュネーブ会議で、「ラオスの中立についての宣言」とその

「議定書」が調印された。

一九六二年八月二十四日、アメリカの武装した船舶はキューバの首都ハバナの臨海住宅地を砲撃した。

一九六二年九月二十六日、イエメンで軍事クーデターがおこったとき、アメリカはサウジアラビアをそのかして出兵させ、それに干渉させた。

一九六二年、インドのネール政府がアメリカ帝国主義の支持のもとに、たえず武力をもつて中国地区に侵入した。十月二十日、ネール政府は中印辺境で大規模な軍事攻撃をおこした。

一九六二年十月二十二日、アメリカがキューバにたいし世界を震撼させた軍事封鎖と戦争挑発をおこなうという海賊行為に出た。祖国の主権をまもるキューバ人民の闘争は社会主義諸国と全世界人民の支持のもとに偉大な勝利をかちとつた。

この二年間、帝国主義者とその手先のおこなつた残酷な搾取、横暴な弾圧と武力干渉は、ひきつづき多くの国の人民と被抑圧民族の武力反抗をひきおこした。そのなかには、一九六二年十二月八日ブルネイ人民のおこなつた反英武装蜂起もふくまれている。

事實は、レーニンがのべた「戦争をはじめめるのは、つねに、どこでも、搾取し、支配し、抑圧する階級自身なのである」という真理、「戦争は他の手段による政策の継続である」という真理

をくりかえし立証している。現在と将来の事實もやはりレーニンののべたこれらの真理を立証するであろう。

### 歴史と現実 はわれわれになにを教えているか

帝国主義者と反動派がその政策の必要にもとづいてたえず各地で戦争をひきおこす以上、被抑圧人民と被抑圧民族が抑圧に反抗する戦争をだれも阻止することはできない。

「マルクス・レーニン主義者」と自任する例の人たちは、あるいは、われわれが前にあげた多くの戦争をみな戦争のうちにははならないと考えているのかもしれない。かれらは、「高度に発達した文明地域」でおきた戦争だけを戦争と考えているのである。その実、かれらのこうした観点も別に目あたらしいものとはいえない。

レーニンは、はやくから、「ヨーロッパ以外の戦争は戦争のうちにははならない」と考えるばかげた観点を批判した。一九一七年、レーニンはある演説でつぎのように嘲笑している。「われわれヨーロッパ人がこれらの戦争を戦争と考えないのは、それらが、あまりにもしばしば、戦争というよりは、むしろ、もつとも凶暴な殺戮、武器をもたない人民の皆殺しに近かつたからである」⑥と。

その実、レーニンに批判されたような人はいまでもいる。かれらは、かれらのところ、かれらの周辺にさえ戦争がなければ、天下太平だと考えている。その他のところで帝国主義者とその手先が人民を迫害し、虐殺しているかどうか、軍事干渉や武力衝突をおこなっているかどうか、また戦争をひきおこしているかどうか、こうしたことはすべてたいした問題ではない。かれらが心配しているのは、これらの地方の被抑圧人民と被抑圧民族による反抗の「火花」がとんだわざわいをもたらし、かれらに不安をもたらしはしないかということだけである。かれらは、これらの地方の戦争がどのようにしておこり、どの階級によっておこなわれ、どういう性質をもつものであるかを研究する必要がまったくないと考え、ただばく然と独断的にこれらの戦争を非難している。こうした観点はレーニン主義的な観点だといえるだろうか？

「マルクス・レーニン主義者」と自任する他のいちぶのものはまた、戦争といえば社会主義陣営と帝国主義陣営とのあいだの戦争だけをさし、二つの陣営のあいだの戦争以外に他の戦争がないかのように考えている。この論法もやはりチトー一味が最初に発明したものである。この問題では、こともあろうにチトー一味とおなじ歌をうたっているものもある。これらのものは、現実の生活をまったく見ようともしなければ、歴史をふりかえってみようともしない。

もしもこれらの人びとがそれほど忘れっぽくなければ、第一次世界大戦がおこったとき、世界

にはまだ社会主義国というものがなく、社会主義陣営などなおさらなかったにもかかわらず、やはり世界大戦がおこったことを思いおこすだろう。

もちろん、これらの人びとがそれほど忘れっぽくなければ、第二次世界大戦のことも思いおこすだろう。一九三九年九月から一九四一年六月に独ソ戦争がおこるまで、この大戦は二年ちかくものあいだ資本主義世界でおこなわれ、帝国主義国のあいだでおこなわれた。この二年間の大戦は社会主義国と帝国主義国の戦争ではなかった。ヒトラーがソ連にたいする攻撃をおこしてのちは、ソ連がこの大戦のなかでファシズムの強盗に反対する主力軍となったが、それでもやはり一九四一年六月以後の大戦をたんに社会主義国と帝国主義国とのあいだの戦争と見なすことはできない。この反ファシズム戦線には、社会主義国ソ連のほか、英、米、仏など一連の資本主義国が参加し、また、抑圧され、侵略された多くの植民地国と半植民地国も参加したのであった。

ここからもわかるように、二回にわたる世界大戦はいずれも資本主義世界に固有な矛盾によってひきおこされたものであり、帝国主義国相互間の利害の衝突によってひきおこされたものであり、帝国主義国によっておこさばじめられたものである。

大戦は、社会主義制度によって生みだされるものではない。社会主義国の内部には資本主義国にあるような特殊の対立的な社会矛盾がないから、対外拡張のための戦争をおこなうことはまっ

た。必要がないし、また許されもしない。世界大戦が社会主義国によってひきおこされるようなことは絶対にありえない。

一連の社会主義国の勝利と多くの国ぐにの民族民主革命運動の勝利によって、世界の情勢はたえず新しい大きな変化をとげている。トリアッチ同志らは、世界の力関係の変化によって帝国主義はもはやほしいままにふるまうことができなくなった、といっているが、このことばは決してまちがってはいない。じじつ、これは十月革命後まもなくレーニンが指摘した点である。レーニンは当時の階級的な力関係の変化にたいする評価にもとづいて、「いまでは国際ブルジョアジーは、もはや自由に行動することができない」⑦とのべた。だが、過去、現在、将来のいずれをとわず、世界の力関係がますます社会主義と各国人民に有利となつているとき、また、帝国主義者もはや勝手きままに行動できなくなつたとわれわれがいうとき、資本主義世界に固有な各種の矛盾によつてひきおこされるさまざまな衝突の可能性は自然になつたなどといえるだろうか？ 帝国主義国はもはや社会主義国を侵そうと夢みず、それを準備しなくなつたなどといえるだろうか？ 帝国主義国はもはや植民地、半植民地を侵略し、抑圧しなくなつたなどといえるだろうか？ 帝国主義諸国はもはや市場と勢力範囲争奪のために食うか食われるかの闘争をおこなわなくなつたなどといえるだろうか？ 独占ブルジョアジーはもはや自国の人民を残酷に迫害

じ、抑圧しなくなつたなどといえるだろうか？ もちろん、そうはいえない。

社会関係、社会制度、社会発展の法則から戦争と平和の問題を観察するの でなければ、これらの問題を理解することは永久にできない。

旧い日和見主義者カウツキーは、「戦争は軍拡競争の産物」であつて、「もしみずからすすんで軍縮の問題にかんするとりきめをむすぶなら」、「最も重大な戦争原因の一つをとりのぞく」⑧ことになると考えていた。レーニンは、社会制度、搾取制度から戦争の根源を観察しなかつたカウツキーその他の旧い日和見主義者のこうした反マルクス主義的観点にするどい批判をくわえた。

レーニンは「プロレタリア革命の軍事綱領」のなかで、「プロレタリアートは、ブルジョアジーを武装解除したのちにはじめて、自分の世界的任務を裏切らず、武器をくず鉄にしてしまうことができる。そのときには——だが、そのまえにはなく——プロレタリアートはたしかにそうすることができるであろう」⑨と指摘している。社会発展の法則はこれ以外にありえないのである。

現代修正主義者は歴史的、階級的な見方で戦争と平和の問題を説明できないため、いつも正義の戦争と正義でない戦争とを区別せず、ただばく然と平和を論じ、戦争を論じている。あるものは、全般的かつ完全な軍縮が実現して抑圧者の手もとに武器がなくなれば、人民の解放が「この

うえなく容易」になると、人びとに信じこませようとしている。これは口からの出まかせであつて、まったく実際からかけ離れ、本末を転倒させたものであると、われわれは考える。まさしくレーニンがのべたように、かれらは、「まるきりちがった事がらを『結び合わせる』ことはをつかつて二つの敵対的な階級と二つの敵対的な政策を和解させようとしている」<sup>⑩</sup>のである。

現代修正主義者のいわゆる「平和」やいわゆる「平和共存の戦略」は、実際には、世界平和を待ちとる希望を、世界各国人民の団結と闘争に依拠することに託するのではなく、帝国主義の支配者の「賢明さ」に託している。かれらはいろいろな方法で各国人民の闘争の手足をしばり、各国人民の革命的意志をにぶらせ、各国人民に革命行動を放棄させ、そうすることによつて、帝国主義反対と世界平和擁護の力を弱めようとしている。その結果は、帝国主義的侵略勢力と戦争勢力の反動的な気炎をつのらせ、世界戦争の危険をますますだけである。

#### 史的唯物論か それとも唯武器論か

現代修正主義者は、原子兵器が出現したのち、社会発展の法則はもはや作用しなくなり、戦争と平和についてのマルクス・レーニン主義の基本理論もすでに時代おくれになつた、と考へている。トリアッチ同志もやはりこういう見方をしてゐる。核兵器と核戦争の問題をめぐるトリアッチ

チ同志とわれわれの主な意見の相違については、われわれの一九六二年十二月三十一日付の「人民日報」社説のなかですでに論じておいた。ここでは、われわれはさらに一步すすんでこの問題を検討してみよう。

マルクス・レーニン主義者は、新しい兵器、新しい軍事技術が軍隊の編成と戦争におよぼす作用を適切かつ十分に評価している。マルクスの『賃労働と資本』のなかにはつぎのような有名なことばがある。「火器という新兵器の発見とともに、必然的に、軍隊内の組織全体が変化し、そのなかで個々人が軍隊を形成し、軍隊として作用しうる関係がかわるとともに、各種の軍隊相互の関係も変化した。」<sup>⑪</sup>

だが、マルクス・レーニン主義者は、ゆらい、唯武器論者ではない。

十月革命ののち、レーニンは、「人民の深部に、より多くの予備、より多くの力の源泉、より多くの堅忍の精神をもっているものが、戦争に勝利する」とのべ、また、「われわれはこれらすべてを、白衛軍よりも多く、粘土の足をした巨人である『世界的強国』イギリス、フランス帝国主義よりも多く、もっている」<sup>⑫</sup>とのべている。

問題をあきらかにするため、われわれはレーニンのことばをもう一節引用することにしよう。

レーニンは、のべている。「あらゆる戦争の勝敗は、結局は、戦場で自分の血をながす大衆の精

神状態によつてきまる。……大衆が戦争の目的と原因をこのように自覚していることは、巨大な意義をもっており、勝利を保証するものである——」<sup>(13)</sup>と。

戦争における人間の役割を十分に評価すること——これはマルクス・レーニン主義者が戦争の問題で提起した一つの根本的な原理である。ところが、「マルクス・レーニン主義者」と自任するいちぶのものは、つねづねこの原理を忘れきつてゐる。第二次大戦の末期に原子兵器があらわれたとき、いちぶのものは考え方が混乱しはじめ、原子爆弾で戦争を解決できると考えるようになった。当時、毛沢東同志は、「そうした同志のものの見方は、イギリスの一貴族にもおよばない」、「これらのわが同志たちはマウントバッテンよりもおくられてゐる」<sup>(14)</sup>とのべたものである。当時、東南アジア連合軍の最高指揮官をしていたイギリス貴族のマウントバッテンは、「原子爆弾によつて極東の戦争を停止させることができると考えるのは最大の誤りである」<sup>(15)</sup>という談話を発表したのであつた。

もちろん、毛沢東同志は原子兵器の破壊力を十分に評価しており、「原子爆弾は一種の大量殺人兵器である」<sup>(16)</sup>とのべている。中国共産党は一貫して、核兵器は空前の破壊力をもつており、もし核戦争がおれば、人類は空前の災禍にみまわれるだろう、と考えている。だからこそ、われわれはつねに核兵器の全面的禁止、つまり、核兵器の実験、製造、貯蔵、使用の完全な禁止を

主張するとともに、核兵器の廃棄を主張してゐるのである。同時にまた、われわれは一貫して、いずれにせよ、原子兵器はけつきよく社会の歴史の発展法則を変へることができず、戦争の勝敗を最終的にきめることができず、帝国主義の死滅を救うことができず、各国のプロレタリアー、各国人民および被抑圧民族の革命の勝利をはばむことができないと考えている。

一九四六年九月、スターリンはつぎのようにいつたことがある。「わたしは、原子爆弾がいちぶの政治家の想像しているほど、恐しいものとは思わない。原子爆弾は、神経衰弱の人をおどかすことはできても、戦争の運命をきめることはできない。なぜなら、原子爆弾は戦争の運命をきめるのにまったく不十分だからである。もちろん、原子爆弾の秘密を独占することは脅威を生み出すことになるが、これに対処する方法はすくなくとも二つある。(一)原子爆弾の独占はそう長くはつづかない。(二)原子爆弾の使用はやがて禁止されるだろう」<sup>(17)</sup>と。スターリンのこのことはひじょうに予言的である。

第一次世界大戦ののち、いちぶの帝国主義国は一種のいわゆる軍事理論をわめきたて、空軍の優勢や奇襲攻撃によつてすみやかに戦争をおわらせ、勝利をおさめることができるといつたことがある。第二次世界大戦の実際状況はこうした理論の破産を立証した。核兵器があらわれたのち、いちぶの帝国主義者はまたもやこうした理論をわめきたてて、核恐喝をおこなひ、核兵器を

つかえば急速に戦争の勝敗をきめることができると考えている。かれらのこうした理論もかならず破産するにちがいない。ところが、現代修正主義者は、チトー一味と同様、アメリカ帝国主義者その他の帝国主義者のために犬馬の勞をとり、こうした理論をさかんに吹聴して各国人民をおどかしている。

アメリカ帝国主義者の核恐喝政策は、世界を隸属させようとするその悪らつな野心をあらわすとともに、かれら自身の恐怖感もあらわしている。

先に核兵器をつかえば帝国主義者の命とりになる、ということを知っておくべきである。

一、帝国主義者が先に核兵器をつかつて他国を攻撃するならば、かならずかれら自身が全世界でひじょうに孤立した立場においやられてしまう。なぜなら、こうした攻撃は人類の正義にもとる最大の犯罪行為であり、全人類を敵にまわすものだからである。

二、核兵器をつかつて他国をおびやかす帝国主義者は、なによりもまず自国の人民に脅威をあたえ、自国の人民を核兵器にたいする恐怖のなかにおいやることになる。帝国主義者は核恐喝の政策を固執すれば、かならずしだいに自国の人民を自覚させ、自国の人民をたちあがらせて、かれらに反対させるようになる。日本への最初の原爆投下に参加したアメリカの飛行士は、戦後、全世界の人民が原爆投下を非難したので、自殺をころみ、何回も「精神病院」におくられた。

このこと自体、アメリカ帝国主義の核戦争政策がいかに人心をえていないかを物語っている。

三、帝国主義者が戦争をおこす目的は、地盤を争奪し、市場を拡大し、他国の富を略奪し、他国の勤労者を隸属させることにある。ところが、核兵器の破壊力は、核兵器使用のもたらす結果がかれらの追求する実際上の利益と矛盾し、抵触するということを、帝国主義者に考えさせないわけにはいかない。

四、核兵器の秘密ははやくから独占できなくなっている。核兵器をもつものは、他国が核兵器をもつのを禁止することはできない。ミサイルをもつものは、他国がミサイルをもつのを禁止することはできない。帝国主義者が核兵器をつかつて相手方を壊滅させようとするれば、実際には、自分を壊滅させることになる。

以上、帝国主義者が核兵器をつかつて戦争をおこしたばあい、必然的に生まれる結果についてのべた。われわれは、かねてから、核兵器の全面的禁止についてとりきめをむすぶことは可能であると考えている。その重要な根拠の一つはここにある。

同時に、帝国主義者、わけてもアメリカ帝国主義者のすすめている狂気じみた核軍備拡張政策は、資本主義的帝国主義制度じしんの危機を増大させている事実を知っておくべきである。つまり、

一、帝国主義国の人民は軍事支出の面であつてないほど重い負担を負わされており、自国の国民経済はますます奇形な軍事化の道をたどっている。そのため、帝国主義国の政府とその軍備拡張・戦争準備の政策は人民からますます強い反対をうけている。

二、帝国主義者の軍拡競争、わけでも核軍備の競争は、帝国主義国相互間の矛盾を激化させ、帝国主義国内部の各独占グループ相互間の闘争を激化させている。

エンゲルスは十九世紀の七〇年代に書いた『反デュリン論』のなかで、「軍国主義がヨーロッパを支配し、これをくいつくしてしまふ。しかし、この軍国主義は、それ自身のなかにその滅亡の萌芽をもっている」<sup>⑩</sup>とのべている。

いまでは、なおさらこういうことが言える。つまり、アメリカ帝国主義者その他の帝国主義者の核軍備拡張の政策は、北米と西欧を支配し、これをくいつくしつつある。しかし、この政策、この新しい軍国主義は、それ自身のなかに帝国主義制度滅亡の萌芽をもっている。

ここからもわかるように、アメリカ帝国主義者とその仲間たちが核軍備拡張の政策を遂行すれば、その結果はみずかも自分じしんに反対することとならざるをえない。かれらがあえて核兵器をつかつて戦争をおこすなら、その結果はかならず、みずから自分じしんを壊滅させることになるだろう。

結論はどうなるか？ トリアッチ同志らのいわゆる「人類絶滅」の論法とは逆に、結論はただつぎの通りである。

一、人類が核兵器を消滅するのであつて、核兵器が人類を滅ぼすのではない。

二、人を食う帝国主義制度が人類に滅ぼされるのであつて、人類が帝国主義制度に滅ぼされるのではない。

トリアッチ同志らの考えによると、核兵器が出現したため、「こんにち人類の運命はおぼつかない」<sup>⑪</sup>という。核兵器が存在する条件のもと、核戦争の脅威のもとでは、社会制度を選択する問題を云々することはもはや無意味になつた、というのがかれらの考えである。こうした論法によると、資本主義制度がかならず社会主義、共産主義の制度にとりかわられるという社会発展の法則はどこへいつてしまったのか？ また、帝国主義が寄生的な、腐敗しつつある、瀕死の資本主義であるというレーニンの解明した真理はどこへいつてしまったのか？

こうした論法は真正銘の「宿命論」、「懷疑論」、「悲観論」でなくてなんだろうか？ われわれは「レーニン主義万歳」という論文のなかでつぎのようにのべたことがある。

「各国人民の自覚が高まり、十分な備えがありさえすれば、社会主義陣営もすでに現代兵器を掌握したという条件のもとで、もしアメリカ帝国主義者またはその他の帝国主義者が原子兵器と



核兵器の禁止協定の達成をこぼみ、かつまたあえて天下のそしりをかえりみず、いったん原子兵器と核兵器をもちいて戦争を敢行するならば、その結果は世界人民の包囲のなかにあるこれらの野獣じしんが急速に壊滅させられるだけであつて、人類の壊滅などということは決してありえない、と断定できる。帝国主義が犯罪的な戦争をひきおこすことは、われわれの終始反対するところである。なぜなら、帝国主義戦争は各国人民（アメリカその他の帝国主義国の人民をふくむ）にぼう大な犠牲をもたらすからである。しかし、もしも帝国主義者がこうした犠牲を各国人民の頭上におしつけるならば、まさしくロシア革命や中国革命の経験とおなじく、この種の犠牲は代価をうけるものであることを、われわれは信じている。勝利した人民は、帝国主義の死滅した廢墟のうえに、きわめて急速な足どりで資本主義制度より幾百幾千倍も高い文明を創造し、自己の真にしあわせな将来を創造するであろう」<sup>20</sup>と。

これが真理ではないだろうか？

ところが、ここ数年らしい、「マルクス・レーニン主義者」と自任するいちぶのものは、こうしたマルクス・レーニン主義的論点をさかんに歪曲し、非難して、帝国主義死滅の廢墟を「人類の廢墟」といいくるめ、帝国主義の制度と人類の運命とを同列においている。こうした論調は、事實上、帝国主義制度を擁護する論調である。これらの人は、もしマルクス・レーニン主義の古典

的著作をよんだことがあるなら、ふるい制度の廢墟のうえに新しい制度をうちたてることこそ、もともとマルクス、エンゲルス、レーニンの命題であつたことを知っているはずである。

エンゲルスは『反デューリン論』のなかで、「ブルジョアジーは、封建的秩序をうちくだけ、その廢墟のうえにブルジョアの体制をうちたてた」<sup>18</sup>とのべている。エンゲルスのいつた封建的秩序の廢墟は「人類の廢墟」だともいふのであろうか？

レーニンも一九一九年十二月に書いた、「憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの独裁」のなかで、プロレタリアートは、「資本主義の廢墟のうえに社会主義を組織す」<sup>19</sup>べきであるとのべている。レーニンのいつた資本主義の廢墟は「人類の廢墟」だともいふのであるか？

マルクス・レーニン主義者のいう旧制度の廢墟を「人類の廢墟」といいくるめるのは、嚴肅な論争のかわりにふざけた手口をつかうことにはかならない。これがトリアッチ同志らの口する「和音」だといえるだろうか？これがトリアッチ同志らの要求している「容認できる語調で論争する」ことだといえるだろうか？じじつ、トリアッチ同志じしん、イタリアのファッショ制度が壊滅したとき、つぎのようにいつたことがある。「われわれのまえには偉大な任務がひかえている。われわれは、ファシズムの廢墟のうえ、反動的圧政の廢墟のうえに、新しいイタリアをうちたてなければならぬ」<sup>20</sup>と。

慎重なマルクス・レーニン主義者ならだれでも、帝国主義者が犯罪的な手段をもちいて各国人民に大きな犠牲をはらわせ、大きな苦難をなめさせる可能性があるということを考慮しないわけにはいかない。しかし、こうした考慮は、人民の自覚をよびおこし、よりよく人民を立ちあげさせ、組織し、正しい解放闘争の道をさがしだし、人類が帝国主義の脅威のもとで苦難からぬけだし、平和をかくとくする道をさがしだし、効果的に核戦争をくいとめる道をさがしだすためのものである。

社会主義国が対外侵略のための戦争をおこすようなことは絶対にありえないということ、これはだれでも知っており、アメリカ帝国主義者やすべての帝国主義者、各国の反動派も知っている。社会主義国の国防は、自国が侵略をうけないように自国を守るためのものであつて、他国を侵すためのものでは絶対にない。もしも侵略者が戦争を社会主義国におしつけるなら、社会主義国は、なによりもまず自衛のための防衛戦をおこなう。

社会主義国が核兵器をもつのも、まったく防衛のためであり、帝国主義者が核戦争をおこすのをくいとめるためである。社会主義国が核兵器の優位を保持しても、核兵器をもちいて他国を攻撃するようなことは絶対にありえないし、許されもしない、また、そうする必要もまったくない。社会主義国は、核恐喝の政策にだんこ反対し、核兵器の全面的禁止と廃棄を主張している。

以上が核兵器の問題にたいする中華人民共和国、中国共産党の態度、方針、政策にほかならない。これこそマルクス・レーニン主義の態度、方針、政策である。現代修正主義者は核兵器の問題で、故意にわれわれの態度、方針、政策を歪曲し、卑劣きわまる誹謗とデマをでつちあげているが、その裏、これは帝国主義の核恐喝をおおいかくすためのものであり、核兵器の問題におけるかれら自身の冒険主義と降伏主義をおおいかくすためのものである。指摘しておかなければならないのは、核兵器の問題における冒険主義と降伏主義がきわめて危険なものであり、最も無責任な態度だということである。

### 奇怪しこくな命題

社会主義国はその社会制度の性質から、世界のいつさいの被抑圧人民と被抑圧民族の解放闘争に同情をよせ、これを支持している。しかし、社会主義国が対外戦争をおこして、これを他国の人民の革命闘争にかえるようなことは絶対にありえない。各国人民の解放は各国人民じしんの事柄だということ——これは、マルクスらしい、すでに権力をにぎっている共産主義者をもふくめて、すべての真の共産主義者の確固不動の論点である。この論点はまた、マルクス・レーニン主義者が一貫してのべている「革命は輸出もできないければ、輸入もできない」という論点でもあ

る。

いかなる国でも、もしその人民じしんに革命の要求がなければ、だれも外からかれらに革命をおしつけることはできない。もしそこに革命の危機がなく、革命の条件が熟していなければ、だれもそこに革命をつくりだすことはできない。もちろん、もしその人民じしんが革命を要求し、自分じしんが革命にたちあがるなら、だれもかれらの革命を阻止することはできない。それはちようど、キューバの革命、アルジェリアの革命、南ベトナムの革命をだれも阻止できないのと同じである。

トリアッチ同志らによると、平和共存を實行するということは、「外国が反革命または革命を『輸出』するため干渉する可能性をとりのぞく」<sup>②</sup>ことを意味するという。それならば、たずねたい、「外国が革命を輸出する」とは、社会主義国が革命を輸出しようとしているということなのかどうか？ これは帝国主義者と反動派のかねてからの言いぐさである。共産主義者ともあろうものがこのように言っているのだろうか？ 帝国主義国についていうなら、かれらは一貫して反革命を輸出している。帝国主義国で反革命を輸出したことのない国がひとつでもあるなどと、だれがいえるだろうか？ 人びとは、帝国主義者が偉大な十月革命にちよくせつ干渉をくわえたことを忘れることができるだろうか？ 人びとは、帝国主義者が中国革命にちよくせつ干渉をくわ

えたことを忘れることができるだろうか？ アメリカ帝国主義者がいまなおわが国の領土台湾を不法占領していることをだれが否定できるだろうか？ アメリカ帝国主義が一貫してキューバ革命に干渉していることをだれが否定できるだろうか？ アメリカ帝国主義者は国際的憲兵として、いまさかんに世界各地へ反革命を輸出しているではないか？ 資本主義世界の各国の内政に干渉しようとするくわだてていないか？

トリアッチ同志らは、社会制度のことなる国々にを区別せず、また、「革命は輸出もできないれば、輸入もできない」というマルクス・レーニン主義の論点も理解せずに平和共存を云々するとき、帝国主義者が一貫して反革命を輸出しているという事実を回避し、いわゆる「反革命の輸出」と「革命の輸出」とを同日に論じているのである。このような奇怪しこくな命題は原則上の誤りであるといわなければならない。

### 戦争と平和の問題についての中国の共産主義者の基本的論点

戦争と平和の問題で、中国の共産主義者はレーニンの観点を一貫して堅持している。

まえにも引用したとおり、レーニンは、プロレタリアートの政党が「戦争をあくまで非難し」「諸民族間の戦争をいつも非難してきた」と指摘している。しかし、レーニンはゆらい、正義で

ない戦争に反対し、正義の戦争を支持しなければならぬと考え、ただばく然とすべての戦争に反対することをしなかつた。いま、あるものは破廉恥にも自分をレーニンにたとえ、レーニンもリープクネヒトやルクセンブルグも、自分たちとおなじように戦争に反対したといっている。かれらは、戦争と平和の問題についてのレーニンの理論と政策を骨ぬきにしてゐる。だれでも知っているように、レーニンは第一次世界大戦のとき、帝国主義戦争に反対してだんこ闘つたが、同時に、レーニンはまた、いったん帝国主義国のあいだに戦争がおこれば、自国のプロレタリアートその他の勤労者は帝国主義戦争を帝国主義国内部の正義の革命的戦争、つまり自国の帝国主義者にたいするプロレタリアートその他の勤労者の正義の革命的戦争に転換させるべきであると主張した。十月革命が勃発したつぎの日、レーニンの主宰のもとで、労働者・兵士代表ソビエト第二回全ロシア大会が有名な「平和についての布告」を採択した。この布告は、国際プロレタリアート、わけてもイギリス、フランス、ドイツの三ヶ国の自覚した労働者たちに「戦争の恐怖とその結果から人類を解放するという、いまかれらに課せられている任務を理解し、そしてその全面的な、断固たる、献身的な精力的活動によつて、われわれが平和の大業を、それとともに勤労被搾取住民大衆をあらゆる隷属とあらゆる搾取から解放するという大業を、成功裏に最後まで遂行するのをたすける」ようよびかけた。この布告は、ソビエト政府は「富強な諸国家がその略奪した

弱い民族を自分たちのあいだでどのようにわけあうかということをめぐるこの戦争をつづけることを、人類に対する最大の犯罪と考え、例外なくすべての民族にとつてひとしく公正な上記の条件にもとづいて、この戦争をやめる、そういう講和の協定に即時調印する用意があることを、厳粛に声明した」<sup>②4</sup>のであつた。レーニンが作成したこの布告はプロレタリア革命史上の偉大な文献である。ところが、いまある人は、こともあろうにこの文献を歪曲し、きりきざんで、帝国主義国が世界を分割し、弱小民族を抑圧するためにすすめている戦争は人類にたいする最大の犯罪であるというレーニンのことばを、故意に「戦争は『人類にたいする最大の犯罪』である」と改竄している。これらの人びとは、レーニンというこの偉大なプロレタリアートの革命家、偉大なマルクス主義者をブルジョア平和主義者としてえがきだしているのである。かれらはこのようにおこつびらにレーニンを歪曲し、レーニン主義を歪曲し、歴史を歪曲していながら、しかも、他人が「マルクス主義の革命闘争についての学説の實質を理解していない」といかにももつともらしくいつている。これはいかにも奇談、怪論ではないか？

中国の共産主義者が現代修正主義者から咒詛と悪罵をあげせられているのは、われわれがレーニン主義を歪曲するいつさいの奇談、怪論に反対し、戦争と平和の問題についてのレーニンの理論をその本来のすがたにもどすことをあくまでも主張しているからである。

マルクス・レーニン主義者は、社会主義国の力の結集と発展にたより、被抑圧民族と被抑圧人民の闘争にたより、国際プロレタリアートの闘争にたより、全世界のすべての平和を愛する国々と人民の闘争にたよって、世界平和をまもり、新しい世界大戦を防止することを主張している。これは、世界各国人民が世界平和をまもる正しい路線であり、この路線は戦争と平和について、レーニン主義の理論にまったく合致するものである。ある人は悪らつにもこの路線について、「このような『理論』にしたがうなら、社会主義の勝利への道は国と国との戦争をつうじ、破壊をつうじ、また、いく千いく万の人の流血と死亡をつうじ、必要がある」といつている。これらの人びとは、世界平和の擁護を各国人民の革命闘争と対立させるとともに、平和が欲しければ、各国人民は帝国主義者のまえに膝を折らねばならず、各国の被抑圧民族と被抑圧人民はその解放闘争を放棄せねばならぬと考えている。かれらはただアメリカをかしらとする帝国主義者に世界平和を「恵みあたえる」よう乞い求めるだけであつて、平和を愛する世界の各種勢力の連合した闘争にたよって平和をかちとろうとするのではない。かれらのこうした「理論」、こうした路線は、まったくまちがつており、レーニン主義にそむくものである。

戦争と平和の問題についての中国の共産主義者の基本的観点、ならびにこの問題でトリアッチ同志らとわれわれとの意見の相違がいったいどこにあるかについては、一九六二年十二月三十一

日付の『人民日報』社説のなかで、われわれはすでに説明しておいた。その文章には、つぎのよう

うのべたところがある。

「中国共産党は、どのようにして世界戦争を防止し、世界平和を守るかの問題では、あくまで帝国主義をハクロすること、社会主義陣営の力を強化すること、あくまで民族解放運動と各国人民の革命闘争を支持すること、平和を愛する世界のあらゆる国ぐにや人びともつとも広はん

に連合することを一貫して主張し、同時にまた、敵の内部の矛盾を十分に利用し、話し合いその他各種の形態による闘争を活用することを一貫して主張している。すべてこれらのものは、世界戦争を防止し、世界平和を守るうえに効果のあるものである。こうした主張は完全にマルクス・レーニン主義に合致し、モスクワ宣言とモスクワ声明に合致している。これは世界戦争を防止し、世界平和を守る正しい方針である。われわれがこの正しい方針を堅持するのは、右にのべた各種の力の連合闘争にたよれば世界戦争を防止できると確信しているからである。これがどうして世界戦争回避の可能性を信じていないとか、『好戦的』だとか、いえるだろうか。中国共産党を攻撃する人びとの主張どおりに、帝国主義を美化し、平和の望みを帝国主義に託し、民族解放運動と人民革命闘争に消極的な態度や反対の態度をとり、帝国主義に屈服し投降するならば、それは全世界の人民にニセの平和か真の戦争をもたらすだけのものである。これはすべてのマル

クス・レーニン主義者、すべての革命的人民、平和を愛する人民がどこまでも反対せざるをえな  
 い誤った方針である」と。

ここで、戦争と平和の問題についてのわれわれの基本的論点をかさねて簡単にのべてみよう。  
 第一、われわれは、アメリカ帝国主義をかしらとする戦争勢力と侵略勢力がたしかに第三次世  
 界大戦を準備しており、戦争の危険は存在する、と一貫して考えている。だが、十数年らい、世  
 界の力関係の変化は、社会主義にいつそう有利になり、民族解放闘争にいつそう有利になり、人  
 民民主主義をめざす闘争にいつそう有利になり、世界平和を守る闘争にいつそう有利になってい  
 る。人民は決定的な要因である。帝国主義と反動派は孤立している。人民の団結と闘争にたよ  
 り、社会主義国の正しい政策にたより、各国プロレタリア政党的正しい政策にたよれば、新しい  
 世界戦争をさけることは可能であり、核戦争をさけることは可能であり、核兵器の全面的禁止に  
 ついてのとりきめをむすぶことは可能である。

第二、世界各国人民が世界平和をまもりぬき、新しい世界大戦をくいじめ、核戦争をくいじめ  
 るには、たがいに支持しあい、もつとも広はんな統一戦線を結成し、アメリカ人民もふくめ結集  
 できるいつさいの力を結集して、アメリカの反動派をかしらとする帝国主義ブロックの戦争政策  
 と侵略政策に反対しなければならない。

第三、社会主義国は、社会制度のことなる国々にの平和共存の政策を主張し、堅持し、社会制  
 度のことなる国々にと友好関係を発展させ、平等な貿易をおこなうことを主張し、堅持してい  
 る。社会主義国の平和共存政策は、国と国とのあいだの紛争を武力にうったえて解決することに  
 反対し、他のいかなる国の内政にも干渉しない。ある人の考えによると、平和共存はすべての資  
 本主義国の社会制度に改革をもたらすものであり、平和共存は「世界的な範圍で社会主義へむか  
 う道」<sup>⑤</sup>であるという。またある人の考えによると、平和共存の政策は、世界のすべての被抑  
 圧人民と被抑圧民族が「帝国主義に反対し、各国人民の解放をめざすもつともすんだ闘争形  
 態」<sup>⑥</sup>であるという。かれらは、社会制度のことなる国々にの平和共存の問題を、資本主義国に  
 おける階級闘争の問題、被抑圧民族の解放をがらとる問題と混同し、レーニンのいう平和共存の  
 政策を根本的に歪曲している。

第四、われわれは、帝国主義者が社会主義国を侵略する危険性にたいしつねに高い警戒心をも  
 たなければならぬ、と一貫して考えている。同時に、われわれはまた、社会主義国と帝国主義  
 国がある重大な問題をふくむ若干の問題について、平和な話し合いを通じてとりきめをむすび、  
 必要な妥協をおこなう可能性がある、と一貫して考えている。だが、まさしく毛沢東同志がのべ  
 ているように、「こうした妥協は、決して、資本主義世界の各国人民に、これにならって国内で

も妥協せよと要求するものではない。各国の人民はやはり、異なった条件に依りて異なった闘争をおこなうであらう。」<sup>②⑦</sup>

第五、帝国主義国相互間のするどい矛盾は客観的に存在するものであり、調和できないものである。各帝国主義国のあいだ、また帝国主義国ブロックのあいだには、かならず大小さまざまな、直接的または間接的な、あれこれの形態の衝突がおこるものである。これは、帝国主義の実際上の利害關係によつてもたらされるものであり、帝国主義に固有な本性によつて決定されるものである。新しい歴史的条件のもとでは各帝国主義国のあいだに実際上の利益から衝突の生まれの可能性がすでになくなったという論法は、帝国主義がすつかり変わったというにひとしく、実際には帝国主義をかぎりたてるものである。

第六、資本主義的帝国主義と搾取制度の存在が戦争の根源である以上、帝国主義者と反動派が被抑圧民族と被抑圧人民にたいして侵略戦争、反人民の戦争をおこさないということを、だれも保証することはできない。同時にまた、すでに自覚した被抑圧民族と被抑圧人民がたちあがつてそれに反抗する革命戦争をおこなうのを、だれも阻止することはできない。

第七、レーニンが確認し強調した、「戦争は政策の継続である」という原理は、いままなお有効である。資本主義的帝国主義国の社会制度は社会主義国のそれと根本的にちがつており、資本

主義的帝国主義国の対内、対外政策も社会主義国のそれと根本的にちがつている。こうしたところから、資本主義的帝国主義国と社会主義国は戦争と平和の問題で根本的にちがつた立場をとることになる。資本主義的帝国主義国の側からいえば、かれらが戦争をおこなうのも、平和を求めらるのも、すべて帝国主義の利益を追求もしくは保持するためである。帝国主義戦争は帝国主義の平和政策の継続であり、帝国主義の平和は帝国主義の戦争政策の継続である。ブルジョア平和主義者と日和見主義者はかねてからこの点を否定している。まさしくレーニンがのべたように、「『戦争は平時の政策の継続であり、平和は戦時の政策の継続である』という考えは、この二つの色合いの平和主義者のいづれにとつても理解されなかつた」<sup>②⑧</sup>のである。

第八、人類の永久平和の時代がやがておとずれ、あらゆる戦争を絶滅させる時代がやがておとずれであらう。われわれはそのために闘っている。だが、この偉大な時代の到来は、人類が資本主義的帝国主義制度を絶滅させたのちのみ可能であつて、それ以前には不可能である。まさしくモスクワ声明がのべているように、「全世界における社会主義の勝利は、最後のに、あらゆる戦争のおこる社会的原因と民族的原因をとりのぞくだろう」<sup>②⑨</sup>

戦争と平和の問題について、われわれの基本的論点は以上のとおりである。

われわれの論点は、マルクス主義の唯物史観にもとづいて、世界に客観的に存在する大量の現

象に分析をくわえ、世界各国のあいだのきわめて複雑な政治、経済関係に分析をくわえ、偉大な十月革命からはじまった、資本主義から社会主義への移行という世界の新しい時代の具体的な状況に分析をくわえて導きだしたものである。こうした論点は、理論的に正しいだけでなく、実践のなかでもくりかえし試練をうけてきた。現代修正主義者とその追隨者は、こうした論点をどうしても反駁することができない、そのため、かれらはかつて気ままな歪曲や、嘘いつわりをでっちあげるなどの方法で、真理をうち倒そうとするほか手がないのである。

だが、真理はどましてうち倒されるだろうか？ 真理をうち倒そうと妄想する人びとこそ、おそれればやかれ真理にうち倒されるだろう。こういつた方がもつと正しいのではないだろうか？ いま、「創造的なマルクス・レーニン主義者」と自任するいちぢものものは、世界の歴史はかれらの指揮棒にしたがつて動くものであつて、客観的に存在する社会発展の法則にしたがつて発展するものではないと考えている。そこで、われわれは、レーニンが『唯物論と経験批判論』のなかで引用した、フランスの有名な哲学者デイドロのことを思い出す。

「感覚をもつたクラヴサンが、自分はこの世に存在する唯一のクラヴサンで、宇宙のすべての調和は自分のなかでおこなわれているのだ、と考えた、気のちがつた瞬間があつたのを」<sup>20</sup> 自己はすべてであり、すべては自己の主観のなかにふくまれると考えるあの史的観念論者たち

に、このことばをとくと考えてもらおうではないか！

- ① 『毛沢東選集』第一巻
- ② 『毛沢東選集』第二巻
- ③ 「革命軍と革命政府」。『レーニン全集』第八巻
- ④ 「社会主義と戦争」。『レーニン全集』第二二巻
- ⑤ 一九六二年一月、イタリア共産党中央新聞宣伝部の編集し、出版した「八」の共産党・労働者党の代表者会議におけるイタリア共産党代表団の若干の発言」参照
- ⑥ 「戦争と革命」。『レーニン全集』第二四巻
- ⑦ 「ロシヤ共産党（ボ）第八回大会」。『レーニン全集』第二九巻
- ⑧ カウツキーの『民族国家、帝国主義国家と国家聯盟』参照
- ⑨ 『レーニン全集』第二三巻
- ⑩ 「平和の問題」。『レーニン全集』第二二巻
- ⑪ 『マルクス・エンゲルス全集』第六巻
- ⑫ 「モスクワの党週間の総括とわれわれの任務」。『レーニン全集』第三〇巻
- ⑬ 「ロゴジャスコーシモノフ地区の広はん労働者・赤軍兵士会議での演説」。『レーニン全集』第



- ⑭ 「抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針」。『毛沢東選集』第四巻
- ⑮ 「抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針」の注釈参照。『毛沢東選集』第四巻
- ⑯ 「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロンクとの談話」。『毛沢東選集』第四巻
- ⑰ 「『サンデー・タイムス』紙モスクワ駐在記者アレクサンドル・ウィルト氏に対する回答」。『ソ連対外政策（一九四六年）』
- ⑱ 「反デューリン論」
- ⑲ イタリア共産党第十回大会の「政治決議」
- ⑳ 「紅旗」一九六〇年第八号参照
- ㉑ 「レーニン全集」第三〇巻
- ㉒ 一九五〇年五月、イタリア共産党の出版した『イタリア共産党』のなかに引用されたもの
- ㉓ 「イタリア共産党第十回大会テーゼ」
- ㉔ 「労働者・兵士代表ソビエト第二回全ロシア大会」。『レーニン全集』第二六巻
- ㉕ 「平和と社会主義の諸問題」一九六〇年第八号、トドル・ジフコフの「平和——当面の決定的問題」参照
- ㉖ 一九六二年十二月三十一日づけの『ウニタ』紙「中国共産主義者の根拠のない論戦」参照

- ⑳ 「当面の国際情勢についてのいくつかの評価」。『毛沢東選集』第四巻
- ㉑ 「ブルジョアの平和主義と社会主義的平和主義」。『レーニン全集』第三三巻
- ㉒ 「各国共産党・労働者党代表者会議の声明」
- ㉓ 「レーニン全集」第一四巻

## 五、国家と革命

### トリアッチ同志のいわゆる「構造改革論」の「積極的貢献」とはなにか

トリアッチ同志らは、かれらの「構造改革」の「基本路線」を「国際共産主義運動ぜんたいの共同の路線」①であるといい、かれらの「構造改革」の論点を「当面の情勢のもとにおける労働運動と共産主義運動の世界戦略の原則にしている」②。

見うけるところ、トリアッチ同志らは「イタリアの道」をイタリアの労働者階級と勤労者にお

しつづけるばかりか、全資本主義世界の各国人民におしづけるつもりらしい。それというの、われらはじぶんたちの提起したいわゆる「イタリアの道」をもって当面の全資本主義世界の「社会主義への道」であるとしており、それもただひとつの道であつて、ほかに道がありえないかのようにならしているからである。トリアッチ同志やイタリア共産党のいちぶの同志はうぬぼれもなみはずれている。

問題をはつきりさせるため、まず、かれらの提起している「イタリアの道」とか、「構造改革」とかいうもののおもな内容を紹介してみることしよう。

一、ブルジョア独裁の国家機構を粉碎し、プロレタリアート独裁の国家機構をうちたてるといふマルクス・レーニン主義のもつとも根本的な観点は、こんにちもお完全に有効であるかどうか？ 「これは討論してよい問題である」③とかれらは考えている。「われわれは世界にすでにおこつた変化また現におこりつつある変化を考慮にいれて、あきらかにこの観点に若干の修正をくわえた」④と、かれらはいつてゐる。

二、「こんにちイタリアの労働者が直面しているのは、ロシアをやつたことをやるという問題ではない。」④これはトリアッチ同志が一九四四年四月にのべたことばであるが、イタリア共産党第十回大会の報告でも、かれはかさねてこれを「綱領的な性格をもつ」意見であるとのべてい

る。  
三、イタリアの労働者階級は、「憲法体制の枠内で、自分じしんを支配階級に組織する」⑤とができる。

四、イタリア憲法は、「労働の諸勢力にあらたな優位をあたえ」、「若干の構造改革を許し、これを規定した」⑥。「イタリアの民主主義に新しい社会主義的な内容をあたえるためのただたかいは、憲法のなかにひろびろとした発展の場所をもっている」⑥

五、「われわれはつつこんだ社会改造を実現するため合法的な手段を十分に利用し、さらには議会を利用する可能性についてさえ論議することができる」⑦。「議会に十分な権力をあたえ、立法の仕事をやらせるばかりでなく、政府の活動にたいする指導と監督の機能をもはたさせなければならず」⑧。「議会の権力を確実に経済の面まで拡大させる必要がある」⑧

六、「社会主義へむかつて前進する新しい民主主義制度をうちたてるといふことは、新しい歴史の集団を形成することと密接なつながりがある。この新しい歴史の集団は、労働者階級の指導のもとで社会構造の改革のために闘争し、しかも政治的、思想的、道徳的の革命をになうものである」⑧

七、「このもつとも立ちおくれた、もつともおもしろしいイタリアの社会構造を粉碎して、民

主主義的改造と社会主義的改造の道へすすむという仕事は、労働者階級とその同盟者が権力を奪取する日までのばしてはならないし、のばすべきでもない」⑤

八、イタリアの国有経済、つまり国家独占資本は、「独占体に対立する」⑥ことができ、「人民大衆を代表する」⑦ことができ、また、「独占資本の発展に反対するいつそう効果のある手段」⑧になることができる。国有化をつうじて、「巨大な生産諸力の独占所有制を粉碎、廃棄して、これを集団所有制にかえる」⑨ことができる。

九、国家の経済への介入は、「経済の民主的發展を保証する」⑩ことができ、「大資本の権力に反対して、大独占グループの支配を打撃し、制限し、粉碎する闘争の手段」⑪となることである。

十、資本主義制度とブルジョア独裁の条件のもとでも、「かつて社会主義に特有なものと見なされた経済の計画化と企画化の概念」⑫をうけいれることができる。労働者階級は「じぶんの団結力によつて、自己の理想と自主性を十分に実現させながら計画政策の制定と実施に参加する」⑬ことによつて、計画政策というものを「人びとと全国集団の需要を満たす手段にかえる」⑭ことができる。

要するに、トリアッチ同志らの「イタリアの道」とか、「構造改革」とかいうものは、政治の

面では、ブルジョア独裁をそのままにしておいて、ブルジョア民主主義、憲法、議会といった「合法的な手段」をつうじ、「しだいに国家の内部均衡と構造を变革し」、「新しい階級を強引に国家の指導に参加させる」⑮ことである。その「新しい階級」とはどのようなものかという点になると、かれらの説明はいつもあいまいで、はつきりしない。それはまた、経済の面では、資本主義制度をそのままにしておいて、「国有化」、「企画化」、「国家の介入」をつうじ、しだいに独占資本を「制限」し、「粉碎」することである。いいかえると、イタリアに社会主義を実現するには、プロレタリアート独裁を経る必要がなく、ブルジョア独裁を経ればよいのである。

トリアッチ同志らは、じぶんたちのこうした考え方が「労働者階級の革命学説であるマルクス・レーニン主義の深化と発展に積極的貢献をした」⑯と考えている。惜しいことに、こうした考え方はなら目あたらしいものではなくて、ひじょうに古くさい、陳腐なものであり、マルクス、エンゲルスがとつきの昔に容赦ない批判をくわえたブルジョア社会主義にはかならない。

マルクス、エンゲルスが批判したブルジョア社会主義は、独占資本主義いぜんブルジョア社会主義であった。もしもトリアッチ同志らがなにか「積極的貢献」をしたとすれば、それはけつしてマルクス主義を發展させたことではなく、まさにブルジョア社会主義を發展させたことであ

る。かれらは自由主義的ブルジョアジーの社会主義を独占ブルジョアジーの社会主義に発展させた。だが、この種の「発展」も、実際にはチトー一味が早くからもちだしていたもので、トリアッチ同志らはチトー一味の「経験」を「検討し、深く理解し」たのちこれをうけいれたものにはかならない。

### レーニン主義との比較

ブルジョア独裁が打倒されるまえ、プロレタリアート独裁がうちたてられていないときに、社会主義へ移行することができるかどうか、社会主義を実現させることができるかどうか——これはかねてからマルクス・レーニン主義者とさまざまな日和見主義者、修正主義者のあいだに論争されてきたもつとも根本的な問題である。全世界のマルクス・レーニン主義者によく知られている『国家と革命』、『プロレタリア革命と背教者カウツキー』というふたつの偉大な著作のなかで、レーニンはこのもつとも根本的な問題を全面的につつこんで解明し、革命的マルクス主義をまもり、これを発展させ、マルクス主義にたいする日和見主義者、修正主義者の歪曲を徹底的にバクロし、批判した。

実際のところ、トリアッチ同志らの「構造改革」とか、「国家の内部均衡の変革」などという

ものは、すべて、レーニンが『国家と革命』のなかで批判したカウツキーの観点にはかならない。トリアッチ同志は、「中国の同志はわれわれをおどかさうとして、われわれのまえにカウツキーをもち出してきた、だが、われわれの政策はかれの観点とのあいだになんらの共通点もない」<sup>⑩</sup>といっている。われわれははたしてトリアッチ同志らをおどかしているかどうか？ トリアッチ同志らの政策ははたしてカウツキーの観点と「なんらの共通点もない」ものかどうか？ われわれとしても、レーニンの『国家と革命』その他の著作をもつとていねいに読みかえしたまえと、「かれらに注意をうながすのを許していただきたい」ものである。

プロレタリア社会主義革命とブルジョア革命のあいだにはいったいどのような基本的な区別があるのか、トリアッチ同志らはまったくとりあおうとしない。

レーニンはつぎのようにいつている。

「社会主義革命がブルジョア革命とことなる点は、後者のばあいには資本主義的關係のできあいの形態があるが、ソビエト権力つまりプロレタリアートの権力のばあいには、こうしただきあいの諸關係がないことにある……」<sup>⑪</sup>

階級社会では、いかなる国家権力も一定の社会・経済制度、つまり一定の生産關係を保護するためのものである。まさしくレーニンがいつているとおり、「政治は経済の集中的表現である」

⑩。どのような社会、経済制度でも、かならずそれに応じた政治制度があつて、これがそれに奉仕し、その発展のための障害をとりのぞくのでなければならぬ。

これまでの歴史をみると、奴隸主、封建領主、ブルジョアジーのいずれにせよ、かれらの生産関係を支配的な生産関係にし、かれらの生産関係をうちかため、発展させるためには、どうしても自分しんを政治上の支配階級にし、国家権力をにぎる必要があつた。

搾取階級の革命とプロレタリアートの革命の根本的ならがいは、奴隸主階級、地主階級、ブルジョアジーという三大搾取階級のばあいは、かれらが権力をにぎるまえから、すでに奴隸制的生産関係、封建制的生産関係、資本主義的生産関係が社会にうまれており、なかにはかなり成熟させしていたものもあつたのになし、プロレタリアートが権力をかちとるまえには、まだできないの社会主義的生産関係が社会にうまれていないことである。道理ははつきりしている。新しい私有制は旧い私有制の基礎のうえに自然成長的にうまれうるが、生産手段の社会主義的共有制が資本主義的私有制の基礎のうえに自然成長的にうまれることは永遠にありえないのである。

トリアッチ同志らの考え方と綱領をレーニン主義とくらべてみよう。

トリアッチ同志らは、レーニン主義に反して、社会主義革命やプロレタリアートの権力がなくとも、社会主義的生産関係をしだいに出現させることができると考えており、また、プロレタリ

アード独裁をブルジョア独裁におきかえる政治革命を経なくてもプロレタリアートの基本的経済利益を満足することができると考えている。トリアッチ同志らの「イタリアの道」とか、「構造改革論」とかというものは、ここから出発しているものにはかならない。

いったい、マルクス、エンゲルス、レーニンが正しいのか、それともトリアッチ同志らが正しいのか？ いったい、マルクス・レーニン主義者が「現実的な感覚に欠けている」のか、それともトリアッチ同志らの考え方と綱領が「現実的な感覚に欠けている」のか？

われわれはイタリアの現実をみることにしよう。

イタリアは五〇〇〇万の人口をもつ国である。統計によると、平時、この国には、数十万人の官吏、四〇余万人の軍隊、八万人ちかい憲兵、ほぼ一〇万人の警察のほか、各級の裁判所が二〇〇あまり、刑務所が一〇〇〇ちかくある。秘密的な弾圧機構や武装人員はこのなかにふくまれていない。なおこのほかに、イタリアにはまたアメリカの軍事基地があり、アメリカの駐屯軍がいる。

トリアッチ同志らは、かれらのテーゼのなかでイタリアの民主主義、憲法、議会等々といったものについては興味津々たる調子でのべたてているが、イタリアの現有の軍隊、憲兵、警察、裁判所、刑務所といった暴力の手段にたいしては階級的な分析をくわえようとしていない。これら

暴力の手段は、いつたいだれを保護し、だれを弾圧するものなのか？ プロレタリアートその他の勤労者を保護し、独占ブルジョアジーを弾圧するものなのか？ それとも、独占ブルジョアジーを保護し、プロレタリアートその他の勤労者を弾圧するものなのか？ マルクス・レーニン主義者ならだれしも、国家の制度を論ずるばあい、かならずこの問題に回答しなければならず、けつしてこれを回避すべきではない。

それではイタリアのこれら暴力の手段はいつたいなにをしているのか、さらにこの点を見てみることにしよう。ここでは、二、三の例をあげるにとどめる。

一九四八年から一九五〇年までの三年間、イタリア政府は人民大衆の反抗を弾圧したさい、三〇〇〇余人を殺傷し、九万余人を逮捕した。

一九六〇年七月、タンブローニ政府はイタリア勤労者の反ファッシヨ運動を弾圧したさい、一人を殺害し、一〇〇〇余人を傷つけ、一〇〇〇余人を逮捕した。

一九六二年、ファン・ファーニのいわゆる「中道左派」政府が成立してのち、五月にはツェカノ、七月にはトリノ、八月にはバリ、十月にはミラノ、十一月にはローマで、政府が大衆のストとデモを弾圧する事件がつづきさまにおこり、ローマの事件だけでも、数十人が負傷し、六〇〇〇余人が逮捕された。

ここにあげたのはいくつかの例にすぎないが、それでも、「イタリアの民主主義」とはいつたいどのような民主主義であるかがあますところなくバクロされているではないか？ イタリアには、人民を弾圧するための公然、または秘密裏の強力な国家機構がつくられている。そこで、「イタリアの民主主義」というものがイタリア独占ブルジョアジーの民主主義、つまりイタリア独占ブルジョアジーの独裁でないとはたしていえるだろうか？

トリアッチ同志らが吹聴している「イタリアの民主主義」制度のもとで、はたして、イタリアの労働者階級その他の勤労者はイタリア政府の対内対外政策の制定に参加することができるだろうか？ トリアッチ同志らは、もし参加できると考えるのなら、いまのイタリア政府が人民を弾圧しているさまざまな犯罪行為に、諸君は責任をもつことができるのかどうか？ アメリカがイタリアに軍事基地を設けることをイタリア政府がゆるし、イタリアが北大西洋条約機構に参加しているなどといった行為に、諸君は責任をもつことができるのかどうか？ もちろん、諸君は、イタリア政府のこうした対内対外の反動政策に責任をもつことができないというだろう。だが、諸君は政策の制定に参加できるといいながら、いまのイタリア政府のこうしたもつとも根本的な政策をいささかも変えることができないというのの一体どうしたことなのか？

民主主義の階級的性格をすこしも區別せず、ただばく然と「民主主義」を吹聴するのは、第二、

インターナショナルの英雄たちと右翼社会民主党の指導者たちがいいふるしてきたセリフである。ところが、いま、みずから「マルクス・レーニン主義者」と名のるいちぶのものがこうした古くさいセリフをじぶんの『新しい創作』とみなしているということ、これはまことに奇怪じくくなことではないか？

トリアッチ同志は自己と社会主義者とのあいだにかすかな境界線をひこうと考えているのかもしれない。かれの考えによると、「抽象的な道理」からいえば、国家の階級的な性格をみとめることができ、いまのイタリアもブルジョア国家であると認めることができる、だが、「道理を具体的にいえば」、それはまったく別問題である。「具体的な道理」からいうと、「いまの国家構造から出発して」、「憲法の定めるつごんだ改革を実現」すれば、「当面の権力グループを改組して、勤労階級が参加し、かれらがしかるべき機能をはたすようなあらたなグループを形成するための条件をつくりだし」、イタリアを「民主主義と平和のなかで社会主義にむかわ」<sup>⑭</sup>せることができる、というのである。トリアッチ同志のこうしたあいまいなことは誰でもわかるようなことばに翻訳すると、イタリア人民が革命をやらなくても、イタリア独占ブルジョアジーの国家機構にしたいに「質的な変化」をおこさせることができる、ということになる。

トリアッチ同志の「具体的な道理」はかれ自身の「抽象的な道理」に反対している。かれは

「抽象的な道理」を語るときには、ややマルクス・レーニン主義にちかづくが、「具体的な道理」を語るときには、マルクス・レーニン主義からはるかに離れてしまう。おそらく、こうしてこそはじめて、「教条主義」とよばれないですむとでもかれは考えているのであろう。

トリアッチ同志らの「具体的な道理」から判断すると、かれらと社会民主党のあいだのかすかな境界線さえ見えなくなってしまう。

いちぶの人びとが国家と革命についてのマルクス・レーニン主義の学説を極力ふみにじっているこんにち、現代修正主義者がレーニンの名をかりてレーニン主義に狂気じみた攻撃をくわえているこんにち、われわれは、レーニンが一九一九年コミンテルン第一回大会でのべたつぎの二節のことばを読んでみるよう、人びとにすすめたいと思う。

「社会主義者が理解していない肝心なこと、かれらが理論的に近視であり、ブルジョアの偏見にとらわれており、プロレタリアートを政治的に裏切っている点は、資本主義社会では、その基礎にある階級闘争がいくぶんともいちじるしく激化するばあいには、ブルジョアジーの独裁か、あるいはプロレタリアートの独裁以外に、中間的なものはありえない、ということである。なか第三のものを夢みるのは、すべて小ブルジョアの反動的な悲嘆である。あらゆる先進国におけるブルジョア民主主義と労働運動との一〇〇年以上の経験も、とくに最近の五カ年の経験も、こ

のことを立証している。また経済科学全体もそれをかたつており、マルクス主義の全内容もそれをかたつてゐる。このマルクス主義は、およそ商品経済のもとではブルジョアジーの独裁が経済的に避けられないこと、資本主義の発展そのものによつて発展させられ、増加し、団結させられ、強化される階級、すなわちプロレタリア階級以外には、だれもこの独裁にとつて代わるものはないことを、あきらかにしている。」

「社会主義者のもう一つの理論的ならびに政治的な誤りは、古代に民主主義が芽ばえて以来、数千年のあいだに、ある支配階級が他の支配階級と交代するにつれて、民主主義の諸形態も不可避免的に交代してきたことを、理解していない点にある。ギリシアの古代共和国と、中世の都市と、先進的な資本主義諸国とでは、民主主義はちがった形態をもつており、その適用の度合いがちがつてゐる。人類の歴史上でもっとも深刻な革命、すなわち世界ではじめて権力が少数の搾取者の手から多数の被搾取者の手にうつるといふようなことが、古いブルジョア議會主義的民主主義の古い枠のなかでおこなわれうるなどと考え、きわめて急激な転換なしに、民主主義の新しい諸形態、民主主義の新しい適用条件を体现する新しい諸機関等々をつくりだすことなしにも、それがおこなわれうるなどと考えるなら、このうえないばかげたことであろう。」<sup>⑮</sup>

見ていただきたい、レーニンはこので、マルクス主義の全学説、資本主義社会の階級闘争の全

経験、十月革命の全経験にもとづいて、このように明確な、このように肯定的な結論をだしたのである。ブルジョア議會主義的民主主義の古い枠のなかでは、ブルジョアジーの手からプロレタリアートの手に権力をうつすことはできないし、社会主義革命という人類史上もつともつこんだ革命を実現することはできない、というのがレーニンの考えであつた。一九一九年、レーニンがこう言つてから今日まで、世界でつぎつぎに社会主義革命のおきた国の経験はすべて、レーニンがあきらかにしたこれらの具体的な真理をくりかえし立証してゐるではないか？ これらの経験はすべて、レーニンが指導した十月革命の道が人類解放の共同の道であることをくりかえし立証してゐるではないか？

一九五七年のモスクワ宣言と一九六〇年のモスクワ声明は、各国の労働者階級が社会主義へすすむ共同の道をかさねて明らかにしてゐるではないか？ もちろん、各国の労働者階級が平和な方式によるか平和でない方式によるかは、「反動集団が圧倒的多数の人民の意志にどこまで抵抗するか、社会主義をめざす闘争のあれこれの段階でそうした集団が暴力をつかうかどうかによつて左右される」<sup>⑯</sup>。だが、どちらの方式をとるにしても、ブルジョアジーの古い国家機構を粉砕しなければならず、プロレタリアート独裁をうちたてなければならぬ。

トリアッチ同志らは、プロレタリアートの革命闘争の経験から出発するのでもなければ、イタ



リアの現実の社会生活から出発するのではなく、イタリアのいまの憲法から出発して、イタリアは古い国家機構を粉砕しなくても、ブルジョア議会主義的民主主義の枠のなかで社会主義を実現することができる、と考えている。かれらが「新しい民主主義の制度」といつているものは、ブルジョア民主主義の「拡大」にはかならない。かれらの「具体的な道理」というものがマルクス・レーニン主義の具体的な真理とかくも異なっているのは、なにも不思議なことではない。

#### 奇妙きつな憲法

イタリア共産党第十回大会のテーゼには、「イタリアの社会主義への道は、憲法の定める新しい国家の樹立（この新しい国家はいまの制度と大いに異なる）」と、あらたな指導階級のこの国家指導への参与を経るものである」⑥と書いてある。

トリアッチ同志らの論法によると、イタリアの憲法はまったくもって奇妙きつな憲法である。

- 一、共和国の憲法は、「イタリアの大多数の人民が自発的にむすんだ団結の契約である」⑤
- 二、共和国の憲法は、「社会主義の標識をもいくつかの根本的改革」⑦を規定している。
- 三、共和国の憲法は、「主権在民の原則を確認している」⑧

四、共和国の憲法は、「国家権力の『基礎を労働におく』ことを宣言し」⑩、「労働の諸勢力にあらたな優位をあたえている。」⑪

五、共和国の憲法は、「勤労者が国家の指導にくわわる権利を享有する」⑫ことをみとめている。

六、共和国の憲法は、「わが国の社会を革新しこれを社会主義へおしすすめるために必要な政治的、経済的変革をおこなわなければならないことを確認している」⑬

七、共和国の憲法は、「民主主義的な法秩序の枠内で社会主義へすすむ原則の問題」⑭をすでに解決した。

八、イタリアの人民は、「憲法を完全にうけいれ、これを守るといふ状況のもとで、国家の階級の本質と階級的目的に反対することができる」⑮

九、イタリアの労働者階級は、「憲法体制の枠内で、自分しんを支配階級に組織する」⑯ことができる。

十、「共和国の憲法を遵守し、擁護し、完全に実施することは、党の全政治綱領の中軸である」⑰

もちろん、われわれはイタリアのいまの憲法のなかにいくらかの美辞麗句があることを決して

否定しはしない。だが、マルクス・レーニン主義者ともあろうものが、ブルジョア憲法に書かれている一部の美辞麗句を真実の生活であるなどと思ひこむことができるだろうか？

イタリアのいまの憲法はぜんぶで一三九カ条からなる。だが、なんといつても、この憲法の階級の本質をもつともよくしめすものは、やはり「私有財産を法律によつてみとめ、保護する」という第四十二条の規定である。イタリアの現実からすれば、この規定は、独占ブルジョアジーの私有財産を保護するものにほかならない。憲法にこの規定があれば、独占ブルジョアジーの要求はみたされ、かれらの私有財産は神聖で犯すことのできないものとなる。イタリア憲法のこの実質をおおいかくし、この憲法をことばのかぎりかぎりたてること、それは自己をあざむき、人をあざむくだけのことである。

トリアッチ同志らは、イタリア憲法には「勤労者階級の参与した標識がある」といい、この憲法は「主権在民の原則を確認し」、「勤労者の若干のあらたな権利を認めている」⑥といつてゐる。だが、トリアッチ同志らはこの「原則」とか「あらたな権利」というものについて語るさい、どうしてイタリア憲法を他のブルジョア憲法と比較してから論断をくださないのであろうか？

「主権在民」というのは、一七八九年、フランスのブルジョア革命で「人権宣言」が発表され

ていらい、ほとんどすべてのブルジョア憲法にこの条項があるのであつて、なにもイタリア憲法に特有なものではない、ということを知つておくべきである。「主権在民」のスローガンは、もとブルジョアジーが封建君主の「朕は国家なり」に反対する革命的スローガンであつた。ところが、ブルジョアジーが自己の支配を確立すると、ブルジョア憲法のこの条項はもはやブルジョア独裁をおおいかくす空文になつてしまつたのである。

また、「公民の自由権」にかんする条文も、ただイタリアの憲法にだけあるのではないことを、知つておくべきである。こうした条文はほとんどすべての資本主義国の憲法にある。だが、ある憲法は、公民の自由権を規定したすぐそのあとにこの権利を制限または取り消す規定をもっている。マルクスが一八四八年のフランス憲法を評しているように、「あらゆる条項には逆の面があつて、その条項じしんが完全に取り消されている」⑨のである。また、ある憲法は、各条項のすぐあとにこうした制限または取り消しの規定をもうけてはいないが、ブルジョア政府が他の方法や手段をもちいてこうした目的をとげることができる。このうち、イタリア憲法は前者に属する、つまり、赤裸々なブルジョア憲法であつて、「基本的に社会主義的精神をもつ」⑩憲法などとはまったくいえないものである。

レーニンには、「法律と現実とがくいちがつているときには、憲法は擬制であり、法律と現実と

が一致しているときには、憲法は擬制でない」<sup>②</sup>といったことがある。イタリアのいまの憲法は、まさしく「擬制」の面と「擬制でない」面の二重の性格をもっている。「擬制でない」というのは、ブルジョアジーの利益をおおつびらに保護するという実質的なものであり、「擬制」というのは、人民をあざむくためにつかわれている美辞麗句のことである。

トリアッチ同志は、一九四八年一月のイタリア共産党第六回大会でつぎのようにいつたことがある。

「わが国の政治の前途ないし憲法の前途は不確定なものである。それというのも、憲法の一部に依拠する進歩勢力と、憲法の他の部分を抵抗の武器とする保守反動勢力とのあいだに、重大な衝突のおこることが予想されるからである。したがって、『いま、憲法には何もかも書いてある。われわれがこの憲法の規定を実現したあかつきには、人民の願いはすべて実現する』というようなことを言うだけなら、重大な政治的誤りであり、人民をあざむくことになる。こうした論法はまちがっている。もしも自由をまもる公民の自覚、公民の力、反動派のいかなる陰謀をもくいとめる公民の能力がないなら、いかなる憲法も自由を救うことはできない。もしも勤労大衆のなかの組織された、意識のたかい勢力が全国人民を指導して民主主義的進歩、社会進歩の道へとすすませ、反動勢力の反抗を粉碎することができないなら、いかなる憲法の規範も、われわれの

こうした進歩を保障することはできない」

一九四八年にこういうことを言ったときには、トリアッチ同志はまだいくらかマルクス・レーニン主義の観点をもっていたのであろう、かれはイタリア政治の前途と憲法の前途が不確定であることを認め、イタリア憲法には保守反動勢力も利用できるし、進歩勢力も利用できるという二重の性格があることを認めている。当時のかれは、イタリア憲法にたいする盲信を「重大な政治的誤りであり、人民をあざむくことになる」と考えていた。

一九五五年一月、トリアッチ同志はまたある演説のなかで、「はつきりしていることは、わが国の憲法には、政治的綱領であるばかりでなく、経済的、社会的綱領でもあるような、基本的に社会主義的精神をもつ綱領の路線がふくまれていることである」<sup>②</sup>とのべた。つまり、トリアッチ同志はこのときすでに、イタリア憲法を「基本的に社会主義的精神をもつ」憲法とみなしていたのである。

こうして、一九五五年のトリアッチは一九四八年のトリアッチに反対するようになった。

このときくらい、トリアッチ同志は急転直下、イタリア憲法をまったく神聖視するようになる。

一九六〇年、トリアッチ同志はイタリア共産党第九回大会の報告のなかで、つぎのようにのべ

た。「われわれは憲法の枠のなかで行動する、そして、われわれが権力をにぎったらなにをするのかとたずねるすべての人びとには、憲法を見ていただくこととしたい。『必要な構造改革をおこなって、独占グループの権力を打倒し、勤労者せんたいの利益を経済と金融の寡頭からまもり、これらの寡頭を権力から排除し、勤労階級を権力にくわらせるといふことは、憲法的法秩序に完全になつた状況のもとでも』可能であるということ、われわれはこういうことを『綱領声明』のなかでも書いたが、いままう一度のべておきたい。つまり、トリアッチ同志は、イタリアの労働者階級その他の勤労者がブルジョア憲法にまったく合致する範囲内で活動をおこなう、ブルジョア憲法をよりどころにして「独占グループの権力を打倒する」ことを要求しているのである。

一九六二年、イタリア共産党第十回大会で、トリアッチ同志とイタリア共産党のいちぶの同志は、この意見が「確固不動のもの」であることをかきねて明らかにした。かれらは、「イタリアの社会主義への道」は、「憲法の定める新しい国家の樹立と、あらたな指導階級のこの国家指導への参与を経る」⑥ものでなければならず、「憲法にしたがつて国家の変革を要求し、これを強引におこない、国家の内部であらたな実力ある地位を獲得し、社会の社会主義的改造をおしすすめる」⑥ものでなければならず、「憲法的法秩序になつた条件のもとで、イタリアの社会主義

的改造を実現することができるとする社会政治集団」⑥を形づくるものでなければならぬ、といつてゐる。かれらはまた、「憲法を完全にうけいれ、これを擁護するという状況のもとで、国家の階級の本質と階級的目的に反対し、広はんな協動的な行動をとつて、国家を社会主義へむかつて発展できる進歩的民主主義の道へおしあげる」⑧とも言つてゐる。

要するに、トリアッチ同志らはイタリアのブルジョア憲法の枠内で「社会主義を実現し」ようとしていたのであつて、つぎのようなことはすつかり忘れてゐる。たとえイタリア憲法のなかにいくつか美辭麗句をつらねた条文があるとしても、独占ブルジョアジーが国家機構をにぎり、独占ブルジョアジーが完全に武装してゐるこのような条件のもとでは、かれらは自己の必要におうじて、機会さえあれば、憲法をホゴ同然と宣言することができるということ、トリアッチ同志らはこのことをすつかり忘れてしまつてゐるのである。

マルクス・レーニン主義者はブルジョア憲法の擬制的性格をバクロする必要があるとともに、ブルジョア憲法のいちぶの利用できる条文をブルジョアジーに反対する武器にすべきである。ふつうのばあい、ブルジョア憲法を利用しておこなう合法的な闘争をこばむなら、それは誤りであつて、レーニンのいう「左翼主義」小児病である。だが、ブルジョア憲法を盲信せよと共産党員や人民によびかけ、ブルジョア憲法は人民に社会主義をあたえうると宣伝し、ブルジョア憲

法を遵守し、擁護し、完全に実施することを「党の全政治綱領の中軸」⑤だなどというのは、これはたんに「小児病」などではなくて、すでにレーニンがいうように、精神のうえでブルジョアの偏見のとりこになっているのである。

#### 現代の「議会議主義的クレチン病」

トリアッチ同志やイタリア共産党のいちぶの同志も、社会主義を実現するには闘争が必要であり、闘争を経なければならぬことを認めている。だが、かれらは人民の闘争をブルジョア憲法のゆるす範囲内に制限し、議会の役割をもつとも重要な地位においている。

トリアッチ同志は、いまのイタリア憲法の成立の事情を説明するにあたって、つぎのようにいつている。「これは、共産主義者が一九四六年、法秩序を破壊してしやにむに権力をうばおうとする道ですて、制憲議会に参加する道をえらんだためである」⑦と。

トリアッチ同志はこのようにして、「議会の道」をイタリアの労働者階級その他の勤労者が「社会主義へむかつてすすむ道」としたのである。

多年らひ、トリアッチ同志らはいくらかえしつぎのように強調してきた。

「こんにち、民主主義的法制の形態、さらには議会の形態さえも利用して社会主義へ前進しう

るといふ論点が普遍的に提起されている」⑧。「この論点は、一九四四年から一九四六年までのわれわれの論点である」⑨。

「議会の道をとつて社会主義へ移行することができる」⑩と。

ここで、われわれがトリアッチ同志らと討論したいのは、議会の形態を利用して社会主義へ移行できるかどうかという問題である。

まず、問題をはつきりさせておかなければならない。われわれはゆらい、議会闘争への参加を労働者階級が一定の条件のもとで利用すべき合法的な闘争手段のひとつと考えている。議会闘争を利用すべきときにこれを利用するのをこぼみ、革命の児戯をもてあそび、革命の空談をもてあそぶのは、マルクス・レーニン主義者がだんこ反対するところである。この問題では、レーニンが「共産主義内の『左翼主義』小児病」のなかでのべた理論全体を、われわれは一貫して堅持してきた。ところが、あるひとはわれわれの観点をわざとまげて解釈し、われわれが議会闘争の必要性を一概に否定しているとか、革命の発展がまがりくねつたものであることを否定しているとか、われわれが各国人民の革命はある晴れた朝とつぜんやつてくると考えているとかと言っている。なかには、トリアッチ同志がことしの一月十日、われわれに答えた文章のなかでのべているように、まるでわれわれがイタリア共産党の同志に、「革命の偉大な瞬間の到来を宣伝し、待ち

うけることだけにとどめる」ようすすめたかのように言うものもある。このように相手の論点をゆがめる方法で問題を討論するのは、最近の一時期、「マルクス・レーニン主義者」と自任する人びとが中国の共産主義者に立ちむかうばあいのもつとも得意な手口となっているようである。それでは、ブルジョア議会に対処するという問題で、われわれとトリアッチ同志らとの意見の相違はいつたどこにあるのだろうか？

まず第一に、われわれは、いまのイタリア議会をもふくめ、ブルジョア議会はすべて階級性をもち、ブルジョア独裁の装飾品である、と考えている。レーニンがのべているように、「アメリカからスイスにいたり、フランスからイギリス、ノルウェーその他にいたる、どの議会主義国でもよいから一瞥してみたまえ。真の『国家』活動は舞台裏でおこなわれ、各省や官房や参謀本部が遂行している」<sup>②</sup>。ブルジョアジーの「民主主義が発達していればいるほど、ますます取引所や銀行家がブルジョア議会をじぶんに従属させている」<sup>③</sup>のである。

つぎに、われわれは、議会闘争を利用することを主張するが、「議会主義的クレチン病」の幻想をまきちらすことには反対する。やはりレーニンがのべているように、労働者階級の政党は「議会闘争の利用と議会への参加を支持するが、『議会主義的クレチン病』、すなわち、議会闘争は政治闘争の唯一の形態、あるいはどのような条件のもとでもその主要な形態であるという信念に

たいしてはこれを容赦なく暴露する」<sup>④</sup>のである。

さらに、われわれは、ブルジョア議会の演壇を利用してブルジョア社会のはれものをあばき、ブルジョア議会の欺瞞性をあばくことを主張している。ブルジョアジーは自己の利益を考慮して、ある一定の条件のもとではこれらの議会のなかに労働者階級の政党の代表をうけいれるが、同時にまた、こうした方法で労働者のいちぶの代表や労働者のいちぶの指導者をあざむき、墮落させ、買収しようとするにわたっている。したがって、議会闘争をすすめるさい、労働者階級の政党は警戒心を高め、いついかなるときにも自己の政治的独立性を堅持しなければならない。

以上にのべた三つの問題で、トリアッチ同志らはレーニン主義の観点をまったく投げ捨ててしまっている。かれらは議会を超階級的なものと思、なんの根拠もなしにブルジョア議会の役割を買いかぶり、議会をイタリアで社会主義を実現する唯一の道であるかのように見なしている。

トリアッチ同志らは、イタリアの議会にすっかり取りつかれてしまっている。

トリアッチ同志らは、「公正な選挙法」とかいうものができて、「議会のなかに人民の意志にかなった多数が形成され」<sup>⑤</sup>れば、「つっこんだ社会改革を遂行し」<sup>⑥</sup>、「当面の生産関係を改革し、ひいては、大財産所有制度をも改革する」<sup>⑦</sup>ことができる、と考えている。

事態ははたしてそうなるだろうか？

いな、事態はつぎのように発展するのみである。ブルジョアジーの軍事的官僚的国家機構のこざれている条件のもとでは、プロレタリアートとそのたよりになる同盟者は、一般的な状況のもとでは、ブルジョア選挙法によつて議会における多数を獲得しようとしても、それは不可能であるか、まったくあてにならない。第二次世界大戦後、多くの資本主義国では、共産党、労働者党が議会のなかで議席をもっており、ある党などかなり多くの議席をもっている。だが、ブルジョアジーはいつも選挙の無効を宣告するとか、議会を解散するとか、選挙法や憲法を改正するとか、共産党の非合法を宣告するとか、さまざまな手段をとつて、共産党の議員が議会で多数になるのをゆるさなかつた。第二次世界大戦後、フランス共産党はかなり長いあいだ圧倒的多数の得票をかちとり、議会のなかでも第一党だつた。しかし独占ブルジョアジーが選挙法改正や憲法改正の手段をとつてのち、フランス共産党は多くの議席を奪われてしまったのである。

労働者階級は選挙の得票だけによつて支配階級になれるだろうか？ 歴史上、いかなる被抑圧階級も得票によつて支配階級になつたためしはない。ブルジョアジーは議会民主主義や選挙制度を宣伝しているが、しかし、どの国のブルジョアジーも封建領主にかわつて支配階級になつたのは得票によつたのではなかつた。プロレタリアートが支配階級になるには、なおさら得票によつたわけにゆかない。レーニンが「イタリア、フランス、ドイツの共産主義者へのあいさつ」と

いう文章のなかでのべているように、「プロレタリアートは、ブルジョアジーの圧制のもとで、賃金奴隷制のもとでおこなわれる投票で、まずもつとも多数を獲得してから、はじめて権力を獲得するようにしなければならない、などと考えることは、ならず者か、ばか者でなければやれないことである。これは、愚鈍でなければ偽善の骨頂である。これは、階級闘争と革命を、旧制度のもとでの、旧権力のもとでの投票にかえることである。」<sup>②⑥</sup>

歴史がわれわれに教えているように、「労働者政党」がプロレタリアートの革命綱領をなげ捨て、ブルジョアジーの付属物になりさがり、ブルジョアジーの御用政党に身をおとすときには、ブルジョアジーもこのような党が議会内でいちじ多数の議席をしめ、政府を組織することをゆるすこともある。たとえば、イギリス労働党がそうであるし、また社会主義の革命綱領を裏切つたいくつかの国の社会民主党もそうである。だが、これではブルジョア独裁を擁護し強化するだけであつて、プロレタリアートの抑圧され搾取されている地位はいささかも変えることができない。イギリス労働党は一九二四年くらい三度も政権をにぎつたが、帝国主義のイギリスは依然として帝国主義のイギリスであり、イギリス労働者階級の無権利状態は依然として無権利状態のままである。われわれはたずねたい、トリアッチ同志はイギリス労働党や各国の社会民主党の後塵を拝するつもりなのかどうか？

イタリア共産党第十回大会のテーゼには、議会に立法をおこない、政府の活動を指導し監督する十分な権力をあたえるべきである、とのべてある。われわれにわからないのは、イタリア共産党のいちぶの指導者があこがれているこのような議会の権力をいつたい誰があたえるのか、ブルジョアジーがあたえるのか、それともトリアッチ同志らがあたえるのかということである。実際には、ブルジョア議会の権力はブルジョアジーがあたえる。ブルジョアジーが議会にどれだけの権力をあたえるかは、ブルジョアジー自身の利益によつて左右される。そして、ブルジョアジーが議会にどれほど大きな権力をあたえても、議会はけつしてブルジョア国家の眞の権力機関にはなりえない。ブルジョアジーが人民を支配する眞の権力機関は、ブルジョアジーの官僚機構と軍事組織であつて、ブルジョア議会ではない。

共産主義者ともあろうものがプロレタリア革命とプロレタリアート独裁の道を放棄し、ただ投票をつうじてブルジョア議会の多数をしめることに望みをかけ、国家指導の権力をあたえられるのを待つだけであるなら、いつたいカウツキーの議会の道とどんな区別があるだろうか？ カウツキーは、「われわれの政治闘争の目標は、これまでと同様、議会内の多数をしめることによつて国家権力をうばいとり、議会を政府の主人にすることである」<sup>①</sup>といつた。レーニンがカウツキーの道を批判して、「これはもう、純然たる、卑俗きわまる日和見主義である」<sup>②</sup>といつてい

る。

一九五六年三月、トリアッチ同志は合法的手段と議会を利用する問題にふれたとき、つぎのようなことをいつた。「われわれがいまやっていることは、三十年まえなら、正しくもないし、できもしなかつたらう、当時のわれわれの言いかたでは純然たる日和見主義ということになつたらう」<sup>③</sup>

三十年まえには正しくもなく、できもしなかつたことが、いまでは正しくもあり、できるようにもなつたという——いつたいどんな根拠があつてそんなふうにいえるのか？ いぜんは純然たる日和見主義だったものが、いまはとつぜん純然たるマルクス・レーニン主義になつたという——いつたいどんな根拠があつてそんなふうにいえるのか？ トリアッチ同志のことは、事実上、いまかれらの歩んでいる道がいぜん日和見主義者のあゆんだ道とおなじであることを認めたものにはかならない。

ところが、かれらのあゆんでいるのは議会の道だと指摘されると、トリアッチ同志は一九五六年六月にこんどは言いかたをかえて、「社会主義への発展のイタリアの道は議会の道を意味し、それ以外のなものでもない——疑いもなくそれが平和な事からであるかのようによつて」と言う同志がいるが、わたしはこうした同志のことを訂正しておきたい。これは眞実ではない」<sup>④</sup>とい



つてゐる。かれはまた、「この闘争を議会の選挙闘争と五一パーセントの得票を期待するところまでひきさげるのは、幼稚であるばかりか、幻想でもある」④といつてゐる。トリアッチ同志は、じぶんたちは「役割をはたす議会がなければならぬ」⑤と主張してゐるばかりでなく、「大規模な大衆運動」⑥もなければならぬと主張してゐるのだと言はつてゐる。

「大規模な大衆運動」を要求してゐるとは、結構なことである。マルクス・レーニン主義者たるものは、当然、これをよるこばねばならない。同時にまた、いまイタリアではかなりの規模をもつた大衆運動がおこなわれており、イタリア共産党はこの面の活動で成果をあげてゐることも認めねばならない。だが残念なのは、トリアッチ同志がただ議会というこの枠からしか大衆運動を見てゐないことである。大衆運動をくりひろげて、「全国で要求をだしたのち、人民の勢力が十分に強大な代表権をもつ議会によつて、これらの要求を満足させることができる」⑧—トリアッチ同志はそう考へてゐるのである。

大衆が要求を出し、議会がそれを満足させる——これが、トリアッチ同志の大衆運動の公式にはかならない。

マルクス・レーニン主義の戦術問題についての根本原理というのは、あらゆる大衆運動のなかで、また議会闘争のなかでも、プロレタリアートの政治的独立性を保持し、プロレタリアートと

ブルジョアジーのあいだに一線をひき、運動の目前の利益を将来の利益とむすびつけ、当面の運動を労働者階級の闘争の全過程、究極目標につながらせることである。もしこの原理を忘れたら、この原理にそむいたりすれば、ベルンシュタイン主義の泥沼におちいり、実際には「運動がすべてで、目標はない」という悪名たかい公式をうけいれることになる。ではたずねたい、トリアッチ同志の大衆運動の公式は、いつたいベルンシュタインの公式とどんな違いがあるのか？

### 国家独占資本は「独占資本の発展に反対するいつそう効果的な手段」になりうるか

イタリア共産党のおもな指導者のひとりであるルイジ・ロンゴ同志は、一九六三年一月四日、中国の『人民日報』社説にこたえる文章のなかで、つぎのようにのべてゐる。「われわれの第十回大会もつぎのようなことを力づくよく再確認してゐる。われわれが社会主義へのイタリアの道とよぶものの確固不動の一点は、当面の国際的、国内的諸条件のもとでは、資本主義制度がひきつづき存在するとしても、こんにちすでに独占体とその経済的政治的権力を排除することが可能であり、必要であるということを確認することである」と。かれらの制定した方法によつて、イタリアの当面の資本主義的生産関係を変え、イタリアの独占ブルジョアジーの「大財産所有制度」を変へることができる、というのがかれらの考へである。

トリアッチ同志らのことばによると、かれらの制定した「構造改革論」の経済面における措置は、「いちぶの国有化の要求、企画化の要求、経済の民主主義的發展を保証するための国家介入の要求など」②を実現させることであり、「企画化、さらには若干生産部門の全般的国有化などをつうじて、経済にたいする国家の直接の介入を拡大する」③ことである。

おそらく、トリアッチ同志らは、まだもつと多くの方法を考え出すであらう。

もちろん、トリアッチ同志らはなんでも考えたり、話したりする権利がある。だれも干渉する権利はないし、われわれも干渉しようとは思わない。だが、かれらが他人にもかれらとおなじように考えたり、話したりすることを要求している以上、われわれもかれらがち出したこれらの問題について討論をつづけたいわけにはいかない。

まず、国家が経済に介入する問題からのべることにしよう。

国家がうまれていろいろ、奴隷主の国家、封建領主の国家、ブルジョア国家などさまざまな性質の国家のうちで、経済に介入しなかったような国家はたしてあったらどうか？ これらの階級が上昇期にあるときは、経済にたいする国家の介入はある形態をとり、これらの階級が没落期にあるときは、経済にたいする国家の介入はまた別の形態をとる。おなじ性質の国家であっても、国がちがえば、経済にたいする介入の形態もちがってくる。ここでは、奴隷主の国家がどのよう

に経済に介入したか、封建領主の国家がどのように経済に介入したかについてはしばらくふれず、ただブルジョア国家の経済介入だけについてのべることにしよう。

ブルジョア国家がすすめている政策、たとえば、植民地争奪の政策、世界制覇の政策、自由貿易の政策、あるいは保護関税の政策等々、これらはすべてブルジョア国家がブルジョアジーの利益をまもるために早くからすすめている、国家の経済への介入である。このような国家の介入は、資本主義の発展にたいしてきわめて大きな役割をはたした。だから、国家の経済への介入は、なにもいまのイタリアにはじめてあらわれた目あたらしい事ではない。

トリアッチ同志らのいう「国家の経済への介入」とは、上にのべたような、ブルジョアジーが早くからおこなってきた政策ではなく、おもにかれらのいう「国有化」をさしているのかもしれない。

それならば「国有化」の問題についてのべることにしよう。

実際には、奴隷制社会いろいろ、さまざまな性質の国家にはすべて、それぞれが「国有化経済」があつた。奴隷主の国家にもその国有化経済があつたし、封建領主の国家にもその国有化経済があつた、ブルジョア国家には誕生したときからすでにその国有化経済があつた。したがって、問題は、国有化の性質をはつきりさせること、それがどの階級の国有化であるかをはつきり

させることである。

トリアッチ同志のような古顔の共産主義者ともなれば、エンゲルスが「空想から科学への社会主義の発展」のなかでつぎのようなことを言っているのを、もちろん知らないはずはないだろう。

「いずれにせよ、トラストがあろうとなかろうと、けつきよく資本主義社会の公の代表者である国家が生産の管理をひきうける必要がある。この国有化の必要は、なによりもまず、大規模な交通施設、すなわち郵便、電信、鉄道の場合にあらわれる」<sup>28</sup>

この一節に、エンゲルスはひじょうに重要な注釈をくわえている。

「私は、必要がある、という。なぜなら、生産交通手段が実際に株式会社の管理の手におえないまでに発達し、したがって国有化が経済上さけられなくなった場合にだけ、国有化は、たとえこんにちの国家がこれをおこなったとしても、ひとつの経済上の進歩を、すなわち社会そのものによるいつさいの生産力の掌握にいたるひとつのあらたな前段階の達成を意味するからである。ところが最近、ビスマルクが国営に身をいれだしてから、あらゆる国営を、ビスマルクのそれさえも、文句なく社会主義的であると宣言する、一種のニセ社会主義があらわれ、しかもあちこちで太鼓もち気味にさえなりはてている。実際、タバコの国営が社会主義的であるなら、ナポ

レオンやメッテルニヒは社会主義の元祖のうちにかぞえられるだろう。ベルギー国家は主要鉄道をじぶんの手で建設したが、それはごくありふれた政治的、財政的理由からであった。またビスマルクは、なんの経済的必要性もないのに、プロシヤの鉄道幹線を国営にしたが、それはたんに戦争の場合にそなえて、これをいつそうよく整備利用することができるようにするためであり、鉄道官吏を政府に投票する家畜にそだてあげるためであり、とりわけ議会の決議に拘束されない一新財源をつくりだすためであった。これらはどれも、直接的にも間接的にも、意識的にも無意識的にも、けっして社会主義的進歩ではなかった。もしそうでなかったら、プロシヤの王室海外貿易会社も王室陶器制作所も、また陸軍製絨廠でさえも、社会主義的施設であるだろう。さらにフリードリヒ・ウイヘルヘルム三世治下の三十年代に、ある山師によって大まじめに提案された——女郎屋の国営でさえも」<sup>29</sup>と。

このあと、エンゲルスはまた、資本主義国のなかの「国有財産」といわれるものの性質の問題について重点的につぎのように説明している。

「しかし、株式会社やトラストへの転化も、国有化も、生産力の資本的特性を揚棄するものではない。株式会社やトラストの場合には、このことは明白である。また近代国家というものは、やはりブルジョア社会がつくりだした組織にすぎないものであって、それは労働者や個々の資本

家の侵害にたいして、資本主義的生産様式の一般的・外部的諸条件を維持することを目的として  
 いるのである。近代国家は、どんな形態をとろうとも、本質的には資本主義的な一機構であり、  
 資本家の国家であり、理念上の総資本家である。近代国家が生産諸力をその所有におさめればお  
 さめるほど、それはますます現実的な総資本家となり、ますますひどく国民を搾取するようにな  
 る。労働者はいかかわらず労働者であり、プロレタリアである。資本関係は揚棄されない。むし  
 ろそれは極端にまでおしすすめられる。しかし極端にたつすると、それは一変する。生産諸力の  
 固有は衝突の解決ではない。しかしそれはそれ自身のなかに、形式的な解決手段、つまり解決の  
 手がかりをかくしている」<sup>②</sup>

エンゲルスのこれらのごときは、独占資本があらわれはじめた時代に書かれ、資本主義が自由  
 競争から独占へかわりはじめた時代に書かれたものである。エンゲルスが説いた道理は、独占資  
 本が完全に支配的地位をしめた時代では、もはや効力を失っただろうか？ この時代の資本主義  
 国の国有化は、すでに「生産力の資本的特性」を変革したとか揚棄したとかといえるだろうか？  
 この時代には、資本主義の国有化またはその他の形で形成されている国家独占資本主義は、もは  
 や資本主義でなくなつたといえるだろうか？ 他の国ではそういえないとしても、イタリアでは  
 そういえるのだろうか？

ここで、われわれは国家独占資本主義の問題、イタリアの国家独占資本主義の問題をとりあげ  
 るほかはない。

資本の集中は独占をうむ。第一次世界大戦いらい、世界資本主義は一般的な独占へと一歩前進  
 したばかりでなく、一般的な独占から国家独占へと一歩前進した。第一次世界大戦ののち、とり  
 わけ一九二九年に資本主義世界で経済恐慌が勃発していらい、国家独占資本主義は帝国主義諸国  
 であらたな発展をとげた。第二次世界大戦のあいだ、戦火をまじえた双方の帝国主義国の独占ブ  
 ルジョアジーは、ともに戦争のなから多額の利潤をむさぼりとうとうとして最大限に国家独占資  
 本を利用した。戦後、いちぶの帝国主義国では、程度の差こそあれ、国家独占資本が国家の経済  
 を支配する勢力にさえなっている。

世界のおもな帝国主義国のうち、イタリアの資本主義の基礎はわりに弱い方である。そこで、  
 資本の力を集中して、最大限の利潤を獲得し、国際独占資本と競争し、市場を拡大し、植民地を  
 再分割するために、イタリアははやくから国家資本主義の道をあゆんだ。一九一四年、イタリア  
 政府は工業企業貸付銀行財団をつくつて、大きな銀行と工業企業に貸付金と補助金をあたえた。  
 ムッソリーニのファッショ支配の時期に、国家機構と独占資本はこれまでよりいっそう結びつ  
 くようになった。とりわけ、一九二九年から一九三三年までの大恐慌のさい、イタリア政府は破

産にひんしていた銀行と企業の株券を恐慌まえの価格で大量に買いあげ、多くの銀行と企業を国家の支配のもとにおき、工業復興会社をつくり、ぼう大な国家独占資本体をつくりあげた。第二次世界大戦ののち、かつてファッショ政権の基盤であった国家独占資本をふくむイタリアの独占資本は、そのままのこされたばかりか、いつそう高い速度で発展した。いま、イタリアでは国家独占資本の企業に国家独占資本と民間独占資本が共同で経営している企業をあわせると、経済ゼンたいのなかではば三〇パーセントをしめている。

国家独占資本主義の発展から、マルクス・レーニン主義者はどういう結論をみちびき出すべきであろうか？ トリアッチ同志とイタリア共産党の他のいぢぶの同志のいうように、イタリアでは、国有化企業つまり国家独占資本が「独占体に対立し」⑨、「人民大衆を代表し」⑩、「独占資本の発展に反対するいつそう効果のある手段」⑪になりうるであろうか？

マルクス・レーニン主義者は絶対にこのような結論をくだすことができない。

国家独占資本主義は独占資本と国家権力が融合した独占資本主義である。それは国家の権力を十分に利用して資本の集中と集積をはやめ、勤労人民の搾取に拍車をかけ、中小企業の併呑に拍車をかけ、独占資本グループの合併をばげしくし、国際面における独占資本の競争と拡張を強めている。それは「国家の経済への介入」とか「独占反対」という看板をかけた、「国家」の名を

かりて欺瞞をおこない、かげにかくれた巧妙な手段で巨額の利潤を独占資本グループの手に移している。

国家独占資本が独占ブルジョアジーのために奉仕するおもな方法はつぎのとおりである。

第一、国庫の資金と人民の納めた税金を利用して、資本家を投資の危険からまもり、独占グループが確実に巨額の利潤を獲得できるように保証する。

たとえば、イタリアの最大の国家独占体である工業復興会社が資金調達のため公債を発行するばあいには、国家がその元金を保証し、利息を支払う。しかも、年利はふつう四分五厘ないし八分という高率にたつし、企業が利潤をあげたときにはさらに配当金もとれることになっている。

第二、国家の立法と予算をつうじて、大部分の国民所得を独占資本体に有利なように再分配し、独占資本グループが多額の利潤を獲得できるように保証する。

たとえば、一九五五年、イタリア政府が民間独占資本グループからの買い付け、発注にあてた費用だけでも歳出予算の約三分の一を占めていた。

第三、国家による企業の買いあげまたは払いさげを交互につかうという形で、ときには欠損を出した企業、倒産した企業、あるいは国有化した方がいぢぶの独占グループに有利な企業を国家の手に移し、ときには収益のある企業を民間独占資本グループの手に移す。

たとえば、イタリア経済学者ジノー・ロンゴの統計によると、一九二〇年から一九五五年までのイタリア歴代政府は、倒産した銀行と企業の株券を買いあげるために一兆六四七〇億リラ（一九五三年価格）を支出した。これは一九五五年、資本金五〇〇〇万リラ以上をもつ全株式会社の公称資本の五割以上にあたる。また、概算統計によると、工業復興会社は成立したときから一九五八年までだけでも、のべ四九一〇億リラ（一九五三年価格）にあたる収益のある企業の株券を民間独占資本体売り払った。

第四、国家の権力を利用して、資本の集中と集積をつよめ、独占資本の中小企業併吞を激化させる。

たとえば、イタリア経済の動脈をにぎっている一〇の最大独占資本グループは、一九四八年から一九五八年までに、公称資本総額を一五倍にふやした。なかでも、フィアト会社は二五倍に、イタリア・セメント会社は四〇倍にふやした。イタリアでもっとも大きな一〇の会社は、イタリアの株式会社総数の〇・〇四パーセントを占めるにすぎないが、かれらが直接ににぎって、牛耳っている民間株式資本はイタリアの民間株式資本総額の六四パーセントを占めている。同時に、イタリアの中小企業の倒産はたえず増加している。

第五、「国家」の形態と外交的手段をつうじて、国際的にはげしい市場争奪闘争をすすめ、こ

れをイタリア独占ブルジョアジーのおしすすめている新植民地主義の有利な道具にする。

たとえば、イタリアの国営炭化水素会社は、一九五六年から一九六一年までだけでも、アラブ連合、イラン、リビア、モロッコ、チュニジア、エチオピア、スーダン、ヨルダン、インド、ユーゴスラビア、オーストリア、スイス等の国で油田の調査、開発、石油の販売、送油管、石油精製工場の建設などの権利を獲得し、国際石油市場におけるイタリア独占ブルジョアジーの立場を確保した。

以上にのべた事実のなかからもはつきりわかるように、国家独占と民間独占は、実際には、独占ブルジョアジーが多額の利潤を略奪するうえでたがいな補いあう二つの形態である。国家独占資本の発展は、帝国主義制度に固有な矛盾を激化させたのであって、トリアッチ同志らがいよいよな、「大独占資本グループの権力を制限し、粉砕する」⑥ことができたり、帝国主義制度に固有なさまざまな矛盾を変えることができたりするようなものでは決していない。

イタリアのいちぶの人びとのあいだには、こんにちのイタリア資本主義はもはや五十年まえの資本主義とちがって、「新しい段階」につきすすんだ、とみる見方が流行している。これらの人びとは、いまのイタリア資本主義を「新資本主義」と名づけている。かれらは、このいわゆる「新資本主義」あるいは資本主義の「新しい段階」では、階級闘争、社会主義革命、プロレタリア

アートの権力奪取、プロレタリアート独裁などといったマルクス・レーニン主義の根本原理はもはや用がないと言いはつてゐる。かれらの見方によると、このいわゆる「新資本主義」は「企画化」、「技術進歩」、「完全就業」、「福祉国家」などの方法を利用し、「国際的な同盟」をつうじて、あたかも資本主義制度の内部から資本主義の根本矛盾を解決する役割をはたしうるかのようである。イタリアで、こうした「理論」をまもり、ひろめてゐるのは、まずカトリック運動と社会改良主義者たちである。トリアッチ同志らは、実際には、こうした「理論」のなかからかれらの「構造改革論」のために新しい根柢をさがしとめたのである。

トリアッチ同志らは、「かつて社会主義に特有なものと見なされた経済の計画化と企画化の概念が、いまやますます広はんに討論され、うけ入れられてゐる」④と考へてゐる。

トリアッチ同志の見解は、第一に、社会主義国が計画的に国民経済を発展せしめるだけでなく、資本主義制度のもとでもそうすることができる、第二に、資本主義のイタリアでは、社会主義に特有な経済の計画化と企画化をうけ入れることができる、ということである。

マルクス・レーニン主義者は、もともと、資本主義国はブルジョアジーゼンたいの利益のために、国民経済にたいするある種の調整の政策をとることが必要であるし、また可能でもある、と考へてゐる。われわれがまえに引用したエンゲルスのことばのなかには、このような意味がふく

まれている。独占資本の時代には、資本主義国のこのような調整の機能は、おもに独占ブルジョアジーの利益のためのものである。このような調整は、ときにはいちぢく独占グループの利益を犠牲にすることさえあるが、しかし、独占ブルジョアジーの全般的利益をそこなうようなことは絶対になく、逆に独占ブルジョアジーの全般的利益を代表するのである。

レーニンはいみじくもつぎのようにいつてゐる。「なぜなら、非常に流布してゐる誤りは、独占資本主義あるいは国家独占資本主義がもはや資本主義ではなく、すでに『国家社会主義』等々と呼ぶるといつたブルジョア改良主義的な主張だからである。もちろん、トラストは、完全な計画性をもたらさなかつたし、いまなおもたらしてはいないし、またもたらすはずもない。どれほどトラストが計画性をもたらそうと、また大資本が、全国的な規模で、それどころか、国際的な規模で、どれほど生産の規模をあらかじめ計算しようと、またトラストがどれほど生産を計画的に規制しようとして、われわれは、やはり依然として資本主義のもとにある。なるほど、資本主義の新しい段階ではあるにしても、しかし、疑いもなく、資本主義のもとにある」⑤

ところが、イタリア共産党のいちぢくの同志の考へによると、独占ブルジョアジーの支配するイタリアで「計画化」というものを実現すれば、「労働者階級の自由と解放の問題」⑥をふくめてイタリアの歴史上生みだされた重大問題を解決することができるという。このような奇跡がどう

して出現できるだろうか？

トリアッチ同志はいう。「レーニンがいったように、ほとんどすべての大国では、資本主義制度の近代形態としての国家独占資本主義は、これを持ちこえて前進すれば社会主義がいけないという段階である。だが、この客観的な必要のなから、一種の自覚的な運動がうまれる必要がある」④と。

周知のように、レーニンは、「資本主義は帝国主義へと発展し、独占は国営へと発展した。すべてこれらは、社会主義革命を近づけ、そのための客観的諸条件をつくりだした」⑤と言っている。ほかのところでも、レーニンは同様のことを言っている。レーニンのいう意味はきわめてはっきりしている。つまり、国家独占資本主義の発展は「社会主義革命に近いことを主張する論拠となるべきものであつて」、「すべての改良主義者の事としているようなこの革命の否定と資本主義の粉飾とを、大目に見てもよいという論拠となるべきものではけつしてない」⑥ということである。ところが、トリアッチ同志の「構造改革」とか、「自覚的な運動」とかいうものは、改良主義者のそれとおなじように、あいまいなことをつかつて、マルクス・レーニン主義の提起する社会主義革命の問題をさけ、やつきになつてイタリアの資本主義をかざりたてようとするものにはかならない。

#### 偉大なレーニンの教えを銘記せよ

以上にのべた一連の問題からもわかるように、トリアッチ同志らの「構造改革論」は、国家と革命の根本問題についてマルクス・レーニン主義に徹底した全般的修正をくわえたものにはかならない。

一九五六年、トリアッチ同志ははやくも公然とマルクス・レーニン主義にたいするこの全般的修正の旗をかかげた。この年の六月、イタリア共産党中央委員会総会で、かれはつぎのようにのべている。

「まずマルクスとエンゲルス、のちにはレーニンがこの学説（プロレタリアート独裁の学説——本誌編集者注）を明らかにするにあつて、つぎのようにいつている。ブルジョアジーの国家機構では社会主義社会を建設することができない。かならず、労働者階級がこの機構を粉碎し、破壊しなければならず、プロレタリアートの国家機構——つまり労働者階級じしんの指導する国家機構——をこれにおきかえなければならない、と。これは、マルクスとエンゲルスのもとのからの観点ではなく、かれらがパリ・コミューンを経験してのち主張した観点である。この観点は、とくにレーニンによつて発展させられた。この観点は、こんにちもなお完全に有効である



かどうか？ これは討論してよい問題である。じじつ、民主主義の基礎のうえに立って社会主義へ前進できるばかりでなく、議会の形態を利用して社会主義へ前進できるということを断定するにあたって、われわれは、世界にすでにおこった変化、また現におこりつつある変化を考慮に入れて、あきらかにこの観点に若干の修正をくわえたのである」

トリアッチ同志はここで「マルクス主義の歴史家」みたいなふりをしているが、しかし、マルクス主義の歴史を根本的に歪曲している。

事実を見てみよう。

マルクスとエンゲルスは、一八四七年に書いた『共産党宣言』のなかで、「労働者革命の第一歩はプロレタリアートを支配階級にたかめること、民主主義をたたかいたることである」<sup>②①</sup>と、きわめてはつきり提起している。レーニンも説明しているように、「ここには、国家の問題におけるマルクス主義のもつとも注目すべき、もつとも重要な思想のひとつ、すなわち『プロレタリアートの独裁』（パリ・コンミュン以後マルクスとエンゲルスはこう言うようになったが）の思想の定式化がある」<sup>②②</sup>

マルクスは一八四八年から一八五一年までの経験をしめくくつてのち、古い国家機構をうちくたくという問題を提起した。レーニンも説明しているように、「ここでは、問題は具体的に提起

され、非常に正確で、明確で実践的に具体的な結論がくだされている。これまでの革命はみな国家機構をいつそう完全なものにしたが、いまや国家機構を粉碎し、うちくだかなければならぬ」のである。「この結論は、マルクス主義の国家学説のなかで主要なもの、根本的なものである」<sup>②③</sup>と、レーニンはいつている。

マルクスは一八四八年から一八五一年までの経験にもとづいて、プロレタリア革命はこれまでの革命のように、ただ簡単に官僚的、軍事的機構をいちぶのひとの手から他のいちぶのひとの手にうつすものとはならないであろう、という結論をくだした。うちくだかれた国家機構になんをおきかえるべきかについては、そのとき、マルクスはこの問題に具体的な回答をあたえなかつた。なぜなら、レーニンもいつているように、マルクスは論理的な推論にもとづくのではなく、厳格に歴史的経験に立脚して任務を提起した<sup>②④</sup>からである。一八五二年以前には、この具体的な問題について、まだ資料となる経験がなかつた。そのご、一八七一年のパリ・コンミュンの経験によつてはじめてこの問題が日程にのぼされたのである。「コンミュンは、ブルジョア国家機構を粉碎しようとするプロレタリア革命の最初の試みであり、粉碎されたものにとつてかわることができし、またとつてかわらなければならぬ、『ついに発見された』政治形態であつた」<sup>②⑤</sup>

これからもわかるように、ブルジョア国家機構をうちくたくことと、うちくだかれた国家機構に何をおきかえるかということとはふたつの問題である。マルクスはちがった時期の歴史的経験にもとづき、前後してこの二つの問題に回答をあたえたのである。トリアッチ同志は、プロレタリアートがブルジョア国家機構をうちくだかなければならないという問題は、マルクスとエンゲルスが一八七一年のパリ・コンミュニョンの経験ののちはじめて主張したものだといっている。これは歴史的事実をゆがめるものである。

トリアッチ同志もカウツキーとおなじように、「国家機構を破壊しなくても権力を獲得できるとみとめている」<sup>②</sup>。ブルジョアジーの国家機構をのこしてもよいし、このできあいの国家機構を利用してプロレタリアートの目的をとげることができる、と考えている。この点、トリアッチ同志は、レーニンがどのようににたびたびカウツキーを批判したかを見てみよう。レーニンはつぎのようにのべている。「カウツキーは、労働者階級の手には国家権力がうつるのをまったく拒否するか、それとも、労働者階級が旧ブルジョア国家機構を掌握することをみとめはするが、しかし、労働者階級がこの国家機構を粉碎し、うちくだき、それを新しいプロレタリア国家機構に代えることをけつしてみとめないか、どちらかである。カウツキーの議論を、いずれに『解釈』し、『説明』しようと、どのばあいにも、かれがマルクス主義と絶縁してブルジョアジーの

がわへうつつていることは、明白である」<sup>③</sup>

トリアッチ同志は、かれらの綱領が「マルクス・レーニン主義の深化、発展」であると吹聴するとき、そのいわゆる「構造改革論」が実はさきにカウツキーの発明したものであることを知っておかなければならない。カウツキーは『社会革命』というパンフレットのなかで、つぎのようにのべている。「いうまでもなく、われわれは当面の諸条件のもとで支配的な地位をかちとるようなことはないであろう。革命しんがまず長期にわたるつつこんだ闘争をおこなうよう要求している。これらの闘争はかならずわれわれの当面の政治構造や社会構造を改革するであろう。」これを見てわかるように、カウツキーは早くから「構造改革論」をプロレタリア革命の学説におきかえようとしていたのであつて、トリアッチ同志はカウツキーの衣鉢をつぐものにすぎない。だが、両者の論点をくわしく検討してみると、トリアッチ同志はカウツキーよりはるかにぬきんでていることが容易にわかる。なぜなら、カウツキーは「われわれは当面の諸条件のもとで支配的な地位をかちとるようなことはない」と認めているのにたいし、トリアッチ同志は正反対に「当面の諸条件のもとでも」かれらが支配的な地位をかちとれると考えているからである。

トリアッチ同志らは、イタリアが社会主義へむかつて前進してゆくためには、イタリアのあの奇妙な憲法にもとづいて、「新しい民主主義制度」をうちたてる必要があり、同時にま

た、「新しい歴史的集団」、あるいは「新しい社会的・政治的指導勢力の集団」<sup>②</sup>というものを  
つくりあげる必要がある、と考えている。イタリアの「政治的、思想的、道徳的革命をになうも  
の」はイタリアのプロレタリアートではなく、この「新しい歴史的集団」<sup>②</sup>である、というのが  
かれの考えである。いったい、この「新しい歴史的集団」とはどういうものなのか、それはどの  
ようにしてつくりあげられるのか、これは誰もわかっていない。トリアッチ同志らは、ときには  
この「新しい歴史的集団」が「労働者階級の指導のもと」<sup>③</sup>にあるといい、ときにはまたこの  
「新しい歴史的集団」じしんが「指導勢力の集団」にはかならぬといっている。いったい、この  
ような集団はプロレタリアートの階級組織なのか、それとも各階級の連合組織なのか？ いった  
い、労働者階級が指導するのか、ブルジョアジーが指導するのか、それともまた他の階級が指導  
するのか？ こうしたことは、ただ神が知るだけである！ とどのつまり、かれらのこうした奇  
想天外な、とりとめもない命題は、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁にかんするマルク  
ス・レーニン主義の根本思想を回避するためのものにはかならない。

トリアッチ同志が考えているのは、第一にブルジョアジーの国家機構を粉砕する必要がないこ  
と、第二にプロレタリアートの国家機構をうちたてる必要がないことである、したがって、かれ  
はパリ・コミューンの経験を否定しているのである。

レーニンは、マルクス、エシゲルスのあとをうけて、たえずパリ・コミューンの経験を解明  
し、パリ・コミューンの経験は全世界各国のプロレタリアートにとつて普遍的な意義をもつ経  
験である、と一貫して考えている。レーニンは、ロシア革命の経験をパリ・コミューンの経験  
から切りはなすのではなく、ロシア革命の経験をパリ・コミューンの経験の継続であり発展で  
あると見なしている。レーニンは、ソビエトを「パリ・コミューンの型の国家を再建した」<sup>④</sup>  
ものと考え、パリ・コミューンは古い国家機構を粉砕する道へ「世界史的な第一歩を踏みだ  
し、ソビエト権力はその第二歩をすすめた」<sup>⑤</sup>と考えている。

トリアッチ同志はパリ・コミューンの経験を否定した以上、自己の思想をマルクス・レーニ  
ン主義にちよくせつ対立させざるをえない。かれはまた、ちよくせつ十月革命の経験を否定し、  
十月革命後の各国の人民革命の経験を否定し、「イタリアの道」というものを国際プロレタリア  
ートの共同の道に対立させている。

トリアッチ同志は、「こんにちイタリアの労働者が直面しているのは、ロシアでやったことを  
やるという問題ではない」<sup>⑥</sup>といっている。問題の実質はまさにここにある。

一九五六年、イタリア共産党第八回大会で採択された綱領声明の要綱は、「ソ連で勝利を獲得  
したあの革命の方法で権力をうばいとるのが不可能であることは、第一次世界大戦直後の時期に

はやくもあきらかになった」といつている。問題の実質はここにもある。

トリアッチ同志は中国革命の経験にふれたさい、中国人民が権力をかちとるたたかいをすすめていた時期の中国共産党の政治路線は、「ボルシェビキが一九一七年三月から十月までの革命過程で遵守した戦略的、戦術的路線にまったく合致していない」①といっている。これも中国の革命史をゆがめるものである。中国の具体的な状況のもとで、中国革命にはそれなりの特徴がある。だが、毛沢東同志がくりかえし説明しているように、わが党の政治路線はマルクス・レーニン主義の普遍的な真理と中国革命の具体的な実践をむすびつける原則にもとづいて定められたのである。われわれは一貫して、中国革命は偉大な十月革命の継続であり、もちろん、パリ・コンミュニンの事業の継続でもある、と考えている。旧い軍事的官僚的國家機構をうちくだいて、プロレタリアート独裁の國家機構をうちたてるというこの國家と革命の學說のもつとも根本的な問題については、中国革命の基本的経験は十月革命やパリ・コンミュニンの基本的経験と完全に一致する。一九四九年、毛沢東同志が「人民民主主義獨裁について」という有名な論文のなかでべているように、「ロシア人の道をあゆむこと——これが結論であつた」②。トリアッチ同志は、マルクス・レーニン主義の根本原理にたいする自己の修正——あるいはかれら自身の言葉によると「改正」——について弁解するため、中国革命の経験と十月革命の経験を「まったく合致

していない」ふたつの事柄であるといっている。このような歪曲はトリアッチ同志らの「構造改革論」にたいしてどんな役にたつだろうか？

トリアッチ同志らの「構造改革論」というのは、「平和的移行論」であり、かれらじしんの言葉によると、「民主主義と平和の道をつうじて社会主義へ前進する」③ことである。かれらの理論と綱領はすべて、資本主義社会の「階級的平和」にたいする賛美にみちあふれており、「社会主義へ前進する」などという内容はまったくない。あるのは階級的「平和」だけであつて、社会の「移行」などというものはすこしもない。

マルクス・レーニン主義はプロレタリア革命の科学であり、革命の実践のなかでたえず發展するものである。その個々の原理と個々の結論は、新しい歴史的条件に応じた新しい原理と新しい結論にとりかえないわけにはゆかない。だが、だからといって、マルクス・レーニン主義の根本原理を放棄したり、修正したりすることはできない。マルクス・レーニン主義の國家と革命の學說は、ぜったい個々の原理や個々の結論ではなく、マルクス・レーニン主義が國際プロレタリアートの闘争経験をまとめあげた根本的な原理である。この根本的な原理を放棄し、修正するのは、マルクス・レーニン主義を根本的に裏切ることにはかならない。

ここで、われわれもトリアッチ同志にいささか忠言を「進呈」したい。ロシアの十月革命でや

つたことをやらないなどと、あまり高慢な言は吐かない方がよい、もうすこし謙虚になつて、偉大なレーニンが一九二〇年に「プロレタリア革命のいくつかの非常に本質的な問題では、すべての国は、ロシアの経てきたことを、これから必ず経なければならぬ」<sup>⑧</sup>と教えたことを銘記すべきである、と。

レーニンが提起し、偉大な十月革命の勝利が立証したプロレタリアートの戦略原則をまもるか、それともこれに反対するか——これこそレーニン主義者と現代修正主義者およびその追隨者との根本的な相違点である。

- ① イタリア共産党第十回大会でのトリアッチの結語
- ② 一九六二年四月のイタリア共産党中央委員会総会でのトリアッチの発言
- ③ 一九五六年六月のイタリア共産党中央委員会総会でのトリアッチの報告「社会主義へのイタリアの道」
- ④ イタリア共産党第十回大会でのトリアッチの報告
- ⑤ 一九五六年十二月のイタリア共産党第八回大会で採択された「イタリア共産党綱領の声明要綱」
- ⑥ 「イタリア共産党第十回大会のテーゼ」
- ⑦ 一九五六年三月のイタリア共産党中央委員会総会でのトリアッチの報告

- ⑧ 「イタリア共産党第九回大会で採択された政治テーゼ」
- ⑨ A・ペセンチの「構造か上部構造か」(一九六二年五月十九日のイタリア共産党週刊誌「リナチタ」)を参照
- ⑩ A・ペセンチの「国家の介入する直接の方式と間接の方式」(一九六二年六月九日の週刊誌「リナチタ」)を参照
- ⑪ トリアッチの文章「討論を真実の限度にもどそう」
- ⑫ 「ロシア共産党(ボ)第七回大会」。「レーニン全集」第二七巻
- ⑬ 「ふたたび労働組合について、現在の情勢について、トロツキーとブハーリンの誤りについて」。「レーニン全集」第三二巻
- ⑭ イタリア共産党第十回大会でのトリアッチの報告を参照
- ⑮ 「共産主義インターナショナル第一回大会」。「レーニン全集」第二八巻
- ⑯ 「共産党・労働者党のモスクワ会議の宣言」
- ⑰ 一九五六年十二月のイタリア共産党第八回大会におけるトリアッチの報告「社会主義へのイタリアの道をめざして。勤労階級の民主政府をめざして。」
- ⑱ 「イタリア共産党第十回大会のテーゼ」。「ウニタ」一九六二年九月十三日増刊を参照
- ⑲ 「一八四八年十一月四日に採択されたフランス共和国憲法」。「マルクス・エンゲルス全集」第七巻

- ②④ イタリア共産党第四回協議会におけるトリアッチの報告「自由、平和、社会主義をめざす共産主義者のたたかい」
- ②① 「社会革命派は革命の決算をどうつけているか」。「レーニン全集」第一五巻
- ②② トリアッチの「議会と社会主義をめざす闘争」(一九五六年三月七日付のソ連共産党機関紙「プラウダ」)を参照
- ②③ 「国家と革命」。「レーニン全集」第二五巻
- ②④ 「プロレタリア革命と背教者カウツキー」。「レーニン全集」第二八巻
- ②⑤ 「ロシア社会民主労働党統一大会についての報告」。「レーニン全集」第一〇巻
- ②⑥ 「レーニン全集」第三〇巻
- ②⑦ 「ノーボエ・ブレイミヤ」(新時代)一九一二年第四六号のカウツキーの「新しい戦術」を参照
- ②⑧ 「マルクス・エンゲルス二巻選集」第二巻
- ②⑨ 「ロシア社会民主労働党(ボ)第七回(四月)全国協議会」。「レーニン全集」第二四巻
- ③① 「マルクス・エンゲルス全集」第四巻
- ③② 「国家と革命」。「レーニン全集」第二五巻を参照
- ③③ 「イタリア共産党第十回大会のテーゼ」を参照
- ③④ 「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」。「レーニン全集」第二四巻

- ③④ イタリア共産党第十回大会でのトリアッチの報告を参照
- ③⑤ 「毛沢東選集」第四巻
- ③⑥ 「共産主義内の『左翼主義』小児病」。「レーニン全集」第三一巻

## 六、戦略のうえでは敵を蔑視し、戦術のうえでは敵を重視する

### 歴史の分析

さいきん、「マルクス・レーニン主義者」と自任するいちぶの人びとは、またもや突然さわぎたて、帝国主義とすべての反動派はハリコの虎であるという中国の共産主義者の論点に反対している。かれらはこの論点について、ときには「帝国主義を見くびり、人びとの気持ちをゆるめるもの」だというかと思ふと、ときには「社会主義の力を軽視するもの」だともいい、ときには「見

せかけの革命」だということかと思うと、ときには「おびえているから」だともいつている。かれらのわめき声はつきからつきへと高まり、つきからつきへと力がいり、たがいに努めて「前の者を追いこし」、自分が「立ちおかれて」いないことを示そうとしている。かれらの論法は矛盾だらけで、混乱し、この論点を打倒しようとするくらむものにほかならない。だが、かれらの論法はすべて致命的な弱点をもっている。それはつまり、帝国主義が寄生的な、腐敗しつつある、瀕死の資本主義だというレーニンの科学的な断定に、かれらはすこしでも真剣にふれようとする勇氣がないことである。

イタリア共産党第十回大会で、トリアッチ同志がまづ先にこの攻撃をおこした。かれは、「帝国主義を肩でおせば倒れるような単純なハリコの虎と断定することは誤りである」①といい、また、「もしもそれがハリコの虎であるなら、それをうち倒すためにどうしてそれほど大きな力をついやし、それほど大きな闘争をおこなわなければならないのか？」②ともいつている。このばあい、もしもトリアッチ同志が小学校で勉強中の小学生であるなら、国語科の一般的な語彙解釈の試験問題にこたえるとき、ハリコの虎は紙とのりで作った虎だといえ、じゅうぶん及第するにちがいない。だが、理論問題は低俗な観点で研究するわけにはゆかない。「労働者階級の革命的学説であるマルクス・レーニン主義の深化と発展に積極的な貢献をした」②と自任するトリアッチ同志ともあろう人が、嚴肅な理論問題に答えるにあたってこのような小学生の答案をもちだすとは、いやはや途方もない、笑止千万なことではないか？

「帝国主義とすべての反動派はハリコの虎である」という毛沢東同志の論点は、もともと、非常にはつきりしたものである。毛沢東同志はつぎのようにのべている。

「敵と闘うために、われわれはながい間のうちに一つの間念をつくりあげてきた。それはつまり、われわれは戦略のうえではいつさいの敵を蔑視しなければならないが、戦術のうえではいつさいの敵を重視しなければならない、ということである。言いかえれば、われわれは全体のうえではかならずそれを蔑視しなければならないが、個々の具体的な問題のうえではかならずそれを重視しなければならない、ということである。もしも、全体のうえで敵を蔑視するのでなければ、われわれは日和見主義のあやまりを犯すことになるだろう。マルクスとエンゲルスはただ二人だったが、当時すでに、全世界の資本主義はうちたおされるにちがいないと言った。しかし、具体的な問題、個々の敵の問題のうえでもし敵を重視しないならば、われわれは冒険主義のあやまりを犯すことになるだろう。」③

真理に耳をかたむけようとしぬものは、つんばよりもいつそう耳が遠い。帝国主義を肩でおせば倒れるなどと、誰がいつただらうか？ 帝国主義をうち倒すためには力をださなくてもよ

く、闘争をしなくてもよいなどと、誰がいったらうか？

ここで、われわれはさらに毛沢東同志の述べたもう一節のことを引用したいと思う。毛沢東同志はつぎのようにいつている。

「世のなかのあらゆる事物で、二面性をそなえていないものがない（すなわち対立物の統一の法則）のと同様に、帝国主義といっさいの反動派も二面性をそなえており、かれらは本物の虎でもあれば、またハリコの虎でもある。歴史的にみて、奴隸主階級、封建的地主階級およびブルジョアジーは、かれらが支配権力をかちとる前と支配権力をかちとったのちのある時期には、生氣にあふれており、革命家であり、先駆者であり、本物の虎であった。だが、その後のある時期には、かれらの対立物である奴隸階級、農民階級およびプロレタリアートがしだいに強大になつて、かれらと闘争し、しかもその闘争がますます激しくなつたので、かれらはしだいに反対の方向に転化して、反動派になり、立ちおくれた人間になり、ハリコの虎になり、ついに人民によつてくつがえされたか、あるいは、くつがえされようとしている。反動的な、立ちおくれた、老い朽ちた階級は、人民の決死の闘争に直面したときも、やはり、こうした二面性をあらわす。一方では、かれらは本物の虎であつて、人を食う。何百万人、何千万人の人を食う。人民のたたかひの事業が苦難の時代におかれ、多くのまがりくねつた道があらわれた。中国人民は、帝国主

義、封建主義、官僚資本主義の中国における支配をくつがえすために、百余年の時日をついやし、何千万人も人命をうしなつて、やつと一九四九年の勝利をかちとつた。みたまえ、これは生きた虎、鉄の虎、本物の虎ではないか。だが、かれらはずいに、ハリコの虎、死んだ虎、豆腐の虎に転化してしまつた。これは歴史の事実である。まさか、こうしたものを見たり聞いたりしたことがないとはいへまい。ほんとうに、何千何万、何千何万という事実があるのである。だから、本質的に物を見、ながい目で物を見、戦略的に物を見るときには、ありのままに、帝国主義といっさいの反動派を、ハリコの虎と見なければならぬ。われわれの戦略思想は、この観点の上にならなければならない。他方では、かれらはまた、生きた、鉄の、本物の虎で、人を食う。われわれの一般戦術思想と軍事戦術思想は、この観点のうえにならなければならない」④と。

毛沢東同志のこのことは、三大搾取階級が異なつた歴史的発展段階にもつ二面性を説明するだけでなく、かれらが人民の決死の闘争に直面したときのその二面性をも説明している。あきらかに、これは歴史にたいするマルクス・レーニン主義的な分析である。

#### 革命派と改良派との分水嶺

歴史がわれわれに物語っているように、すべての革命家——もちろん、ブルジョアジーの革命



家をもふくむ——が革命家となりうるのは、なによりもまず、かれらが敵を蔑視する勇氣をもち、鬪争する勇氣をもち、勝利をたたくいとる勇氣をもつからである。敵をおそれ、鬪争する勇氣がなく、勝利をたたくいとる勇氣がないものは、弱虫、改良主義者、または投降主義者にすぎず、革命家ではありえない。

歴史上、眞の革命家がすべて反動派を蔑視する勇氣をもち、反動的支配階級を蔑視する勇氣をもち、敵を蔑視する勇氣をもつていたのは、当時の歴史的條件のもとで、人民がすでに新しい制度を古い制度にとりかえる必要性を感じはじめていたからであり、新しい歴史的任務がすでに人民のまえにおかれていたからである。変革の必要さえあれば、その変革には抵抗できるものではない。人びとが望むと望まないにかかわりなく、変革はおそかれ早かれ現われるものである。マルクスは「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである」⑤といっている。社会変革の必要は人びとの革命意識をよびおこす。歴史的條件から変革がまだ必要となつていないときには、だれもむりやりに革命の任務を提起し、むりやりに革命をおこなうことはできない、だが、歴史的條件から変革がすでに必要となつているときには、果敢に反動的支配階級を糾弾し、これをハリコの虎と見なすような、そういう革命家、そういう人民の前衛があらわれるのである。がれらは活動のなかで、いつも人民の

志氣を上げまし、敵の威勢をくじく。これは歴史の必然性であり、社会革命の必然性である。革命がいつ勃発するか、革命が勃発したのち迅速に勝利をおさめるか、または長い時間をかけてはじめて勝利をおさめるか、それとも多くの重大な困難、重大な挫折、さらには重大な失敗さえもなめてからはじめて最後に勝利をおさめるか等々にいたつてはそれぞれ異なつた具体的な歴史的要因によつて左右されるだろう。だが、眞の革命家であるかぎり、革命の過程で重大な困難、重大な挫折、さらには重大な失敗につきあたるとしても、かれらはやはり敵を蔑視する勇氣をもち、革命の勝利する可能性をかたく信じるのである。

中国で一九二七年の革命が失敗したのち、中国人民と中国共産党はきわめて困難な條件のもとにあつた。このとき、毛沢東同志はプロレタリアートの革命家として、われわれに中国革命の発展と勝利の前途をさししめた。毛沢東同志は、一方、革命の主観的な力を不当に誇張し、反革命の力を見くびることは一面的であり、誤りであると見なすとともに、他方、反革命の力を誇張した。中国革命の発展と勝利は、毛沢東同志の当時の評価が正しかったことを立証している。いま、世界の情勢ぜんたいは各国人民にとつてきわめて有利である。このような情勢をまえに、あるものは全力をあげて、戦略のうえで敵を蔑視するという観点にほしいままな攻撃をくわえ、帝

国主義の力を誇張し、帝国主義と各国反动派の肩をもち、帝国主義をたすけて革命的人民をおどしあげている。かれらは人民の志気をはげまし、敵の威勢をくじくのではなく、逆に、敵の威勢をはげまし、人民の志気をくじこうとしているのである。

レーニンには、「革命をのぞむのか？ それなら諸君は強者でなければならぬ」⑥といっている。なぜ革命家は強者でなければならず、また必然的に強者であるのだろうか？ それは、革命家が社会の新興の勢力を代表し、人民の力を信じるからであり、かれらが強大な人民の力を自分のうしろだてにするからである。反动派はただ弱者でしかありえず、また必然的に弱者である。それは、かれらが人民から浮きあがつており、一時うわべはいかに強そうに見えても、結局のところ失敗するにちがいないからである。「弁証法的方法にとつて何よりも重要なものは、一定の時機に堅固に見えてもすでに滅亡しはじめているようなものではなくて、一定の時機に堅固にみえなくとも、発生し発展しつづつあるようなものである。なぜなら、弁証法的方法にとつては、発生し発展するもののみが、征服しがたいものであると考えられるからである」⑦

レーニンはどうして一再ならず帝国主義を「粘土の足をした巨人」や「かかし」にたとえるのであろうか？ それは、とどのつまり、かれが社会発展の客観的法則をよりどころにして、新生の社会勢力は最後には腐りはてた社会勢力にうち勝つことを信じ、人民の力は最後には反人民の

力にうち勝つことを信じていたからである。そうではないだろうか？

帝国主義とすべての反动派はハリコの虎であるという中国の共産主義者の論点を論破しようとする人びとよ、諸君はまずもつてレーニンの論点を論破すべきである。諸君はどうして帝国主義が「粘土の足をした巨人」であり、「かかし」であるというレーニンの論点を直接に論駁しないのか？ これは、諸君が真理のまえにおびえているのでなくてなんだろうか？

およそ頭のはつきりしたマルクス・レーニン主義者からみれば、帝国主義は「粘土の足をした巨人」または「かかし」であるというレーニンの論法にしても、帝国主義とすべての反动派はハリコの虎であるという中国の共産主義者の論法にしても、ともにひじょうに正しいとえである。こうしたたとえは社会発展の法則にもとづいてえられたものであり、問題の本質を通俗的に説明するためのものである。偉大なマルクス・レーニン主義者や多くの科学者、哲学者は、つねにたとえをもちいて問題を説明してきた。しかも、その多くのたとえは問題をひじょうにつつこんで的確に説明している。

あるものは、帝国主義の本質についてのレーニンのたとえには表面上やむなく同意しているが、帝国主義の本質についての中国の共産主義者のたとえにだけは反対している。これはどうしてだろうか？ いづれまでもこの問題にからみついてくるのはどうしてだろうか？ よりにもよっ

て現在、このようにわめきたてるのはどうしてだろうか？ これは、かれらの思想がきわめて貧困であるほか、当然、かれらのねらいがあるのである。

「かれらのねらいはどこにあるのだろうか？」

第二次世界大戦が終わりをつけてから、社会主義陣営の力は大きいに強まった。アツア、アフリカ、ラテン・アメリカの広はんな地域の、帝国主義者とその手先に反対する革命はたえまなく前進している。帝国主義国では、国内、国外の各種の調和できないあまたの矛盾が、まるで火山のように独占ブルジョアジーの支配の王座をおびやかしている。帝国主義諸国は軍拡競争に拍車をかけ、その国民経済を軍事化のレールにのせようとやっきになっている。こうしたことはすべて帝国主義を袋小路へひきいられている。帝国主義の各種のブレン・トラストはその旦那たちの現在と将来の運命のためにあれこれとばかりごとをめぐらしているが、帝国主義に袋小路からのがれ出るだしかな道をさがしあてさせることはどうしてもできない。こうした国際情勢をまえにして、いちぶのものは、「マルクス・レーニン主義者」と自称しながらも、実際には間がぬけて、ある種の「世紀末」的な感傷を冷静な理智におきかえている。かれらは、各国人民をみちびいて、帝国主義のつくりだすさまざまな災禍からぬけださせようとし、また、各国人民がこれらの災禍からぬけだし、自分の新しい生活をつくりだす能力をもっていることも信じていない。こ

れらの人びとは、社会主義と各国人民の運命に関心をもつよりも、むしろ帝国主義とすべての反動派の運命に関心をよせている。かれらがいま、このように敵の力をひけらかし、誇張し、帝国主義のために旗をふり、ときの声をあげて加勢するのは、ただ各国の被抑圧人民と被抑圧民族を革命に立ちあがらせないためであつて、冒険主義とかいうものに反対するためではない。かれらは、せいぜい、「冒険主義反対」を口実に、革命に反対するねらいをとげようとしているにすぎない。

一九〇六年、レーニンはロシアのドゥーマ（ツァーの国会）の自由主義的諸党派について論じたとき、つぎのようにのべている。「ドゥーマの自由主義的諸党派は、人民の志向をただ不十分に、おぼろげと支持しているにすぎず、人民の敵を絶滅することよりも、進行中の革命的闘争をやわらげ、よわめることに心をくだいている」⑧と。

いま、われわれは労働運動のなかで、まさしくレーニンのいつているような自由主義派、すなわちブルジョア自由主義派に遭遇している。このような自由主義派がいつそ心をくだいているのは、広はんに発展しつつある各国の被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争をやわらげ、よわめることであつて、帝国主義者と人民の敵を絶滅することではない。マルクス・レーニン主義者は戦略のうえで敵を蔑視すべきであるという原理をこうした人びとにわからせようとしても、それはもちろんひじょうに困難なことである。

## 偉大な典範

いちぶの英雄たちは、「戦略のうえでは敵を蔑視する」という中国の共産主義者の論点を痛罵したのち、また「戦術のうえでは敵を重視する」という論点をも痛罵している。これらの英雄たちは、戦略のうえでは敵を蔑視し、戦術のうえでは敵を重視するという命題を、「二面的な態度」とか、「マルクス・レーニン主義にそむくもの」とかといっている。これらの英雄たちは、うわべは戦略と戦術に区別のあることをみとめ、戦術が戦術目標達成のため奉仕すべきことをみとめるようであるが、その実、かれらはほかでもなく、戦略と戦術の区別を抹殺し、戦略の概念と戦術の概念をまったく混同している。かれらは戦術を戦略にしたがわせるのではなく、戦略を戦術にしたがわせている。かれらは日常の闘争におぼれてしまい、具体的な闘争のなかで、ときにはひたすら折り合つて投降主義の誤りをおかし、ときには軽はずみなふるまいをして冒険主義の誤りをおかす。究極のところ、かれらのねらいは、革命的マルクス・レーニン主義者の戦略原則をとりけし、国際共産主義者の戦略目標をとりけすことにある。

すでにのべたように、史上、すべての革命家が革命家となりえたのは、なによりもまず、かれらが敵を蔑視する勇気をもち、闘争する勇気をもち、勝利をたたかいたる勇気をもっていたから

である。だが、同様にまた、史上、すべての成功した革命家が成功した革命家となりえたのは、かれらが敵を蔑視する勇気をもつばかりでなく、個々の局部的な問題、個々の具体的な闘争の問題について、敵を重視し、慎重な態度をとることができたからでもある、われわれはこのことも説明しておかねばならない。総じて、革命家、わけてもプロレタリアートの革命家は、もしこうすることができなければ、革命の順調な発展を指導することができず、冒険主義の誤りをおかして、革命に損失をもたらし、革命に失敗さえもこうむらせることとなる。

マルクス、エンゲルス、レーニンはプロレタリアートの事業のための生涯の闘争をつうじて、つねに、戦略のうえでは敵を蔑視し、戦術のうえでは敵を重視した。かれらはいつとも具体的な状況にもとづいて二つの戦線での闘争をすすめ、右翼日和見主義、投降主義にも反対し、「左」翼冒険主義にも反対した。かれらはこうした面であれわれに偉大な典範をしめした。

周知のように、マルクス、エンゲルスの共著『共産党宣言』はつぎのようなことばで終わっている。

「共産主義者は自分の見解と意図をかくすのを恥とする。共産主義者は、彼らの目的がすべてこれまでの社会組織の暴力的な転覆によつてのみ達成されることを、公然と宣言する。支配階級をして共産主義革命のまえに戦慄せしめよ！ プロレタリアがこの革命によつて失うものは

鉄鎖だけである。かれらがうるものは全世界である」⑩と。

これは、これまで一貫して国際共産主義運動ぜんたいの全般的戦略原則、全般的戦略目標であった。だが、『共産党宣言』のなかでも、マルクスとエンゲルスは、各国の共産主義者がおかれそれぞれ条件をきわめて慎重に考慮にいられた。かれらは、きまりきった紋切り型の公式をもちだして、各国の共産主義者におしつけるようなことはしなかった。なぜなら、各国の共産主義者は自国の条件にもとづいて、自国のそれぞれの歴史段階における具体的な戦略任務と戦術任務をさだめる必要があるということ、それが、もともとマルクス主義者の考えだからである。

マルクスとエンゲルスは一八四八〜一八四九年の大衆的な革命闘争にちよくせつ参加した。かれらは当時のブルジョア民主主義革命をプロレタリア社会主義革命の序幕とみなしたが、同時にまた、ただちに「労働者共和国樹立のため闘争せよ」というスローガンをうちだすことにも反対した。これはかれらの当時の具体的な戦略方針である。他方、かれらはそこから武力をもちいてドイツ革命をおこすことにも反対し、これは「革命を児戯あつかいする」やりかただと考えた。マルクスとエンゲルスは、外国にいるドイツの労働者が「一人ずつ」帰国して、国内の大衆的な革命闘争に身を投ずることを主張した。つまり、当時の具体的な戦術の問題についてのマルクス、エンゲルスの主張とやりかたは、「左」翼冒険者とは根本的にちがっていたのである。具体

的な闘争の問題については、マルクスとエンゲルスはいつもしつかりとした陣地から出発するようにつとめた。

一八四八〜一八四九年の革命が失敗したのち、マルクスとエンゲルスは一八五〇年の春、当時の情勢について、いちど、新たな革命が近づいていると見積もったことがある。だが、夏になると、マルクスとエンゲルスは、革命が近いうちにふたたびおこるのははや不可能となったことに気づいた。当時、あるものは、客観的可能性を無視し、「革命的な語句を実際的な革命の発展にとつてかわらせ、なんのよりどころもなしに「人為的革命」をつくりだそうとした。かれらは労働者によびかけて、ただちに権力を奪取せよ、さもなければ横になつて寝るがよいといった。マルクスとエンゲルスはこうした冒険主義にだんて反対した。まさしくレーニンがいったように「一八四八〜一八四九年の革命期がおわつたとき、マルクスは、あらゆる革命遊びに反対し（ジャック・パービーイリヒおよび彼らとの闘争）、いわば『平和的に』新しい革命を準備する新しい時期に活動する能力をもたなければならぬ、と要求した」⑪のである。

パリ・コミューンの蜂起の数ヶ月まえ、つまり一八七〇年九月、マルクスは、フランスのプロレタリアートに警告して、時機尚早の蜂起をおこしてはならないといった。だが、一八七一年三月、労働者がやむなく蜂起をおこすと、このとき、マルクスはひじょうな情熱をもってパリ・

コンミュニンの労働者たちの天をつく英雄的な気概をほめたたえた。当時、かれはクーゲルマンへの手紙のなかでつぎのようにのべている。

「これらパリ人には、なんとすばらしい弾力性と歴史的創意と犠牲的能力とがあることだろう！ 六ヶ月も兵糧せめにあい、国外の敵によつてではなくて、むしろ内部のうらぎりによつて荒廃させられたのちにも、彼らはプロシヤの銃剣のしたからたちあがった。あたかもフランスとドイツのあいだにはいままで一度も戦争はおこなわれず、敵軍がパリの城門のまえにせまりなどしていないかのように！ 歴史はかくも偉大な典範をかつてみたことがない！ もし彼らが一敗地にまみれるとしても、それは彼らの『お人よし』の罪にはかならない」⑩と。

見ていただきたい、敵を蔑視したパリ・コンミュニンの労働者の英雄的气概を、マルクスはどのようにほめたたえたのだ！ マルクスはほかでもなく、国際共産主義運動せんたいの全般的戦略目標からパリ・コンミュニンを評価し、パリ・コンミュニンの闘争について「歴史はかくも偉大な典範をかつて見たことがない」と考えていたのである。

パリ・コンミュニンは蜂起ののち、いくつかの誤りをおかし、ただちに反革命のベルサイユへ進軍せず、中央委員会があまりにも早く自己の権力を放棄したにもかかわらず、また、パリ・コンミュニンは失敗したにもかかわらず、コンミュニンのかけたプロレタリア革命の旗じるしは

永遠にさんらんと光りかがやいている。

マルクスは『フランスの内戦』のなかでつぎのようにのべている。「労働者のパリは、そのコンミュニンとともに、新社会の光栄ある先駆者として、永久にたたえられるであろう。これに身をささげた人びとは、労働者階級の偉大な心のうちにまつられている。これをほろぼしたものを、すでに歴史はあの永遠のさらし台に釘づけにしたのだ。彼らの僧侶どもがどんなにいたるところで、彼らをすくうことはできないであろう。」⑪

パリ・コンミュニン二十一周年を記念するにあたって、エンゲルスはつぎのように述べている。「コンミュニンの高度に国際主義的な性格は、コンミュニンに偉大な歴史的意義をもたせた。これはブルジョア排外主義のすべてのあらわれにたいする勇敢な挑戦である。万国のプロレタリアートはこのことをはっきりと知っている。」⑫

ところが、いま、わがトリアッチ同志は、国際プロレタリア革命の事業に普遍的な意義をもつパリ・コンミュニンへのマルクス、エンゲルスの高い評価を、もはやとりあげる価値がないとまでも考えているようである。

パリ・コンミュニンが失敗したのち、パリの労働者は、エンゲルスのいうように、長期の休息をとつて、鋭気をやしなう必要があつた。ところが、ブランキー主義者は当時の条件を無視し

て、新しい蜂起をおこすことを主張した。こうした冒險主義のくわだては、エンゲルスからするどく批判された。

欧米資本主義の平和な発展の時期に、マルクスとエンゲルスは労働運動のなかでひきつづき二つの戦線における闘争をすすめた。かれらは、一方では、革命の空談議をきびしく非難し、「ブルジョア的な合法性」を利用してブルジョアジーに反対する闘争をすすめるよう主張するとともに、他方では、当時、社会民主党のなかで支配的な地位をしめていた日和見主義の思想にきびしい批判をくわえ、さらにはいつそきびしい批判さえもくわえた。なぜなら、こうした日和見主義はプロレタリア革命にたいする断固たる態度を根本的に失っていたからであり、かれらはただ合法的な闘争をやるだけであつて、同時に非合法の手段をもちいてブルジョアジーに反対する闘争をおこなう決心がなかつたからである。

いかえると、マルクスとエンゲルスは、平和な発展の時期をもふくめ、いかなる時期にも断固ゆらぐことなくプロレタリア革命の戦略原則を堅持するとともに、また、それぞれの時期の具体的な条件にもとづいて慎重に融通性のある戦術を採用したのであつた。

レーニンは偉大なマルクス主義者としてプロレタリア革命闘争の歴史の舞台にあらわれたとき、その最初の名著『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とた

たかっているか?』の結びで、ロシアのプロレタリアートの革命的戦略の問題をひじょうにはつきりと提起した。レーニンはのべている。

「労働者階級の先進的代表者たちが科学的社会主義の諸思想、ロシアの労働者の歴史的役割についての思想をわがものにするとき、また、これらの思想がひろく普及して、労働者のあいだに、現在ののばらばらな労働者の経済闘争を意識的な階級闘争に転化する恒久的な諸組織がつくりだされるとき——そのとき、ロシアの労働者は、いつさいの民主主義的分子の先頭に立ちあがって、絶対主義をうちたおし、ロシアのプロレタリアートを（万国のプロレタリアートと手をたずさえて）公然たる政治闘争のまっすぐな道にそい、勝利的な共産主義革命へとすすませる」⑭と。

レーニンの提起したこの戦略原則は、そのごずつとロシアのプロレタリアートの前衛とロシア人民の解放闘争を指導する全般的方向であつた。

レーニンは終始このような戦略原則を堅持した。この戦略原則を堅持するため、かれは妥協することなくロシアのナロードニキ、「合法的マルクス主義者」、経済主義者、メンシェビイキ、第二インターナショナルの日和見主義者、修正主義者と闘争し、トロツキーやブハーリンと闘争した。

一九〇二年、ロシア社会民主労働党の綱領をさだめたとき、プロレタリアートの戦略原則をゆ

ぐつて、レーニンとブレハノフのあいだに重大な意見の相違があらわれた。レーニンは、プロレタリアート独裁を党の綱領のなかに書きいれるようあくまでも主張するとともに、革命における労働者階級の指導的役割を党の綱領のなかではつきり指摘するよう要求した。

一九〇五年の革命のさい、レーニンは『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』を書き、そのなかで、果敢に闘争を指導し、果敢に勝利をたたかいたロシアのプロレタリアートの英雄的な気概をしめした。レーニンは、民主主義革命におけるプロレタリアートの指導権の学説を全面的に提起し、労働者階級を指導者とする労働同盟の学説を全面的に提起し、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への転化にかんするマルクス主義の学説を発展させた。

第一次世界大戦の時期、レーニンは『第二インターナショナルの崩壊』、『資本主義の最高の段階としての帝国主義』など、きわめて重要なマルクス主義的文献をあらわして、プロレタリアートの戦略思想を新たな段階に高め、帝国主義はプロレタリア社会主義革命の前夜であり、プロレタリアート革命はまず一国あるいは数ヶ国で勝利をおさめることができるということを指摘した。これらの戦略思想は偉大な十月革命の勝利のために道をひらいた。

こうした例はほかにたくさんある。

具体的な戦術の問題については、レーニンはいつもそれぞれの状況におうじてプロレタリアー

トの行動をさだめた。たとえば、プロレタリアートの政党は、どのような条件のもとでは議会に参加し、どのような条件のもとでは議会をボイコットすべきであるか、どのような条件のもとではこういう同盟を組織し、どのような条件のもとではああいふ同盟を組織すべきであるか、どのような条件のもとでは必要な妥協をおこない、どのような条件のもとでは妥協をこばむべきであるか、どのようなばあいには合法闘争をおこない、どのようなばあいには非合法闘争をおこなうべきであるか、また、この二種類の闘争方式をどのように弾力的に結びつけるか、どのようなときには進撃し、どのようなときには退却し、迂回前進すべきであるか、などがそれである。これらの問題については、レーニンは『共産主義内の「左翼主義」小児病』のなかでつつこんで系統的に解明している。

レーニンはいみじくもいつている。

「第一に、革命的階級は、その任務を実現するためには、すこしの例外もなしに、社会活動のあらゆる形態、あるいは側面をわがものにするのができなければならない……第二に、革命的階級は、一つの形態が他の形態にどんなに急速に、不意にとつてかわつても、それに応じられるようであればならない。」⑬

レーニンは、さまざまの闘争形態についてのべたとき、また、つぎのようにも言っている。各



国の共産主義者はそれぞれの国で統一した国際的任務を解決するため、労働運動内部の日和見主義、左翼教条主義にうちかつたため、また、ブルジョアジーをうち倒し、プロレタリアート独裁をうちたてるために具体的な方法をとるばあい、それぞれの民族の特徴と特性を考察し、研究し、探究し、評価し、把握しなければならぬ、と。闘争のなかで自民族の特徴を考慮にいれないのはまったく誤りである。

レーニンの思想によると、プロレタリア政党のいつさいの具体的な戦術はすべて、いく干いく万の大衆を組織し、広はん同盟者を動員し、最大限に人民の敵を孤立させ、帝国主義者とその手先を孤立させ、そうすることによって、プロレタリアートの解放と人民の解放という全般的な戦略目標を実現するためのものにほかならない。つまり、レーニン自身がのべているように、「闘争の形態は、種々な、比較的部分的で一時的な原因によって変化しうるし、またたえず変化しているが、闘争の本質、その階級的内容は、階級が存在するかぎり、まったく変化しえない」⑬のである。

#### 中国の共産主義者の戦略思想と戦術思想

中国の共産主義者はマルクス、エンゲルス、レーニンの思想にもとづいて、中国革命の具体的

実践のなかで中国革命の戦略と戦術をさだめた。

中国の共産主義者の戦略思想と戦術思想については、毛沢東同志はつぎのことばのなかで概括的な説明をおこなっている。

「全世界の帝国主義と中国の蒋介石反動集団の支配は、もはや腐りきっていて、前途がない。

われわれにはかれらを軽視する理由があり、われわれには中国人民のあらゆる内外の敵のうち勝つ見通しがあり、確信がある。だが、個々の局部、個々の具体的な闘争の問題では（軍事的、政治的、経済的、思想的闘争のいずれを問わず）、けっして敵を軽視してはならず、それとは逆に、敵を重視し、全力を集中して戦わなければ、勝利はおさめられない。われわれが、全体的に、戦略的には敵を軽視すべきであると正しく指摘するばあいにも、個々の局部、個々の具体的な問題においてはけっして敵を軽視してはならない。もしわれわれが全体的に敵の力を過大評価し、そのために、すすんでかれらを打倒しようと思せず、勝利をかちとろうとしないならば、われわれは右翼日和見主義の誤りを犯すことになる。もしも、われわれが個々の局部、個々の具体的な問題について慎重な態度をとらず、闘争の芸術を研究せず、全力を集中して戦わず、獲得すべきすべての同盟者（中農、独立工商業者、中産階級、学生、教員、教授その他一般知識人、一般公務員、自由職業家、開明紳士）を獲得することに意をそそがないならば、われわれは「左」翼、

日和我主義の誤りをおかすことになる」⑩と。

毛沢東同志はここで、プロレタリアートの闘争の全局的な問題、つまり戦略の問題について、ひじょうにはつきりと述べており、あいまいなところがすこしもない。またプロレタリアートの闘争の個々の局部的な問題、個々の具体的な問題、つまり戦術の問題についても、ひじょうにはつきりと述べており、あいまいなところがすこしもない。

全局的、戦略的にはなぜ敵を蔑視してもよいのか？ それは、帝国主義とすべての反動派が腐敗した、前途のないものであり、打倒できるものだからである。この点を見てとらなければ、果敢に革命闘争をすすめることができません、革命への確信をうしない、人民を迷路へひきいれることになる。具体的な闘争のなかで、戦術的にはなぜ敵を軽視してはならず、敵を重視しなければならぬのか？ それは、帝国主義者と反動派がまだ支配の機構をにぎつており、まだ完全に武装しており、まだ人民のあいだで欺瞞的な役割をはたしているからである。プロレタリアートと人民大衆が帝国主義者と反動派の支配をくつがえすためには、かならず尖鋭なまがりくねった闘争をおこなわなければならない。帝国主義者と反動派の支配の王座が自壊するようなことはありえないのである。

いかなる革命的党派でも、もし古い制度をくつがえす戦略目標を放棄し、敵を打倒できること

を信ぜず、自分が勝利できることを信じないなら、革命闘争をすすめるよりなこととはしない。また、もし革命の目標を提起するにとどまり、革命闘争のなかで真剣に、慎重に敵に対処せず、一歩一歩と革命勢力をつみあげ、拡大することをせず、ただ革命を空談義にかえ、または盲めつばうに行動するだけなら、革命は予期の勝利をおさめることができない。プロレタリア政党にとつて、事態はなおさらそうである。プロレタリア政党はプロレタリアートの戦略原則を堅持すると同時に、もしも革命闘争の個々の具体的な問題で敵を重視し、敵と闘争することに長じるなら、たとえプロレタリアートの力が劣勢であったとしても、結局は毛沢東同志のいうように、「時がたつにつれて、われわれは全体的にも優勢に転じることになるであろう」⑪。つまり、戦術のうえで、具体的な闘争の問題で敵を重視し、そのつど個々の具体的な闘争の勝利をうることにつとめるなら、革命の勝利の到来をはやめることができ、革命の勝利をひきのばしたり、おくらせたりすることはありえない。

プロレタリア政党は、戦術のうえで敵を重視し、具体的な闘争の勝利をかちとるなら、まずまず多くの大衆に自分じしんの経験をつうじて、敵は打倒しうるものであることを信じさせ、われわれが敵を蔑視するのは理由があり、根拠があることを信じさせることができる。中国にはむかし、天下の大事は必ず細より作る、合抱の木は毫末より生ず、九層の台は累土より起る、千里の

行は足下より起る、ということばがあつた。革命的人民が反動派をくつがえすのも、道理はおなじである。つまり、ひとつひとつの、かすかすの具体的な闘争をおこない、その具体的な闘争の勝利をたたかいてこそはじめて、最終的に反動派をうちたおす目的をとげることができるのである。

毛沢東同志は、「中国革命戦争の戦略問題」のなかで、「われわれの戦略は『一をもって十にあたる』のであるが、われわれの戦術は『十をもって一にあたる』のである。これは、われわれが敵にうち勝つ根本法則の一つである」とのべ、また、「われわれは少数をもって、多数にうち勝つものである——われわれはすべての中国の支配者にむかつてはこのようにいう。われわれはまた多数をもって少数にうち勝つものである——われわれは、戦場で作戦している個々の局部的な敵にむかつてはこのようにいう」<sup>⑩</sup>とのべている。これは軍事闘争の原則であるが、この原則は政治闘争にも適用される。史上、ブルジョアジーの革命派をふくめ、すべての革命派はさいしよ例外なく少数であり、彼らに指導される勢力は例外なくわりに弱小であつた。敵にたいする闘争のなかで、もし戦略的に「少数をもって多数にうち勝ち」、「一をもって十にあたる」という気概がなければ、ただ軟弱無能の状態におちいるだけであつて、なにごともしとげることができず、最後に多数をからとることもできない。それとは逆に、もし戦術的に、具体的な闘争で、

大衆を組織することを知らず、結集できるすべての同盟者を結集することを知らず、敵の相互のあいだに客観的に存在する矛盾を利用することを知らず、「多数をもって少数にうち勝ち」、「十をもって一にあたる」という闘争の方法を運用することができず、そして、具体的な闘争のなかですべての必要な準備をととのえることができないなら、個々の具体的な闘争の勝利を勝ちとることができず、小さな勝利をあつめて大きな勝利とすることができないどころか、敵のために各個撃破され、革命の力を浪費することになる。

### ひとつの鏡

要するに、戦略と戦術の関係については、プロレタリアートの政党は勤労者を解放するという最終目的にじゅうぶん気をくばらねばならず、敵を圧倒する気概と信念をもたねばならず、目先のごく小さな利益と勝利に目がくらんで最終目的を忘れてはならず、敵が表面的、一時的に強大だからといって人民革命の勝利への確信を失ってはならない。同時にまた、見たところそれほど目ざましくなく小さな闘争でも、日常の闘争を重視しなければならず、個々の具体的な闘争のなかでよく準備をととのえ、大衆を結集する仕事をりっぱにやり、闘争の芸術を研究し、個々の具体的な闘争でできるだけ勝利をおさめ、これによつてたえず大衆を教育し、これを上げます

ようにしなければならぬ。ごく小さな闘争もふくめて、多くの具体的な闘争があつまり、それが発展してゆくなら、古い制度をゆるがす力となるのだということを、十分に計算にいれておかなければならない。

これからもわかるように、問題は非常ににつきりしている。戦略と戦術のあいだには、区別される場所もあれば、一致する場所もあるのであつて、これこそマルクス・レーニン主義者が問題を見る弁証法にほかならない。あるものは、「戦略のうえでは敵を蔑視し、戦術のうえでは敵を重視する」ということを「スコラ哲学」といい、「二面的な態度」といつている。われわれにはわからない、かれらの「哲学」というのは一体どういうものなのだろうか？ かれらの「一面的な態度」というのは一体どういうものなのだろうか？

「レーニンは「わが革命について」という文章のなかで、これらの日和見主義の英雄たちについてつぎのようにいつている。

「かれらはみな、マルクス主義者と自称しているが、しかし、マルクスを信じられないほど術学的に理解している。かれらは、マルクス主義における決定的なもの、つまり、その革命的弁証法をまったく理解しなかつた」<sup>②①</sup>と。

おなじ文章で、レーニンはまた、つぎのようにもいつている。

「かれらはその行動全体を通じて、ブルジョアジーからはなれることをおそれ、ブルジョアジーと手をきくことはなおさらおそれる臆病な改良主義者としての正体を暴露しており、それとともに、まったくくだらない美辞麗句と大言壮語で自分の臆病をかくしている」<sup>②②</sup>と。

中国共産党を攻撃する人びとにたいしては、レーニンのこれらのことをよく読むようにすめたい。これらのことは、いちぶの人びとにとつてまことに政治上の鏡となりうるものである。

① イタリア共産党第十回大会でのトリアッチの報告

② トリアッチの「討論をその真実の限度にもどそう」参照

③ 一九五七年、共産党・労働者党代表者モスクワ会議における毛沢東同志の発言。「帝國主義とすべて  
の反動派はハリコの虎である」参照

④ 「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話」の解題を参照。「毛沢東選集」第四卷

⑤ 「政治経済学批判」序言。「マルクス・エンゲルス全集」第一三卷

⑥ 「いっさいの偽りをなくせ！ われわれの力は真実を言明するところにある！」。『レーニン全集』

- ⑦ スターリンの『弁証的唯物論と歴史的唯物論』
- ⑧ 「ドゥーム」に対する態度についての社会民主党ベテルブルグ委員会の決議（Ⅱ）。「レーニン全集」第一〇巻
- ⑨ 『マルクス・エンゲルス全集』第四巻
- ⑩ 「カール・マルクス」。「レーニン全集」第二二巻
- ⑪ 「マルクス・エンゲルス往復書簡集」
- ⑫ 『フランスの内戦』
- ⑬ 「パリ・コミューン二一周年によせて」。「マルクス・エンゲルス全集」第二二巻
- ⑭ 『レーニン全集』第一巻
- ⑮ 『レーニン全集』第三二巻
- ⑯ 『資本主義の最高の段階としての帝国主義』。「レーニン全集」第二二巻
- ⑰ 「当面の党の政策におけるいくつかの重要問題について」。「毛沢東選集」第四巻
- ⑱ 「当面の情勢とわれわれの任務」。「毛沢東選集」第四巻
- ⑲ 『毛沢東選集』第一巻
- ⑳ 『レーニン全集』第三三巻

## 七二二の戦線における闘争

現代修正主義は国際労働運動の主要な危険である

イタリア共産党は、いまのところ、資本主義世界のなかでも大きな党のひとつである。この党は、暗黒きわまるファッショ支配の時期に英雄的な闘争をすすめた。イタリア共産党は、光榮ある闘争の伝統をもっている。第二次世界大戦の時期に、イタリア共産党は自国の人民を指導して、ファシズムに反対する武装蜂起と游撃戦争を勇敢におしすすめた。人民武装部隊はムッソリーニをとらえ、このファシズムの魔王を死刑にした。

イタリア共産党の戦闘的な業績はイタリア人民の同情と支持をえた。これはしごく当然なことである。

第二次世界大戦後、イタリアの資本主義は平和な発展の時期にあつた。イタリア共産党はこの

時期に合法闘争の方式を利用して多くの仕事をした。合法闘争の条件は、労働者階級の政党の活動に積極的な役割をもっているが、もしも労働者階級の政党が合法闘争のなかで革命的な警戒心と断固たる態度に欠けるなら、他の面で消極的な役割をうみだす可能性もある。この点、マルクス、エンゲルスも、レーニンもつねつねプロレタリアートの警戒心を喚起していた。

では、第二次世界大戦後、どうして修正主義が国際労働運動の主要な危険と一般に認められるようになったのか？ これは、第一には、史上、多くの国ぐにが提供した合法闘争のいろいろな経験と教訓によるのである。第二には、世界の現実のなかに日和見主義、修正主義を助長する条件があるからである。第三には、事実上、チトー一味を代表とする現代修正主義があらわれたからである。

トリアッチ同志らの多くの論点からみれば、率直にいつて、イタリア共産党の内部にもこうした危険がある。さいきん、フランス共産党のいちぶの同志は一連の文章を書いて、革命的マルクス・レーニン主義者を攻撃し、中国の共産主義者を攻撃している。国際共産主義運動のいくつかの根本問題をめぐるかれらの論点は、ほとんどトリアッチ同志らの論点と同様である。そればかりではない。さいきん、国際共産主義運動の隊列のなかには、「みな一族をなして、たがいにはめあい、たがいにまなびあい、いつしよになつて『教条主義的』マルクス主義にたいし武

器をとっている」①とレーニンがいったような、そうした人物が同時にあらわれてきている。これは奇怪しごくな現象である。けれども、すこしでもマルクス・レーニン主義を知っていさえすれば、また、この現象に分析をくわえさえすれば、この現象はけつして偶然のものでないことがわかる。

現代修正主義はいちぶの資本主義国にあらわれているばかりでなく、社会主義国にもあらわれる。チトー一味はまさきに修正主義の旗をかかげ、かつて社会主義国であつたユーゴスラビアを一步一步と変質させていった。チトー一味は、はやくから政治上アメリカ帝国主義者その他の帝国主義者の手先になりさがつたばかりでなく、経済上でもユーゴスラビアをアメリカ帝国主義の付属物にし、ユーゴスラビアの経済を帝国主義者のいわゆる「自由化された経済」に一步一步かえつつある。

一九二一年五月、レーニンはロシア共産党第十回全国協議会でつぎのようにのべた。

「ミリュコフこそ正しいのだ。彼は政治的發展の段階をまったく冷静に考慮しており、資本主義への逆行に必要な小段階は、エス・エル主義とメンシェヴィズムであると云っている。ブルジョアジーにはこの小段階が必要であるが、これを理解しないものは愚か者である。」②

このレーニンのことばはまことに適切であつて、まるで数十年後のチトー一味にたいする予言

のようにおもわれる。

ではどうして社会主義国にも、修正主義があらわれるのか？ それは、一九五七年のモスクワ宣言のべてであるとおわり、「ブルジョアジーの影響があることが修正主義の国内的根源であり、帝国主義の圧力に屈服することがその国外的な根源である」③

一九六〇年のモスクワ声明は、国際労働運動の主要な危険は修正主義であるというこのモスクワ宣言の重要な論点をかきねて明らかにするとともに、また国際日和見主義のユーゴスラビア的変種をも非難した。声明がつぎのように指摘しているのは、まったく正しい。「ユーゴスラビア共産主義者同盟の指導者たちはマルクス・レーニン主義を裏切り、マルクス・レーニン主義を時代おくれのものだと宣言し、自己の反レーニン主義的な修正主義的綱領を一九五七年の宣言に対抗させて、ユーゴスラビア共産主義者同盟を国際共産主義運動ぜんたいに対抗させ、自国を社会主義陣営から切り離してアメリカその他の帝国主義者のいわゆる『援助』に依存させ、それによってユーゴスラビア人民の英雄的な闘争でえられた革命的成果を失う危険をつくりだした。ユーゴスラビアの修正主義者は、社会主義陣営と世界共産主義運動にたいし破壊工作をおこなっている。かれらはブロック不参加政策という口実にかくれて、すべての平和を愛する勢力と諸国家の団結を破る活動をくりひろげている」④

モスクワ声明はまたつぎのようになっている。「ユーゴスラビア修正主義者の指導者を今後とも暴露し、共産主義運動と労働運動をユーゴスラビア修正主義者の反レーニン主義的思想の影響から守るために積極的になたかうことは、依然として各国のマルクス・レーニン主義党の欠くことのできない課題である」④

このおごそかなモスクワ声明には、八一の党の代表が署名した。このなかには、イタリアの党の代表も、フランスの党の代表も、社会主義諸国の党の代表もふくまれている。だが、署名の墨痕がまだかわかないうちに、いちぶの党の指導者はとつぜんチトー一味を兄弟よばわりするにいたっている。

トリアッチ同志は、ユーゴスラビアのチトー一味にたいする一九六〇年のモスクワ声明の立場は「誤って」いたと公言し、「『チトー一味』をのしつても、われわれは絶対に一步も前進できないばかりか、かえって何歩も後退することになる」⑤などといっている。ある人はまた、「ユーゴスラビア共産主義者は全世界共産主義運動への接近と団結の方向に歩みをすすめた」、「一連のきわめて重要な国際問題について」、チトー一味の立場はかれらの立場と「符合し、接近している」などといっている。かれらはことばと行動が一致しておらず、モスクワ宣言とモスクワ声明をお役所の作文とみなしている。かれらは自己を弁護するため、手段をえらばずモスク

ワ声明をふみにじり、修正主義が当面の国際共産主義運動と労働運動における主要な危険だとは認めず、「教条主義とセクト主義が最近、国際共産主義運動と労働運動の主要な危険になった」

⑥と考えている。最近ひらかれたドイツ社会主義統一党第六回大会では、中国共産党の代表がそのあいさつのなかでモスクワ声明を堅持し、チトー一味の修正主義を非難したとき、無礼きわまる態度でむかえられたのになし、大会に出席したチトー一味の代表は熱狂的な歓迎をうけた。それでもなお、「一致してとりきめた世界共産主義運動の共同路線を一貫してまもっている」などといえるだろうか？ だれでも知っているように、これはねりにねった計画のもとにおこなわれた、味方を痛心させ、敵に快哉をさげばせる行為である。

以上のさまざまなやり方によつて、みるみるうちにチトー一味の「相場がはねあがった」。いちぶの人びとがそのようにふるまつたねらいは、チトー一味をかれらの「思想の中心」にまつりあげ、チトー一味の代表する現代修正主義をマルクス・レーニン主義にとつてかわらせ、チトー一味の現代修正主義の綱領、あるいは他のなんらかのものをモスクワ宣言とモスクワ声明にとつてかわらせようとするにある。

ある人はつねづね「時計をあわせる」べきだといっているではないか？ いまのところ、時計は二種類ある。そのひとつはマルクス・レーニン主義の時計、モスクワ宣言とモスクワ声明の時

計であり、いまひとつはチトー一味を代表とする現代修正主義の時計である。いつたい、どちらの時計にあわせるのか？ マルクス・レーニン主義の時計、モスクワ宣言とモスクワ声明の時計なのか？ それとも現代修正主義の時計なのか？

ある人は、われわれが現代修正主義に反対することを許さないばかりか、われわれが第二インター時代の代ける古い修正主義に言及することも許さない。ところが、かれら自身は、古い修正主義者の歌を得意満面くどくどくり返している。エンゲルスは、『住宅問題』第二版への序文のなかでブルードン主義にふれたさい、「ある程度までちいつて近代的社会主義を研究するものは、運動の『克服された見地』をも知らなければならぬ」というたことがある。かれは、社会にひきつづきこうした見地をうむ条件があるかぎり、こうした見地あるいはその傾向は一再ならず現われてくるものである、と考えた。「もしこの傾向がのちにいつかもつとも確乎たる形態をとり、一定の輪廓をもつようになれば、……かれらはその綱領を複製するさいに彼らの先輩のところにもどらなければならぬであろう」⑦。いま、われわれは、現代修正主義に反対するためには、もちろんかれらの先輩を研究し、歴史の教訓を研究し、現代修正主義者がどのようなにしてかれらの先輩のところへもどつていつたかを研究しなければならぬ。はたしてこれはやつてはいけないことだろうか？ どうしてこれが「まったくゆるぎない歴史の比較」なの



だろうか？ これはなにかタブーでもおかしなことになるだろうか？

これらの人びとが、ベルンシュタイン、カウツキーなど旧い修正主義者の歌をくりかえし、旧い修正主義者の見地、旧い修正主義者の手口、旧い修正主義者のことはをつかつてマルクス・レーニン主義者を攻撃、誹謗し、中国の共産主義者を攻撃、誹謗している以上、かれらもまた、われわれが旧い修正主義者へのレーニンの批判をもってかれらに回答するのを禁じる理由はないのである。

レーニンはつぎのようにのべている。

「ベルンシュタイン主義者は、そっくりそのまま、自分らこそプロレタリアートの真の必要を、すなわち、プロレタリアートの勢力を成長させ、全活動をふかめ、新しい社会の諸要素を準備し、宣伝と煽動を行なう任務を、理解している、とくりかえし言ってきたし、いまでも言っている。われわれは、あるがままのものをあからさまにみとめることを要求する！——ベルンシュタインは、こういつて『終局目標』のない『運動』を神聖化し、防衛戦術だけを神聖化し、『ブルジョアジーが尻ごみしはしないか』と恐怖する戦術を説教する。ベルンシュタイン主義者もまた、革命的社会民主主義者の『ジャコバン主義』とか、『労働者の自主活動』を理解しない『文筆家』とか、その他そういうふうのことをわめきちらした。実際には、だれでも知っているよう

に、革命的社会民主主義者は、日常の小さな活動、勢力の準備、その他等々を放棄しようなどと考えたことはなかった。かれらはただ、終局目標を明瞭に意識し、革命的任務を明瞭に提起することを、要求しただけであった。かれらは、半プロレタリア・半小ブルジョア層をプロレタリアートの革命性までたかめようとのぞんだのであって、『ブルジョアジーが尻ごみしはしないか』という日和見主義的な考えにプロレタリアートの革命性を引きさげようとは思わなかったのである。党のインテリゲンツィアの『日和見主義的一翼とプロレタリア的『革命的一翼とのこの反目を、おそらくもつともあさやかに表現したのは、*Dürfen wir siegen?*』われわれは勝利してもよいのか？』、われわれは勝利してさしつかえないのか？ 勝利することはわれわれにとって危険ではなからうか？ われわれは勝利すべきだろうか？ といった質問であった。この質問は、一見したところ、奇異に感じられるが、実際に提出されたし、また提出されざるをえなかった。なぜなら、日和見主義者たちは勝利をおそれ、プロレタリアートをおどして勝利をひかえさせ、勝利すると困ったことが生じると予言し、はつきりと勝利を呼びかけているスローガンをあざわらったからである。」⑥

われわれが引用したこのレーニンのことは、たしかにあらたな歴史的條件のもとにおけるベルンシュタイン主義の復活を説明することができ、マルクス・レーニン主義者と現代修正主義者

との意見の相違の実質を説明することができる。

「われわれの学説は教条ではなくて、行動の指針である」

「創造的なマルクス・レーニン主義者」と自任するいちぶの人びとは、時代が変わった、条件もちがっている、マルクスやレーニンの口にした根本原理はもはやくりかえす必要がない、といっている。かれらは、われわれがマルクス・レーニン主義の古典を引用して問題を説明することに反対し、こうした引用を「教条主義」とよんでいる。

「教条」の束縛からぬけだすことを口実にマルクス・レーニン主義をなげ捨てるということ、これはひじょうに便利な手口である。レーニンはやくから日和見主義者のこうした手口をバクロし、「『教条』とはなんと便利なことばだろう！ 論敵の理論をちよつと歪曲し、『教条』というかかしでこの歪曲を隠蔽すれば足りるのだ——それで、万事できあがりなのだ！」<sup>⑨</sup>といっている。

だれでも知っているように、レーニンが生活し、闘争した時代は、マルクス、エンゲルスの生きた時代とは大いに異なっていた。レーニンはマルクス主義を全面的に発展させて、マルクス主義を新たな段階つまりレーニン主義の段階へとおしすすめた。レーニンは、自己の生きた時代

の新しい状況と新しい特徴にもとづいて多くのすぐれた著書をあらわし、マルクス主義理論の宝庫を大いにゆたかにし、プロレタリア革命の戦略と戦術についての思想を大いにゆたかにし、国際労働運動にたいして新たな方針と新たな任務を提起した。マルクス主義の根本原理をまもり、マルクス主義の純潔をまもり、マルクス主義にたいする日和見主義者、修正主義者の歪曲とじゅうりに反対するため、レーニンは、その著書のなかでマルクスとエンゲルスの書いたものをたくさんくり返しくり返し引用した。たとえば、『国家と革命』というマルクス主義の理論にとつてもつとも根本的な意義のあるこの偉大な著書のなかでは、レーニンはなおさら煩瑣をいとわず多くの引用をおこなっている。レーニンはこの書物の第一章でつぎのようにのべている。

「マルクス主義をわい曲する気風が未曾有にひろがっているとき、われわれの任務は、なによりもまず、マルクスの真の国家学説を原状に復することである。このためには、マルクス、エンゲルス自身の著作から、幾多の長い引用をする必要がある。もちろん長い引用文は、叙述をおもくしくするのであるが、平易にするたしにはすこしもならないであろう。だが、引用文なしですませることはまったく不可能である。読者が、科学的社会主義の創始者たちの見解全体と、この見解の発展について独自の意見をもてるようになるためには、また、今日支配的な『カウツキ主義』がこの見解を歪曲していることを文献的に立証して、明瞭に指摘するためには、マルク

ス、エンゲルスの著作から、国家の問題について述べた箇所をみな、すくなくとも決定的な箇所はみな、できるだけ完全な姿で、かならず引用しなければならぬ。」<sup>⑩</sup>

これを見てもわかるように、マルクス主義が横暴にもふみにじられたとき、レーニンもマルクスとエンゲルスのことばをたくさん引用した。いま、レーニン主義が横暴にもふみにじられているとき、すべての革命的マルクス・レーニン主義者はやはりレーニンのことばを引用しないわけにはゆかない。なぜなら、このようにすれば、マルクス・レーニン主義の真理を修正主義、日和見主義のまちがった理論とはつきり対照させることができるからである。

以上のところからも明らかのように、マルクス・レーニン主義の文献を引用することは、いちぶの人のいうような「罪」では決してない。問題は、引用する必要があるかどうか、どのように引用するか、引用が正しいかどうかということである。

ある人は、われわれがマルクス・レーニン主義の文献を引用して立証しようとするテーマをわざとさげ、われわれがどんなことばを引用したのかということさえ世に公表する勇気がなく、ただ簡単に、われわれが「一節また一節と引用している」<sup>⑪</sup>といつて攻撃している。フランス共産党の機関紙『ユマニテ』は中国共産党を攻撃し、われわれが「マルクス・レーニン主義をただいくつかの硬直した公式しかのこらないところまで歪曲し、マルクス・レーニン主義の偉大な伝道

師として教条をひろめる権利を自分しんにあたえた」<sup>⑫</sup>とまでものべている。かれらがお手のものど自負することのようなひどいことばでわれわれを攻撃しているのは、いつたいなにを物語っているだろうか？ それはかれらの二種の気持ちを反映するものにほかならない、つまり、かれらはマルクス、エンゲルス、レーニンのことばを見るやいなや、はげしい反感におそわれるのである。他のものがマルクス・レーニン主義の「伝道師」となることに反対するこれらの人びとは、実際には、マルクス・レーニン主義反対の「伝道師」となり、ブルジョア思想の「伝道師」となってしまったのである。

ある人びとは、われわれがマルクス・レーニン主義の文献を引用してマルクス・レーニン主義の根本原理を説明することをはげしく攻撃している。それなのに、かれらじしん実際にはベルンシュタイン、カウツキー、さらにはチトーのことばをくどくどとくり返している。かれらの根本的な論点の多くはみなベルンシュタイン、カウツキー、チトーのところから剽窃してきたものである。

なおまた、一方ではかれらのいわゆる「教条主義」をさかんに攻撃しながら、他方では聖書のなかの教条をとくべつ好む人たちもいる。かれらの頭脳のなかには聖書のたぐいがいっぱいまつていて、マルクス・レーニン主義は影も形もみえはしない。

レーニンがつねづね、「われわれの学説は教条ではなく、行動の指針である」というマルクス、エンゲルスのことばをくりかえし口にした。いま、いちぶの人がわれわれを「教条主義者」だと宣伝しているとき、われわれはかれらにむかつて率直にいいたい。中国共産党は教条主義反対の問題についてはゆたかな経験をもっている、と。二十余年前、われわれは毛沢東同志の指導のもとで教条主義に反対する闘争をめぐりにすすめたことがあり、そして今日までずっと教条主義反対の闘争に注意をはらっている。

真のマルクス・レーニン主義者は、書物のうえにあげらるるをかくのではなく、マルクス・レーニン主義の方法によつてその時の国際、国内の具体的環境、具体的状況、具体的条件を分析し、實際闘争のさまざまな経験を研究し、自己の行動の方針をきめることに長じていなければならぬ。毛沢東同志は、「マルクス主義の核心、その精髓をなす点は、すなわち具体的情勢の具体的分析である」<sup>⑬</sup>というこのレーニンの名言を銘記するよう、たえずわれわれの注意を喚起している。毛沢東同志はわれわれの隊列のなかの教条主義者を批判して、かれらは、「なまけものであり、かれらは具体的な事物にたいして、どのような骨の折れる研究活動をおこなうこともばち」<sup>⑭</sup>とのべている。

一九四二年、「党の作風をただせ」という報告のなかで毛沢東同志は、教条主義をつぎのよう

にきびしく批判している。

「いまでも、まだマルクス・レーニン主義文献にある個々の辞句をできあいの万能薬とこころえ、これを手にいれさえすれば、すこしも骨を折らずに、万病を治すことができると思いこんでいるものが少なくない。これは幼稚な人々の無知からきたものであり、われわれはこれらの人びとにたいして啓蒙運動をおこななければならぬ。マルクス・レーニン主義を宗教的教条として信奉しているものこそこうした無知無学の人びとである。こうした人びとにたいしては、率直にこういつてやらねばならない。君の教条はなんの使いみちもないのだ、と。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンは、くり返し、くり返し、われわれの学説がけつして教条ではなくて、行動の指針であると説いている。さきの人びとは、ほかでもなくこのもつとも重要なもつとも肝要なことばをすっかり忘れている。中国の共産主義者が、マルクス・レーニン主義の立場、見地、方法をりつぱに応用し、中国革命についてのレーニンとスターリンの学説をりつぱに応用し、さらにすすんで、中国の歴史の実際と革命の実際についての真剣な研究のなかから、あらゆる面で、中国の必要になつた理論的な創造をおこなつたばあいにのみ理論と実際とが結びついたといえるのである。口先で結びつきを説くだけで、行動の上で結びつこうとしないならば、百年説きつづけようとも、それは何の役にもたない。われわれは、主観的に一面的に問題をみる

ことに反対するものであり、教条主義の主観性と一面性をうちやぶらなければならぬ」⑮と。

いま、必死になつて教条主義反対をわめきたてているこれらの人びとは、教条主義とは一体なにかということがてんでわかつておらず、教条主義にいかんにか反対するかということとはなほさらわかつていない。かれらは、時代も変わった、状況も変わった、「マルクス・レーニン主義を創造的に発展させ」なければならぬと口ぐちにわめきちらしている。けれども、その実、かれらはブルジョアジーの实用主義プラグマティズムを用いてマルクス・レーニン主義を修正しているのである。かれらは、時代の変化の本質も情勢の変化の本質もはつきりと見きわめておらず、現代世界の矛盾の問題が根本的にわかつておらず、現代世界の矛盾の焦点はなにかということもせんぜんわかつていない。かれらは、客観的な事物の法則性をつかむことができないので、時によつて、こうすることもあれば、ああることもあり、投降主義におちいることもあれば、冒險主義におちいることもある。目先のできごとに調子をあわせて、プロレタリアートの根本的な利益を忘れるということ、これがかれらの思想と行動の特徴である。したがつて、かれらには原則的な政策というものがない。かれらはつねに敵味方を区別せず、さらには敵味方をとりちがえて敵を味方にし、味方を敵にしている。

レーニンは「俗物はしつかりした世界観や完璧な党戦術の諸原則をけつして指針としない。俗

物はいつも流れにしたがい、自分の気分が盲目的に身をまかせる」⑯といつてゐる。いま、いぢぶの人びとはまさにこのとおりではないだろうか？

### マルクス・レーニン主義の普遍的真理と自國の革命の具体的実践をむすびつける

毛沢東同志は、二十余年前、わが党内でマルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践をむすびつけるという有名な命題を提起した。これは、中国共産党が長いあいだ右翼日和見主義にも反対し、「左」翼日和見主義にも反対するというこの二つの戦線であつてきた経験をもとめたものである。

マルクス・レーニン主義の普遍的真理と自國の革命の具体的実践をむすびつけるというこの命題には、二つの側面がふくまれている。ひとつの側面はいついかなるときでもマルクス・レーニン主義の普遍的真理を堅持しなければならないということである。もしもそうしなければ、右翼日和見主義または修正主義の誤りをおかすことになる。もうひとつの側面はつねに実際の生活から出発し、密接に大衆とつながり、たえず大衆闘争の経験をまとめ、実践の経験にもとづいて自己の仕事を考察しなければならないということである。もしもそうしなければ、教条主義の誤りをおかすことになる。

では、なぜマルクス・レーニン主義の普遍的真理を堅持しなければならないのか？ なぜマルクス・レーニン主義の根本原理を堅持しなければならないのか？ レーニンは、「マルクスの学説は、正しいので全能である。それは、完全で、整然としていて、どんな迷信、どんな反動ともあいれず、ブルジョアの圧制を擁護することはおよそあいいれない全一的な世界観を人びとにあたえる」<sup>⑩</sup>と述べている。マルクス・レーニン主義の普遍的真理、いかえれば、マルクス・レーニン主義の根本原理は、空想から出てきたものでもなければ、主観でこねあげられたものでもなく、人類の闘争の歴史ぜんたいの経験をもとめ、国際プロレタリアートの闘争の経験をまとめた科学的な結論である。

ベルンシュタインらしい、さまざまの修正主義者、日和見主義者は、いつも新しい変化とか、新しい状況とかを口実にして、マルクス主義の普遍的真理は時代おくれになつたと言つてきた。だが、ここ百年あまりのあいだ、全世界におこつたすべてのできごとがたえず立証しているように、マルクス・レーニン主義の普遍的真理は世界のどこへもついてもあてはまるものである。この普遍的真理は、西方に適用されるばかりでなく、東方にも適用される。偉大な十月革命によつて証明されているばかりでなく、中国革命によつても証明され、世界各国のすでに勝利した革命によつても証明されている。欧米資本主義国のこれまでの労働運動によつて証明されてい

るばかりでなく、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの多くの国々に現にすすめられている偉大な革命闘争によつても証明されている。

一九一三年、レーニンは、「カール・マルクスの学説の歴史的運命」と題する文章のなかで、マルクス主義が出現していろいろ、世界史のどの時代も、「それぞれマルクス主義に新しい確証と新しい勝利をもたらした。しかし、きたるべき歴史の時代は、プロレタリアートの学説としてのマルクス主義に、いつそう大きい勝利をもたらすであろう」<sup>⑪</sup>と述べている。

一九二二年、レーニンは、「職闘的唯物論の意義について」と題する文章のなかでまたこうのべている。「マルクスの弁証法適用はまことにみごとなものだったので、現在、東洋（日本、インド、中国）で、新しい諸階級が——すなわち、地球人口の大部分を占め、これまでその歴史的無活動と歴史的な眠りによつてヨーロッパの多くの先進国における停滞と腐朽の原因となつていた幾億の人びとが、日に日に生命と闘争に目ざめていき、新しい諸民族と新しい諸階級が日に日に生命に目ざめていくそのことが、マルクス主義の正しさをますます確証している。」<sup>⑫</sup>

一九五七年のモスクワ宣言は、歴史の経験をしめくり、社会主義の道へすすむ国々にあま

ねく適用できるいくつかの主要な法則を提起した。モスクワ宣言の提起している共通の法則の第一条は、「マルクス・レーニン主義政党中央とする労働者階級が勤労大衆を指導して、あれこれの形のプロレタリア革命をおこない、あれこれの形のプロレタリアート独裁をうちたてる」<sup>⑧</sup>ということである。トリアツチ同志らの「社会主義への「イタリアの道」というものは、ほかでもなく、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁というこのもつとも根本的な原則をなげすて、モスクワ宣言の確認したこのもつとも根本的な法則を否定するものにはかならない。

マルクス・レーニン主義の普遍的真理と根本的原理に反対するものは、必然的にマルクス・レーニン主義の全一的な世界観に反対し、「その根本的な理論的基礎——弁証法、全面的で矛盾にみちた歴史的発展についての学説——を掘りくずしてしまふ」<sup>⑨</sup>

モスクワ宣言は、マルクス・レーニン主義の世界観についてつぎのように書いている。

「マルクス・レーニン主義の理論的基礎は弁証法的唯物論である。この世界観は、自然、社会と人間思维の発展の普遍的法則を反映している。この世界観は、過去、現在、未来をとわず有効である。弁証法的唯物論に対立するものは形而上学と観念論である。マルクス主義政党が諸問題を検討するさいに弁証法および唯物論にもとづかなければ、それは一面性と主観主義をうみ、思想を硬化させ、実践から遊離させ、事物や現象を正しく分析する能力をうしなわせ、修正主義ま

たは教条主義のあやまり、政治上のあやまりをもたらす。実際活動で弁証法的唯物論を適用し、マルクス・レーニン主義の精神で働き手と広はん大衆を教育することは、共産党、労働者党の緊急な任務の一つである」<sup>⑩</sup>

いま、いちぶの人びとは、モスクワ宣言のこのきわめて重要な論点をまったく軽蔑し、かれらじしんをマルクス・レーニン主義の世界観と対立する地位においている。かれらはひじょうに唯物証法をにくみ、弁証法を「二面的な態度」とか「スコラ哲学」とかといっている。かれらは旧い修正主義者とおなじく、「ヘーゲルを『死んだ犬』としてとりあつかい、そして自分自身は観念論を、ただヘーゲルの観念論の千倍もあさはかで月なみな観念論を説きながら、弁証法にむかつて軽蔑したように肩をすくめてみせる」<sup>⑪</sup>。こうした人びとが唯物証法に攻撃をかけてくるねらいは、あきらかにかれらの現代修正主義という商品を投げ売りすることにある。

もちろん、マルクス・レーニン主義の世界観は修正主義と対立するばかりでなく、教条主義とも対立する。

われわれがマルクス・レーニン主義の普遍的真理を堅持すると同時に、教条主義にも反対しなければならぬのは、教条主義が革命の具体的実践をはなれ、マルクス・レーニン主義を型にはまった公式と見なすからである。

マルクス・レーニン主義がつねに活気にみちあふれ、打ちやぶりえないのは、それが革命の実践のなかから生まれ、発展をとげ、新しい革命の実践のなかからたえまなく新しい経験をくみとり、たえまなく自己をゆたかにしているからである。

レーニンはつねづね、マルクス主義は最高限度の厳密な科学性を革命性と結びつける、とのべている。かれはこう言ったことがある。「マルクス主義が、他のすべての社会主義理論から区別される点は、客観的な事態と客観的な進化過程とを分析するばあいの完全な科学的冷静さと、大衆の——そしてまた、もちろん、あれこれの階級との結びつきをさぐりだし実現する能力をもつ個々の人物、グループ、組織、党の——革命的精力、革命的創造力、革命的創意の意義のもつとも断固たる承認とを、みごとに結合していることである」<sup>②</sup>と。

このレーニンのことばは、われわれがマルクス主義の普遍的真理を堅持すると同時に、革命の実践からはなれ、人民大衆から浮きあがった教条主義にも反対しなければならない、ということのを的確に物語っている。

毛沢東同志がマルクス・レーニン主義の普遍的真理の堅持と教条主義反対というこの二つの面の相互のつながりについてのべたことは、レーニンの観点とまったく一致している。毛沢東同志は認識の問題を論ずるにあたってつぎのようにのべている。

「人類の認識運動の順序からいうと、それは、つねに、個別的なまた特殊な事物の認識から、一般的な事物の認識へとしたいに、拡がってゆく。人びとは、つねに、まずさいしよに多くのことなつた事物のもつ特殊な本質を認識しなければ、もつとすすんで、これを概括する作業をやり、いろいろな事物の共通の本質を認識するところまではゆけない。すでにこの共通の本質を認識すると、人びとは、この共通の認識を手びきとして、まだ研究されていないか、まだふかく研究されていない、いろいろな具体的な事物についての研究をひきつづきおこなつて、その特殊な本質をさがしたのであり、こうして、はじめて、この共通の本質についての認識を補い、豊富にし、発展させることができるのであり、この共通の本質についての認識がひからびた、死んだものにならないようにするのである」<sup>④</sup>と。

教条主義の誤りは、マルクス・レーニン主義の普遍的真理、いいかえると、マルクス・レーニン主義の根本的原理をひからびた、死んだものにかえようとするところにある。

教条主義は、もう一方の側からマルクス・レーニン主義をゆがめるものである。かれらは、実際からはなれて、ある抽象的なからつぱの公式を考え出すか、外国の経験を鵜のみにして、それを大衆におしつけ、それによつて大衆の闘争をおさえ、大衆の闘争がしかるべき結果をえられないようにする。かれらは、時間、場所、条件などにかかわりなく、ただ一種の闘争方式にすぎ



つくだけで、いかなる国の人民大衆の革命運動も複雑きわまりない方式をとるといことがわからず、さまざまの必要な方式を同時にとつて補いあわねばならぬといことがわからず、また、情勢が変わつたときには、新しい方式を古い方式にとつてかわらせるか、古い方式に新しい内容を盛り込まなければならないといことがわからない。したがつて、かれらはしばしば大衆から浮きあがり、かちとることのできる同盟者から浮きあがつて、セクト主義の誤りをおかすことになる、また、しばしば軽はずみなふるまいをして、冒險主義の誤りをおかすことになる。

もしもある党の指導機関が教条主義のあやまりをおかすなら、この党は革命の實際運動の法則をつかむことができず、理論的にはすっかり生氣がなくなるし、戦術的にはかならずつぎつぎと誤りをおかすことになる。こうした党は、自国の人民の革命運動を勝利にみちびくことが絶対にできない。

毛沢東同志は、わが党内で教条主義に反対し、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践との結合を強調したさい、マルクス・レーニン主義的態度とはマルクス・レーニン主義の理論と方法を運用して周囲の環境にたいする系統的なめんみつな調査と研究をおこなうことであると指摘した。毛沢東同志はつぎのようにいつている。

「こうした態度のもとでは、目的をもつてマルクス・レーニン主義の理論を研究し、マルク

ス・レーニン主義の理論を中国革命の實際運動と結びつけ、中国革命の理論問題や戦術問題を解決するために、そこから立場を見だし、観点を見だし、方法を見だすのである。このような態度が、的をさだめて矢をはなつ態度である。『的』とは中国革命のことであり、『矢』とはマルクス・レーニン主義のことである。われわれ中国の共産主義者が、この『矢』をさがしあてるのは、中国革命と東方革命といふこの『的』を射あてるためである。このような態度が実事求是の態度である。『実事』とは客観的に存在する一切の事物のことであり、『是』とは客観的な事物の内部的なつながり、つまり法則性であり、『求』とはわれわれが研究することである。われわれは、国の内外、省の内外、県の内外、区の内外の實際の状況から出発し、そのなかから、それに固有な、憶測によつて作り上げたものではない法則性、すなわち、周囲のできごとの内部的なつながりをみいだして、それを、われわれの行動の手引きとしなければならない。そして、このようにするためには、主観的な想像にたよるのではなく、一時的な情熱にたよるのではなく、死んだ書物にたよるのではなくて、客観的に存在する事実にもとづいて、資料を細部にいたるまで自分のものにし、マルクス・レーニン主義の一般の原理にみちびかれながら、これらの資料のなかから、正しい結論をひきださなければならぬ」と。

中国共産党の歴史、中国革命の勝利の歴史は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革

命の具体的実践を日ましに結びつけてきた歴史にはかならない。こうした結合がなければ、中国革命の勝利は思いもよらないことであつた。

### 原則性と融通性

「原則的な政策は唯一の正しい政策である」——これはレーニンの名言である。マルクス主義が種々さまざまな日和見主義の思潮にうち勝ち、国際労働運動のなかで支配的な地位をしめることができたのは、マルクスとエンゲルスが原則的な政策を堅持したからである。レーニン主義がひきつづき種々さまざまな修正主義と日和見主義の思潮にうち勝つて、十月革命を勝利にみちびくことができ、また新しい時代の国際労働運動のなかで支配的な地位を占めることができたのは、レーニンが、つづいてスターリンが、マルクスとエンゲルスの事業をうけつぎ、原則的な政策を堅持したからである。

それでは、原則的な政策とはどういうものだろうか？ それはつまり、われわれのうち出し、定める政策がすべて、プロレタリアートの立場にもとづき、プロレタリアートの根本的利益にもとづかねばならないということ、マルクス・レーニン主義の理論にもとづき、マルクス・レーニン主義の根本的観点にもとづかねばならないことである。プロレタリアートの政党は、目

先の利益だけに気をとられてはならず、風向きしたいのふるまいをして根本的利益をなげ捨ててしまふのであつてはならない、また、目先のできごとに調子をあわせるだけであつてはならず、ときによつてこれに賛成したり、あれに賛成したり、また、これを主張したり、あれを主張したりして、まるで商品のように原則を取り引きするのであつてはならない。いいかえると、プロレタリアートの政党は自己の政治的独立性をたもち、思想的にも、政治的にも、自己をあらゆる他の階級とその政党から区別しなければならない、たんに、地主階級やブルジョアジーから区別しなければならないだけでなく、小ブルジョアジーからも区別しなければならない。党内では、マルクス・レーニン主義者は、さまざまな非プロレタリア思想を反映した右より、または「左」よりの日和見主義者から自己を区別しなければならない。

ある人びとは、ついきのうモスクワ宣言とモスクワ声明に署名し、宣言と声明の提起している革命的な根本原則に同意したかと思うと、きようはもうこれらの革命的な原則をふみにじつてしまう。ある人びとは今しがた、モスクワ声明に署名し、「ユーゴスラビア共産主義者同盟の指導者はマルクス・レーニン主義を裏切つた」④というこの声明の断定に同意したかと思うと、やがてまもなくチトールの裏切り者をもつとも親密な兄弟とみなす。ある人びとは、「アメリカ帝国主義は世界の反動勢力のおもなとりであり、国際的憲兵であり、全世界の人民の敵である」④

というこの声明の断定に同意したが、やがてまもなく人類の運命は米ソ両国首脳の「協力」、「信頼」、「合意」によって左右されるというふうに見える。ある人びとは、宣言と声明の規定する兄弟党、兄弟国の相互関係についての準則に同意したかと思うと、やがてまもなくこれらの準則をなげ捨ててしまい、自党の大会でかつて気ままに他の兄弟党、兄弟国を公然と非難する。かれらは、兄弟党のあいだのイデオロギーの相違を経済と国家関係にまでおしひろげること断じて許さないと口々にとなえながら、自分じしんは兄弟国のあいだに調印された多くの経済上、技術上の契約をほしのままに破棄し、実際には他の兄弟国との外交関係までも断絶してしまう。ある人びとは、国際労働運動の主要な危険は修正主義であるという宣言と声明の断定に同意したかと思うと、やがてまもなく、「教条主義は主要な危険である」ということをさかんに宣伝する。そのほか、実例はいくらかもある。かれらの行動にはどのような原則性があるのだろうか？ かれらの政策はどのような原則にもとづいた政策なのであろうか？

プロレタリアートの政党は原則的な政策を堅持するときでも、融通性をもたなければならぬ。革命闘争のなかで、機にのぞんで変に応ずるとか、まわり道をしながら前進するといったことを否定するのは誤りである。マルクス・レーニン主義者と日和見主義者、修正主義者との区別は、マルクス・レーニン主義者の主張する融通性が原則的な政策を実行する融通性であるの

にたいし、日和見主義者、修正主義者の融通性が実際には原則的な政策を放棄するものであることにある。

原則性にもとづく融通性は日和見主義ではない。それとは反対に、もしも具体的な条件にもとづき、原則を堅持する基礎のうえに立って、必要な融通性をもたせ、時機にかなった行動をとるということがわからず、革命闘争に不当な損失をもたらすなら、それは日和見主義の誤りをおかすことになる。

妥協の問題は、融通性の重要な問題のひとつである。

マルクス・レーニン主義者ほもともと、革命に役だつ必要な妥協、つまり原則にもとづく妥協は拒絶しないが、変節的な妥協、つまり無原則的な妥協はいかなるときでも許さない——これが妥協の問題にたいするマルクス・レーニン主義者の見方である。

レーニンはいみじくもつぎのように言っている。

「マルクスとエンゲルスが科学的社会主義の創始者とみなされているのは、理由のないことではない。彼らは、あらゆる空文句の仮借ない敵であった。彼らは社会主義の問題（社会主義戦術の諸問題をもふくめて）を科学的に立てることをおしえた。そして十九世紀の七〇年代に、エンゲルスがパリ・コンミュニョンの亡命者であるフランスのブランキストの革命的宣言を検討するこ

とになったとき、エンゲルスは彼らにむかつて率直に、「いかなる妥協もしない」という彼らの高慢な声明は単なる空文句である、と述べた。いつさい妥協をしないとちかうことはできない。ときにはさまざまの事情から、もつとも革命的な階級のもつとも革命的な党でさえも妥協しなればならなくなることがある。問題はこうした妥協をつうじて、労働者階級とその組織された前衛、共産党の革命的な戦術と組織、革命的な意識、決意、訓練を保持し、強化し、またえ、発展させる能力をもつことにある。」②④

事実にもとづいて真理をもとめる真のマルクス・レーニン主義党は、ただばく然といつさいの妥協に反対することがどうしてできるだろうか？ 『紅旗』誌の今年度第一号にかかげられた「レーニン主義と現代修正主義」と題する社説は、「われわれ中国の共産主義者は、長い期間にわたる革命闘争のなかで、国内外の敵とたびたび妥協したことがある。われわれは蒋介石反動派と妥協したことがあるし、抗米援朝のたたかいではアメリカ帝国主義と妥協したこともある、そのほかにもまだこうした例はある」どのべている。この社説はまた、われわれ中国の共産主義者は、ほかでもなく、レーニンのおしえにしたがつて、「妥協の性質を見分け、人民の事業に役立つ妥協に賛成し、世界平和に役だつ妥協に賛成し、裏切りになるような妥協に反対している。問題はきわめてはつきりしている。ときに冒険主義の誤りをおかし、ときに投降主義の誤りをおか

すもの、そうした人びとの思想こそが真にトロツキズムであり、あるいは形をかえたトロツキズムなのである」とものべている。

周知のとおり、ブレストリトウスク講和条約の締結の過程で、また、ロシア革命とソ連建設の歴史ぜんたいをつうじて、トロツキーはひじょうに恥ずべき役割をはたした。トロツキーは、すべての主要な問題でレーニンに反対し、レーニン主義に反対した。トロツキーは、社会主義革命と社会主義建設がまず一国で勝利をおさめうることを否定した。かれは、革命の戦略と戦術の問題ですこしも原則性がなく、ときに「左」翼冒険主義となつたり、ときに右翼投降主義となつたりした。ブレストリトウスク講和条約事件で、かれはさいしょ盲目的に冒険主義的政策をとることを主張した。そのごブレストリトウスク講和会議に出席したときにはまたレーニンの指令にそむいて、講和条約の締結を拒絶するとともに、反逆的な声明をドイツ側にたいして発表し、ソビエト共和国は戦争をやめ、軍隊の復員をおこなうつもりだとドイツ側に通告した。このために、侵略者の鼻息はますます荒くなり、ドイツはいっそう苛酷な講和条件を提出したのであつた。これがつまりブレストリトウスク講和条約事件のトロツキズムである。いま、ある人は、キューバ事件とブレストリトウスク講和条約事件という性質のまったく異なる二つの問題をむりやりにくつつけて、歴史的な類比をおこない、自分を「レーニン」になぞらえ、他国の主権を犠牲にす

ることに反対する人びとを「トロツキー」とよんでいる。これはまったく途方もない馬鹿げたことである。

当時レーニンがブレストリトウスク講和条約の締結を主張したのはまったく正しい。レーニンがそうしたのは、時をかせいで、すでにおさめた十月革命の勝利をうちかためるためであつた。一九三六年、毛沢東同志は、『中国革命戦争の戦略問題』のなかで、「左」翼日和見主義の誤りをきびしく批判した。毛沢東同志は、ブレストリトウスク講和条約にふれたさい、「十月革命後、ロシアのボルシェビキ党が、もし『左翼共産主義者』の意見にしたがつて、ドイツとの講和条約を拒否しておれば、うまれたばかりのソビエトにはたちまち天折の危険がやってきたであろう」<sup>(25)</sup>とのべている。事態の発展はレーニンの予見を実証し、ブレストリトウスク講和条約の締結が一種の革命的な妥協であつたことを物語っている。

キューバ事件はどうか？ これはまったく別のことである。この事件で、キューバ人民とその領袖は、死を賭して祖国の主権をまもりぬく決意をかため、偉大な英雄主義と高度の原則性をしめした。かれらは、冒険主義の誤りもおかさなかつたし、投降主義の誤りもおかさなかつた。キューバ事件で、あるものはまず冒険主義の誤りをおかし、ついでまた投降主義の誤りをおかし、キューバ人民に祖国の主権を犠牲にする屈辱的な条件をうけいれさせようとした。これら

の人びとはレーニンのブレストリトウスク講和条約締結の実例をあげて自分をおおいかくそうとしているが、実際には小手先をきかしそこなつて、いつそはつきりと自己をバクロすることになつてしまった。

原則性と融通性の相互関係という問題については、劉少奇同志が中国共産党第七回大会の席上、中国革命の経験にもとづいてつぎのようにのべている。

「われわれの融通性は一定の原則のもとでの融通性である。無原則的ないわゆる融通性、原則をふみはずした譲歩と妥協、原則のうえでのあいまいさと混乱などはすべてまちがっている。党の原則はあらゆる政策および戦術の変更にの基礎であり、尺度である。党の原則性は融通性の基礎であり尺度である。たとえば、最大多数の人民の最大利益のために闘うことはわれわれの不変の原則の一つである。この不変の原則は、われわれのあらゆる政策および戦術の変更が正しいかどうかを測定する基準であり尺度である。この原則に合致した変更はすべて正しいが、この原則に合致しない変更はすべて正しくない」<sup>(26)</sup>と。

これが、原則性と融通性の相互関係についてのわれわれの見かたである。こうした見かたはマルクス・レーニン主義的なものである、とわれわれは考える。

- ① 「なにをなすべしか?」。『レーニン全集』第五卷
- ② 「ロシア共産党(ボ)第十回全国協議会」。『レーニン全集』第三二卷
- ③ 「共産党・労働者党のモスクワ会議の宣言」
- ④ 「各国共産党・労働者党代表者会議の声明」
- ⑤ 「一九六二年十月十三日の週刊誌『リナチタ』の「『チトー』一味』を論ず」を参照
- ⑥ 「一九六二年十二月十四日フランス共産党中央委員会総会で採択された決議」
- ⑦ 『マルクス・エンゲルス二巻選集』第一卷
- ⑧ 「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」。『レーニン全集』第九卷
- ⑨ 「革命的冒険主義」。『レーニン全集』第六卷
- ⑩ 『レーニン全集』第二五卷
- ⑪ 「一九六三年一月十六日のフランス共産党中央委員会機関誌『フランス・ヌヴェル』の「われわれはどのような時代に生きているか」を参照
- ⑫ 「一九六三年一月十六日付の『ユマニテ』の「われわれの団結とわれわれの紀律」を参照
- ⑬ 「『共産主義』」。『レーニン全集』第三二卷
- ⑭ 「矛盾論」。『毛沢東選集』第一卷
- ⑮ 『毛沢東選集』第三卷

- ⑯ 「政治情勢と労働者階級の任務」。『レーニン全集』第一一巻
- ⑰ 「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」。『レーニン全集』第一九巻
- ⑱ 「レーニン全集』第一八巻
- ⑲ 『レーニン全集』第三三巻
- ⑳ 「マルクス主義の歴史の発展の若干の性質について」。『レーニン全集』第一七巻
- ㉑ 「マルクス主義と修正主義」。『レーニン全集』第一五巻
- ㉒ 「ホイコットに反対する」。『レーニン全集』第一三巻
- ㉓ 「われわれの学習を改革せよ」。『毛沢東選集』第三巻
- ㉔ 「妥協について」。『レーニン全集』第三〇巻
- ㉕ 『毛沢東選集』第一卷
- ㉖ 「党を論ず」

## 八、万国のプロレタリアは団結しよう

「万国のプロレタリア団結せよ！」マルクスとエンゲルスが百年あまりまえにうち出したこの偉大な呼びかけは、永遠に国際プロレタリアートのまもらなければならぬ準則である。

中国共産党は一貫して、国際共産主義運動の団結を堅持し、この団結をまもることを自己の神聖な義務とみなしている。この問題については、ことし一月二十七日付の『人民日報』社説が、われわれの立場をかさねてあきらかにしている。この社説はつぎのようにのべている。

「国際共産主義運動の隊列はとどのつまり団結する必要があるのか、ないのか？ とどのつまり、必要なのは真の団結なのか、みせかけの団結なのか？ とどのつまり、必要なのはどのような基礎にたつ団結なのか、モスクワ宣言とモスクワ声明を基礎とする団結なのか、それともユーゴスラビアの修正主義的綱領を基礎とする『団結』、もしくは他のなんらかのものを基礎とする『団結』なのか？ 言いかえれば、とどのつまり必要なのは意見の相違をなくして団結をつよめる

ることなのか、それとも意見の相違を大きくして分裂をうみ出すことなのか？ こういう問題である。

「中国の共産主義者がすべてのマルクス・レーニン主義者、全世界の進歩的な人びととともに一致してのぞんでいることは、団結をまもり、分裂に反対すること、真の団結をもとめ、みせかけの団結に反対すること、国際共産主義運動の団結の共同の基礎をまもり、この基礎の破壊に反対すること、モスクワ宣言とモスクワ声明の基礎のうえに立つて社会主義陣営の団結をまもり、つよめ、国際共産主義運動の団結をまもり、つよめることである」

これこそ、国際共産主義運動の団結の問題にたいする中国共産党の確固不動の態度である。

いちぶの人びとは、中国共産党その他の兄弟党にたいして途方もない一連の攻撃をおこし、この攻撃を組織したのち、とつぜんまた「団結」の歌をうたいはじめている。だが、かれらのいう「団結」とは、じぶんは他人を罵倒してもよいが、他人には道理をのべることも許さないというものである。かれらのいう「公然たる論戦の停止」とは、じぶんはかつて気ままに他人を攻撃してもよいが、他人には必要な回答をすることも許さないというものである。かれらは、一方では団結を口にしながら、他方ではひきつづき団結を破壊しており、一方では公然たる論戦をやめようといひながら、他方ではひきつづき公然たる攻撃をおこなっている。かれらはまた威嚇的な口

調で、かれらに攻撃された人びとがもしも口をつぐまなければ、「ひきつづき断固たる闘争をすすめなければならず、さらにこの闘争をつよめさえもするであろう」といつている。

ところが、これらの人びとはチトー一味にたいしては真正銘の団結をもとめている。かれらもともとめているのは、チトー一味との団結であつて、国際共産主義運動の団結ではない。かれらもともとめているのは、チトー一味を代表とする現代修正主義の基礎のうえに立つ団結、あるいはいちぶのひとの指揮棒の基礎のうえに立つ団結であつて、マルクス・レーニン主義の基礎のうえに立つ団結、モスクワ宣言とモスクワ声明の基礎のうえに立つ団結ではない。このように、かれらが口にする団結は、その実、分裂の代名詞にほかならない。かれらは団結を表看板にして、かれらが実際にすすめているその分裂の活動をおおいにかくそうとしている。

修正主義は労働貴族の利益を代表し、したがつてまた、反動的なブルジョアジーの利益を代表している。修正主義の思潮はプロレタリアートの利益にそむき、人民大衆の利益にそむき、あらゆる被抑圧人民と被抑圧民族の利益にそむいている。ベルンシュタインらしい、修正主義、日和見主義の思潮は、たびたびマルクス・レーニン主義を攻撃し、しばし大いにわめきたてたものであつた。だが、歴史が立証しているように、マルクス・レーニン主義は最大多数の人びとの最大利益を代表しており、必勝不敗である。革命的マルクス・レーニン主義に挑戦した修正主義者、

日和見主義者はすべて真理のまえにつきつぎと倒れさり、大衆につきつぎと見捨てられていった。ベルンシュタインが失敗し、カウツキーが失敗し、ブレハーノフが失敗し、トロツキーが失敗し、ブハーリンが失敗し、陳独秀が失敗し、ブラウダーが失敗した……。いま、いちぶの人びとが革命的マルクス・レーニン主義にあらたな攻撃をくわえているとき、その鼻息はひじょうにあらく、その気炎はじつにすさまじいとしても、しかし、かれらがあくまで勧告を聞かず、あくまで迷いからさめないなら、かれらの末路はけつして旧い修正主義者、旧い日和見主義者よりもましであるはずがない、われわれはそう断言することができる。

いちぶの人びとは多くの不正な手口をつかい、デマ、中傷の手口をつかい、離間、挑発の手口をつかつて、やつきになつて分裂をつくり出している。だが、全世界の圧倒的多数の人びとは国際共産主義の隊列の団結をもとめ、分裂に反対している。いちぶの人びとの分裂活動、中国共産党その他の兄弟党を攻撃する活動、社会主義陣営の団結を破壊する活動、国際共産主義運動の団結を破壊する活動は、世界の圧倒的多数の人びとの願いにそむき、まったく人心をえていない。うわべは団結、実際には分裂というかれらの手口を、人びとはその目ではつきりと見ぬくことができる。史上、マルクス・レーニン主義を裏切つた分裂主義者で、まともな最期をとげたものはまだ一人もいないのである。われわれはかつて分裂をつくり出した人びとに「崖っぷちで手



綱をひきしめよ」とすすめたが、あるものはいまだにわれわれの勧告をうけいれようとしていない。かれらは、まだ「崖つぶち」にはきていないと考え、いつこうに「手綱をひきしめる」つもりがない。見上げるころ、かれらはまだひきつづき分裂活動をすすめることに興味をもっているようである。かれらがどうしても騒ぎたいのなら、かれらに騒がせておこうではないか。大衆がかれらに結論をくだすであろうし、歴史がかれらに結論をくだすであろう。

いま、国際共産主義運動にはじょうに興味のある現象があちこちにあらわれている。それはどういう現象であろうか？ マルクス・レーニン主義の真理をそっくりつかんでいると自称する英雄たちは、かれらじしんけんめいに非難している「教条主義者」、「セクト主義者」、「分裂主義者」、「民族主義者」、「トロツキスト」といった人びとがかれらの攻撃にこたえて書いた文章を大いに恐れているということがそれである。かれらは新聞、雑誌にそれらの文章を発表する勇氣がない。かれらは鼠のようにきもつ玉が小さく、おびえきつている。かれらは、われわれの回答した文章を自国の人民に読ませる勇氣がなく、水ももらさぬような厳密な封鎖をする。

さらには、強力な電波で妨害してまでも、人民にわれわれの放送を聞かせない。真理をそっくりつかんでいるという愛すべき友人たちよ、同志たちよ、諸君はわれわれの文章をまちがっていると断定する以上、どうしてこれらのまちがった文章をぜんぶ発表し、逐条的に反駁をくわえ、諸

君の国内の人民のあいだに義憤をひきおこし、諸君が「教条主義」、「セクト主義」、「反マルクス・レーニン主義」といつているその「邪道」にたいし義憤をいだかせようとしはないのか？

諸君はどうしてそうする勇氣がないのか？ どうしてドラムかんのように密封してしまうのか？ 諸君は真理を恐れているのだ。いま、ひとつの「教条主義」——真のマルクス・レーニン主義の巨大な妖怪が全世界を徘徊し、この妖怪が諸君をおびやかしている。諸君は人民を信じないから、人民も諸君を信じない。諸君は大衆から浮きあがっている、だからこそ、諸君は真理を恐れ、かくもこつけないほどおびえあがってしまう。友人たちよ、同志たちよ、度胸があるなら前へ出ろ。そして、互いに相手が自己を批判した文章をぜんぶ発表し、全国人民、全世界人民に考えさせて、誰が正しいか、誰がまちがっているかを判断させようではないか。われわれはそうしているのだ。われわれは諸君がわれわれを手本として学ぶよう希望する。われわれは大胆に諸君のものをすべて全文公表した。われわれは、諸君がわれわれを罵倒した「偉大な」作品をぜんぶ公表したのち、逐条的あるいは要約的に諸君に反駁して、これをわれわれの回答としている。ときには、諸君の文章を掲載するだけで、回答をおこなわず、読者じしんに考えさせることもある。それでもなお、公平でなく、条理にあわないなどといえるだろうか？ 現代修正主義の旦那たちよ、諸君はこうする勇氣があるかどうか？ 度胸があるなら、やれるだろう。心にやましい

ところがあるもの、空威張りをしているもの、うわべは牛のように鼻息があらくても、実際には鼠のようにきもつ玉の小さいものなら、そうすることができないだろう。われわれは、諸君にそうする勇気がないと断定する。そうではないだろうか？　ひとつ、答えていただきたい。

中国共産党の考えでは、意見の相違を解決する道はある。その道は、モスクワ宣言とモスクワ声明のさししめす道にはかならない。本文を終わるにあたって、われわれはつきにモスクワ宣言の重要な結論を引用しておきたい。

「会議の参加者は、意見を交換した結果、今日の条件のもとでは、指導的な活動家の会談や二党間の情報交換とならんで、必要に応じてもつと広範囲の共産党・労働者党会議をひらいて、緊急な問題を討議し、経験を交換し、相互の見解と立場を知りあい、共通の目標である平和と民主主義、社会主義のための共同闘争を調整することが目的にかなっているという結論に到達した」われわれはまた、モスクワ声明がとりきめた兄弟党の關係の基本準則にかんすることばをいく段か引用しておきたい。

「帝國主義反動が勢力を結集して共産主義との闘争をおこなっている状況のもとでは、全力をつくして世界共産主義運動を團結させることがとくに必要である。統一と團結は、われわれの運動の力を何倍にもし、偉大な共産主義の大業を破竹の勢いで前進させ、敵のあらゆる攻撃を成功

裏に撃退するための頼もしい保証をつくりあげている。

「全世界の共産主義者は、マルクス・レーニン主義の偉大な教えとその実現をめざす共同闘争で結ばれている。共産主義運動の利益は、兄弟諸党の会議で共同でつくりあげた反帝、平和、民主主義、社会主義のための闘争の共通の課題にかんする評価と結論を各共産党が連帯して守ることを要求している。

「労働者階級の事業の利益をめざしてたたかうためには、それぞれの共産党の隊列と、万国の共産主義者の大部隊の隊列をますます強く團結させ、その意志と行動を統一しなければならぬ。国際共産主義運動の團結を不断に強化することに心を使うことは、それぞれのマルクス・レーニン主義党の最高の國際的義務である。

「マルクス・レーニン主義とプロレタリア國際主義の諸原則にもとづいて國際共産主義運動の團結をかたく守ること、この團結をみだすおそれのあるいかなる活動も許さないことは、民族獨立、民主主義と平和のためのたたかい、社会主義革命、社会主義建設と共産主義建設の諸任務を成功裏に解決するためのたたかいで勝利をおさめるうえに欠くことのできない条件である。この原則をおかすことは共産主義の勢力を弱めることになる。

「すべてのマルクス・レーニン主義党は、獨立した平等な党であり、各国の具体的条件に応

じ、マルクス・レーニン主義の諸原則にしたがつてそれぞれの政策をたてており、しかも互いに支持しあつてゐる。それぞれの国の労働者階級の事業を成功させるためには、すべてのマルクス・レーニン主義党の国際的連帯が必要である。それぞれの党は自国の労働者階級と勤労者にして、また国際的な労働運動と共産主義運動全体にたいして責任をもつてゐる。

「共産党と労働者党は必要に応じて会議を開き、緊急な諸問題を討議し、経験を交換し、互いの見解と立場を知りあい、相談によつて見解を統一し、共通の目的をめざすたかにおける共同行動を協定してゆく。

「もしいずれかの党に他の兄弟党の活動にかんする問題が生じた場合には、その党の指導部は相手の党の指導部に話をもちかける。もし必要があれば会議を開き相談をおこなう。

「この数年間におこなわれた各国共産党代表の会合の経験と成果、とくに一九五七年十一月と今回の二つの大きな会議の成果が示しているように、いまの条件のもとでは、このような会議は、意見と経験を互いに交換し、集団の努力でマルクス・レーニン主義理論をいつそう豊かにし、共通の目的をめざすたかにおける統一された立場をつくりあげるうえで効果的な形態である。」

一年あまりまえに、ある党が自己の大会で他の兄弟党に公然たる攻撃をくわえるという事件が

おこつていろいろ、われわれは、上述のモスクワ宣言とモスクワ声明が提起した原則と方法にもとづいて兄弟党のあいだの意見の相違を解決することをたびたび呼びかけてきた。われわれは、いかなる兄弟党にたいしても公然と一方的な攻撃をくわえることは問題の解決に役立たず、団結に役立たないことを、たびたび指摘してきた。われわれは、論争と意見の相違をもつ兄弟党、とりわけ最初に攻撃をおこした党がイニシアチブをとつて、公然たる論戦をやめ、内部の話しあひの軌道にもどるべきであると、一貫して主張してきた。われわれはいまもなおそう主張している。

一九六二年四月、中国共産党中央委員会は関係ある兄弟党にたいし、われわれはいちぶの兄弟党の提起した兄弟党会議開催の主張を心から支持しており、各国共産党・労働者党代表者会議を開催して、みんなが関心をもつ問題を討論することは妥当であると考えるむね、表明しておいた。

われわれは、当時すでに、兄弟党の会議をひらいて、この会議をのみりあるものとするためには、あらかじめ多くの困難と障害を克服しておくことが必要であり、多くの準備作業をすすめておくことが必要である、といつておいた。

われわれは、当時すでに、互いに論争している兄弟党と兄弟国がそのとき以後、ごくささやかな措置でもよいから、関係の緩和と団結の回復に役だつ措置をこうじて、ふんい気をよくするこ

とにつとめ、兄弟党会議の開催と成功のために条件をととのえるよう希望しておいた。

われわれは、当時すでに、関係ある各兄弟党が公然たる攻撃をやめるべきであると提案した。

われわれは、当時すでに、いちぶの兄弟党が必要に応じて、二党間あるいは数党間の会談をおこない、たがいに意見を交換することは、兄弟党会議の成功に役だつであらうと考えた。

一九六二年四月、われわれが関係ある兄弟党に提出したこれらの意見は、まづたく条理にかなつたものであつて、兄弟党間の意見の相違解決についてのモスクワ宣言、モスクワ声明の規定に完全に合致している。われわれはこれまで何度もこうした意見について説明してきた。われわれはいまもう一度こうした意見について説明しておく。

さいきん、ある党の指導者はある程度まで、われわれの意見をうけいれれると表明している。もしもこれがまごころからのもので、言葉と行動が一致するなら、もちろん、ひじょうに結構なことであり、それはわれわれがかねてから希望していたところである。

国際共産主義運動の隊列は団結しなければならぬし、かならず団結することができる、われわれはそう考えている。

われわれは声たからかにさげぼうではないか。

万国のプロレタリアは団結しよう！

すべての被抑圧民族とすべての被抑圧人民は団結しよう！

すべてのマルクス・レーニン主義者は団結しよう！

ふたたびトリアツチ同志とわれわれとの  
意見の相違について

レーニン主義の現代におけるいくつかの重要問題

1963年3月 初版発行

定価 80 円

出 版 者 外 文 出 版 社

中 華 人 民 共 和 国  
北 京 阜 成 門 外 百 万 荘

編号: (日)3050-594

3-J-552p  
00130

- ▲万国のプロレタリアは団結してわれわれの共同の敵に反対しよう
- ▲トリアッチ同志とわれわれとの意見の相違
- ▲レーニン主義と現代修正主義

日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、アラビア語、タイ語、インドネシア語

- ▲モスクワ宣言とモスクワ声明の基礎の上に団結しよう

日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、アラビア語、タイ語、インドネシア語

- ▲意見の相違はどこからくるか  
——トレーズらの同志に答える——
- ▲ふたたびトリアッチ同志とわれわれとの意見の相違について
- ▲アメリカ共産党の声明を評す
- ▲修正主義者の鏡

日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、アラビア語、タイ語、インドネシア語、イタリア語、エスペラント